

東京大学大学院新領域創成科学研究科
国際協力学専攻

平成 30 年度

修士論文

アブラヤシ農民の焼畑回帰

インドネシア共和国東カリマンタン州における

ダヤック人の生計戦略

(Return to Swidden – The Livelihood Strategy of Dayak Tribe in
Oil Palm Area of East Kalimantan, INDONESIA)

2019 年 1 月 21 日提出

指導教員 佐藤仁 教授

沖田 広希

目次

はじめに	1
第1章 アブラヤシ農民の行動原理を理解するために	3
1-1 パーム油産業の雄－インドネシア－	3
1-2 アブラヤシ農民の成長	5
1-3 パーム油産業発展のための小農支援	6
1-4 本研究の目的と問い	7
1-5 先行研究－アブラヤシ農民の生計戦略－	9
第2章 対象地の人々と調査の方法	12
2-1 調査地の選定と東カリマンタン州	12
2-2 調査対象村の概要	14
2-3 カリマンタンの先住民ダヤック人と土地保有権制度	17
2-4 調査手法とサンプリング	20
第3章 生業の移り変わりと現在の生活	22
3-1 対象村の歴史	22
3-2 生業の移り変わり－焼畑からアブラヤシへ－	23
3-3 農民のアブラヤシ生産の状況	25
3-4 その他の収入源	27
3-5 小括	31
第4章 各階層のアブラヤシ農民の生計戦略	32
4-1 アブラヤシに依存する農民たち	32
4-2 村人の階層分け	35
4-3 世帯調査の結果と考察	39
4-3-1 「下位層」の生計活動とアブラヤシ	39
4-3-2 「上位層」の生計活動とアブラヤシ	41
4-3-3 「中間層」の生計活動とアブラヤシ	46
4-4 「中間層」が抱くアブラヤシ生産に対する不安の様相	50
4-4-1 アブラヤシへの過剰依存による生存リスクの高まり	51
4-4-2 村内社会の不平等化	52
4-4-3 焼畑農業の消失	53
4-5 小括	54
第5章 村人たちの「焼畑回帰志向」	55

5-1 焼畑復興プロジェクト	55
5-2 なぜ村人は焼畑農業の復興を望むか	56
5-2-1 生存のためのセーフティネット	56
5-2-2 焼畑民としてのアイデンティティ	58
5-3 焼畑農業復興の推進力ー政府・企業に対する反発心ー	60
5-3-1 プラズマ農園の設立時の対立ー企業 vs 村人ー	60
5-3-2 焼畑農民逮捕に関する対立ー政府 vs 村人ー	62
5-4 焼畑農業が持つ多様な機能	64
5-5 現代の農村社会における「焼畑農業」の意味	66
5-6 二重の運動 (The Double Movement) としての焼畑回帰	67
第6章 結論と課題	69
6-1 本研究のまとめと含意	69
6-2 残された課題	70
6-3 焼畑の未来を見据えて	70
参考文献	72
インターネット文献	78
付録	79
1) PT Rea Kaltim Plantations の基本情報	79
2) プラズマ分収の内訳表	80
3) 質問表リスト	81
4) 写真	83
謝辞	85

図表一覧

【表】

- 表 2-1：東カリマンタン州のアブラヤシ農園の基本データ
- 表 2-2：対象村の人口統計
- 表 2-3：各農民組合の整理
- 表 2-4：世帯調査の抽出
- 表 3-1：対象村の歴史概略
- 表 3-2：企業の搾油工場と仲買人による果房取引の比較
- 表 3-3：主な収入源の特性比較
- 表 4-1：経済階層分けの基準
- 表 4-2：Wealth Ranking の結果と階層分け
- 表 4-3：相互評価法の各基準
- 表 4-4：下位層によるアブラヤシ生産の概要
- 表 4-5：上位層によるアブラヤシ生産の概要
- 表 4-6：上位層の生計の詳細
- 表 4-7：中間層によるアブラヤシ生産の概要

【図】

- 図 1-1：アブラヤシ果房の主要生産国と生産地
- 図 1-2：各セクターのアブラヤシ農園面積の推移と全体の CPO 生産量に占める割合
- 図 2-1：対象地の地図
- 図 2-2：対象村周辺の地図
- 図 2-3：対象村の民族別割合
- 図 2-4：陸稲生産の年間スケジュール
- 図 3-1：対象村における主要な生業の移り変わり
- 図 3-2：焼畑時代からアブラヤシ時代への移り変わり
- 図 3-3：CPO が搾油されるまでのサプライチェーン
- 図 4-1：農民組合員の月間果房運搬量の基本統計
- 図 4-2：各世帯の主要収入源とその内訳
- 図 4-3：JH 氏（50 歳・男）1980 年からの生計の移り変わり
- 図 4-4：CPO 価格の変動
- 図 5-1：エルニーニョ・ラニーニャ現象年表

【写真】

- 写真 2-1：土地利用の例

- 写真 3-1：ツバメの巣と仲買人
写真 3-2：農園企業での労働者の様子
写真 4-1：豊かさランキングを行う村人
写真 5-1：焼畑復興プロジェクトに関する村人たちの会議
写真 5-2：村開発計画の策定会議
写真 5-3：畑作管理用の小屋づくりの過程

はじめに

他者を理解することは難しい。まして、生まれた地域や環境、言語、文化が異なる他者を理解することはさらに難しい。しかし、グローバル化が進み、国や地域を超えて人と人との繋がりが拡大する現代において、他者を理解すること、またはできないにしても、他者を理解しようとすることは非常に大切なことだろう。たとえば、他者の行為が一見すると「不合理」であっても。

日本から遠く離れたインドネシア共和国の農村部では、市場経済の浸透に伴って自給自足的な社会から、現金収入の獲得に代表される近代的な社会へと生活環境の変容に直面している人々がいる。例えば、カリマンタンの先住民である「ダヤック」と呼ばれる人々は、近代化の中で、焼畑を放棄し、経済収益性の高いアブラヤシの生産を開始してきた。しかし、ある農村のダヤック人たちは、今になって消失したはずの焼畑農業の復興を求めていることが分かった。これは、伝統から近代に至るまでの発展経路とは逆行するものであり、一見すると「不合理」な選択に思える。

アブラヤシ生産が浸透している地域において、焼畑に戻ろうとする農民がいるのはなぜか。この問いを明らかにすることで、本研究は「アブラヤシ農民の焼畑回帰」の合理性を理解し、アブラヤシを生産する農民の行動原理に新たな視座を与えることを目的とする。

では、なぜ私たちがアブラヤシ農民の焼畑回帰という「他者の合理性」を理解しなければならないのか。一点目に、アブラヤシから採れるパーム油は、私たちが日々何気なく消費している様々な製品に含まれており、もはや現代の生活に欠かせないほどの生産物になっているからである。二点目に、パーム油生産量第一位のインドネシアにおいて、アブラヤシ生産量の30%は小規模農家と呼ばれる農民によって占められており、パーム油産業のさらなる発展を促進するセクターとして成長が期待されているからである。つまり、インドネシアのアブラヤシ農民の合理性を理解することは、農民のアブラヤシ生産を推進する施策の質的改善や、日本人の食の安全を保障することにも寄与するということだ。

これまでアブラヤシ農民の行動原理を理解しようと数々の研究がなされてきたが、その実態を十分に理解するまでには至っていない。それは、アブラヤシの長短所を把握した上での農民の生計戦略や、不均衡な農村社会における階層ごとの生計の異なりにまで分析の視野が及んでいないからである。本研究では、これを克服するために、約3ヶ月のフィールドワークを行い、村内の階層に着目しながら農民のアブラヤシ生産の様相を分析した。また、農民の合理性を経済動機だけでなく、地域固有の社会文化的側面も分析に含めて解釈を試みた。

まず、村内の農民を階層別に分け、各階層のアブラヤシ生産の様相を把握した。次に、「焼畑回帰志向」が村内で醸成された背景や、農民が焼畑を求める目的、並びにその復興に向けた営為を分析することを通じて、対象地における焼畑農業の多面的な機能を明らかにしていく。さらに、現在の農村社会における焼畑農業の意味を再考し、市場経済が支配する社会

において「焼畑回帰」が持つ意味を考察していく。

本論文は以下のように展開していく。第1章では、世界のパーム油産業を概観し、インドネシア国内でのパーム油産業拡大に寄与した要因を様々な開発政策と紐づけながら整理する。そして、小規模農家が産業の発展に欠かせない存在として認識されるようになった過程を描きながら、研究の目的と問いを提示し、アブラヤシ農民の生計戦略に関する先行研究を整理する。第2章では、調査対象地であるプラウピナン村やそこで生活する人々を概観し、調査手法とサンプリング方法について説明を加える。第3章では村人の生業の移り変わりと、農民のアブラヤシ生産の方法、アブラヤシ以外の主収入源の様子を説明する。続く第4章にて、村人のアブラヤシへの依存度を測り、階層分けした後に、階層ごとに異なるアブラヤシを含んだ生計の様相を世帯調査の結果から明らかにしていく。第5章では、「焼畑回帰志向」が育まれた背景を整理し、焼畑農業を求める農民の目的だけでなく、焼畑農業が持つ多様な機能を考察していく。加えて、現代の農村社会における焼畑農業の意味も再考する。最後の第6章にて全体をまとめ、今後の課題を提示して本論文を終える。

第1章 アブラヤシ農民の行動原理を理解するために

本研究の目的はアブラヤシを生産する農民の行動原理に新たな視座を与えることである。本章では、目的に至るまでの背景として、パーム油産業全体の中でも、なぜインドネシアが注目され、さらには「小規模農家」と呼ばれる農民のアブラヤシ生産がなぜ重要なのか、統計資料やインターネット文献を元に説明していく。農民の行動原理を理解することは往々にして難しいが、東カリマンタンのアブラヤシ農民も一見すると「不合理」な行動を選択している。本研究では、現地での事例をもとに問いを設定し、答えを出す過程でアブラヤシ農民の合理性を解明していきたい。アブラヤシ農民の生計戦略に関する先行研究の到達点と限界点を示し、本研究の着眼点、および分析の枠組みを提示する。

1-1 パーム油産業の雄—インドネシア—

パーム油 (*Crude palm oil: CPO*) とはアブラヤシ (学名: *Elaeis guineensis*) 果房の果肉部分から採油した油脂のことである¹。大豆油やひまわり油などの他の植物油より低価格であることや、単位面積あたりの収量が格段に大きいことから、1990年以降から急速に世界需要を伸ばし、世界で最も消費される植物油になった (Stone 2007)。

アブラヤシの原産地は中央アフリカであるが、現在ではインドネシア、マレーシア、ナイジェリア、コロンビア、タイなどの赤道付近の熱帯雨林地方を中心に世界各地で栽培されている。東南アジアでは1960年代にマレーシアにおいて大規模プランテーションが造られたが、後を追うように1980年代にプランテーションを開始したインドネシアが2007年には世界第一位の生産国になった (Direktorat Jenderal Perkebunan 2017)。インドネシア国内では主にスマトラ島やカリマンタン島などでアブラヤシが栽培されている (図 1-1)。

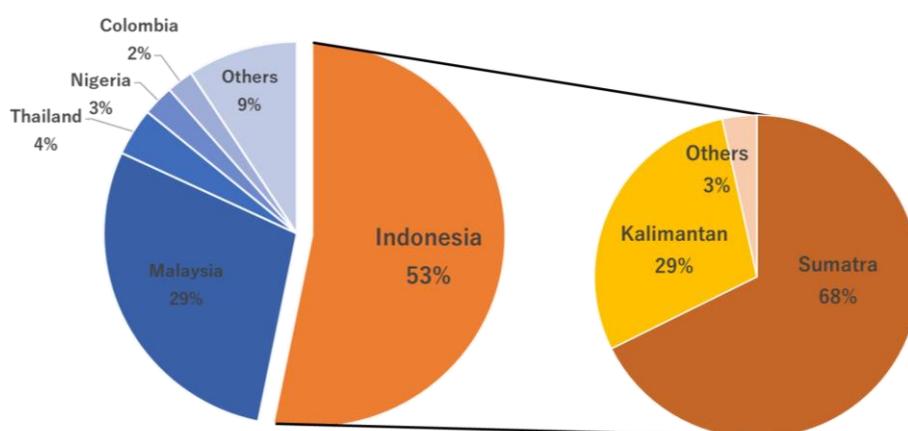


図 1-1: アブラヤシ果房の主要生産国と生産地
(出所) FAOSTAT, Direktorat Jenderal Perkebunan (2017)より筆者作成

¹ CPO より少量だが、アブラヤシ果房の核部分からはパーム核油 (*Palm Kernel Oil: PKO*) が採れる。

インドネシアのアブラヤシ生産者は主に国営農園企業、民間農園企業、小規模農家の3つに大別される²。パーム油産業が本格的に開始された1970年代においては国営農園企業が大きなシェアを有していたが、1980年代ごろから徐々に民間農園企業による生産が増加してきた。そして、2000年代の民主化・地方分権化以降、小規模農家によるアブラヤシ農園面積と生産量は著しく増加しており、2017年には農園面積は全体の38.7%にあたる4,756,272haにまで達した(図1-2)。

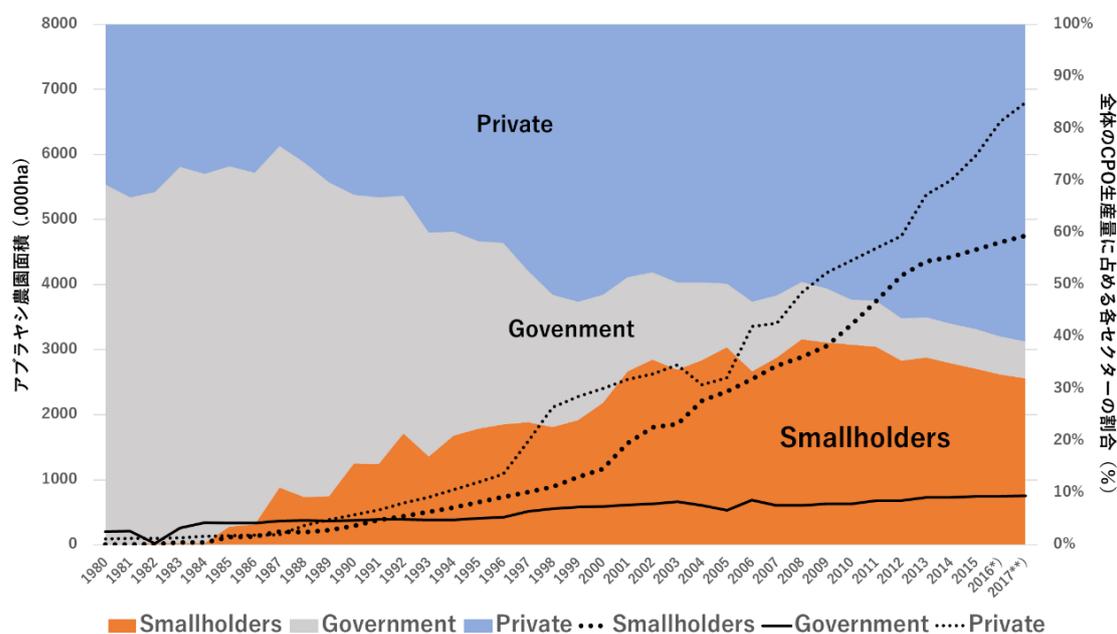


図 1-2：各セクターのアブラヤシ農園面積の推移と全体のCPO生産量に占める割合
 (出所) Direktorat Jenderal Perkebunan (2017) より筆者作成
 (注) * Preliminary ** Estimation

このように、インドネシアのパーム油産業の発展を概観すると、2000年以降は農民が生産するアブラヤシの量が無視できないほどの規模まで膨れ上がってきたことが分かる³。また、小規模農家によるアブラヤシ農園面積と生産量は今後も継続的に増加していくと予測されており、パーム油産業全体の成長には欠かせないセクターである。

² 本論文では、Direktorat Jenderal Perkebunan (2017)に従って以下のようにインドネシア語、英語、を訳した。国営農園企業(英 Government Estate: イ Perkebunan Besar Negara)、民間農園企業(英 Private Estate: イ Perkebunan Besar Swasta) 小規模農家(英 Smallholders: イ Perkebunan Rakyat)

³ 田中(1990 p.253)は、東南アジアのプランテーション農業の特徴は、その商品作物が小規模な農民によっても広く栽培されるようになり、農民農業のもとでの生産が無視できないほどの広がりを持つようになったことであるという。また、農民による栽培が拡大しているという点に限定すると、アブラヤシは他の東南アジアの商品作物と同様の特徴を持っていると岡本・林田(2018)は指摘している。

1-2 アブラヤシ農民の成長

本論文では、小規模農家（以下：小農）の定義を「持続可能なパーム油のための円卓会議（RSPO）⁴」に従い、[50ha以下の土地において家族経営によるアブラヤシ生産を行っている人々]とする⁵。また、小農の中でも[アブラヤシ農園の土地利用や管理に対して自由な選択権を持ち、いかなる企業とも契約のない小農]を独立型小農(Independent Smallholders)、[契約に基づいて農園企業によって管理されてアブラヤシ生産を行う小農]をスキーム型(Schemed or Associated Smallholders)とする(RSPO 2009)。

インドネシアの農民たちがアブラヤシを生産し始めたのは1970年代であり、インドネシア政府が農村地域の貧困撲滅や雇用創出を目的として導入したことが契機になっている(Sargeant 2001)。その方法は、国営・民営問わず、大規模農園が周辺の農民たちを契約によって包摂するものであり、「中核企業—小農方式(Perusahaan Inti Rakyat: PIR方式)」として広く知られている(Molenaar et al. 2013)。1977年に始まったPIR方式は、国営企業周辺に居住する人々を支援するもの(PIR Swadana, PIR Khusus)から始まり、1980年の移民政策(Transmigrasi⁶)によって、スマトラ島やカリマンタン島へと移住するジャワ人農民を対象としたもの(PIR-Transmigrasi)などを経て、1990年初頭の市場原理に任せた民営企業による農園周辺住民支援へと形態が移り変わっていった(Molenaar et al. 2013)。また、1990年の「構成員のための一次協同組合向け信用(Kredit Koperasi Primer untuk Anggota: KKPA)」において、それまでの企業や政府が先導する小農支援から、小農の自主性を尊重する方式へと大きく変化した(Vermeulen et al. 2006)。

アブラヤシ農園開発が行われるのは主に「外島(Outer Islands)⁷」と呼ばれるスマトラ島やカリマンタン島である。広大な土地が耕作されないまま残されており、人口過疎的な地域であることに加え、統治機能が行き渡っていない外島は、まさに「フロンティア」として政府によって認識され、国家の発展のために開発されてきた(McCarthy et al. 2012)。そして、そこで暮らす人々もPIR方式などの政策に呼応して開発の波に乗り、アブラヤシの収益性の高さに誘引されて、それを受容し始めた(Rist et al. 2010)。アブラヤシは搾油工場で加工されて初めて市場価値がつくため、アブラヤシを生産する農民の周辺には、大規模なア

⁴ 環境への影響に配慮した持続可能なパーム油を求める世界的な声の高まりに応え、WWFを含む7つの関係団体が中心となって2004年に設立された非営利組織であり、持続可能なパーム油の国際認証制度を発行している。<https://rspo.org/> (最終アクセス: 2018/12/25)

⁵ インドネシア農業省が制定した法令(Peraturan Menteri Pertanian Nomor 98/Permentan/OT.140/9/2013)によると、小規模農家が保有する農園面積は25ha以下と制定されたが、実際にはローカルエリートたちはそれ以上の農園面積を保有しており、一世帯内で名義を分けることによって法令に遵守している(Daemeter Consulting 2015)。以上から、本研究ではRSPOの定義に従う。

⁶ ジャワ島などの人口過密地の住民をカリマンタン島などの人口過疎的地へと移転させる政策のこと

⁷ インドネシアでは、人口過密的なジャワやバリ、マドラなどの「内島(Inner Islands)」に対して、人口過疎的なスマトラやカリマンタン、スラウェシなどは通常「外島(Outer Islands)」と呼ばれる。

ブラヤシ農園と搾油工場、流通のための交通インフラという「パーム油生産体系」が整備され、加えて労働者が流入することで、急激に地域が開かれていく。そうして、周辺住民は農園企業や仲買人が作り出した市場経済の波に飲み込まれ、現金収入を求めてアブラヤシの生産を拡大するようになる（Cramb and Curry 2012）。

特に先住民の暮らしぶりは大きな変化に直面しており、自然資源に依存し、焼畑農業などによって食糧作物を生産してきた生業から、アブラヤシなどの商品作物を生産し、その販売収益を目的にするものへと変化している。例えば、カリマンタンの先住民ダヤック人は、伝統的に営んできた焼畑農業地とその休閑地をアブラヤシ農園へと転換している現状が Sirait (2009) によって報告されている。アブラヤシの進展は、先住民の農業を「生存のための農業」から「経済のための農業」へと変革してきたのである。そして近年、農民のアブラヤシ生産はパーム油産業のさらなる発展のためにインドネシア政府や様々な機関の支援対象になっている。

1-3 パーム油産業発展のための小農支援

世界的なパーム油需要が拡大する一方で、アブラヤシ農園開発が引き起こす環境社会問題に対しても関心が集まってきた⁸。そのため、インドネシアのパーム油産業界は生産量を増加させつつも環境配慮を行うという「持続可能なパーム油産業」の構築に迫られている。そこで課題となるのは、アブラヤシ生産量全体の 30%以上を占め、今後も拡大が予測される、小規模農家によるアブラヤシ生産の高度化である⁹。

特に、アブラヤシ小農が抱える問題点として、土地あたり生産性が低いことや持続可能な認証制度の取得率が低いことが挙げられる。マレーシアの高度化したパーム産業¹⁰とは異なり、これまでインドネシアのパーム油産業は豊富な土地を用いた面的な拡大によって発展を遂げてきた（小井川 2015）。しかし、持続可能性への意識が高まる国際社会においては、森林減少や生態系破壊を伴う農園面積の拡大は容易ではなく、当産業は面的拡大から質的

⁸ 欧米諸国からは環境破壊者としてのパーム油産業に対して頻繁にネガティブキャンペーンが行われており、例えば国際 NGO の Greenpeace International は盛んに周知を行っている。

⁹ InfoSAWIT「UNDP Dukung Pemberdayaan Petani Sawit Swadaya」, 2018/07/09（最終アクセス：2019/01/08）<https://www.infosawit.com/news/8151/undp-dukung-pemberdayaan-petani-sawit-swadaya>

¹⁰ 本論文では、高度化したパーム油産業とは、アブラヤシの大規模農園と搾油工場だけでなく、中間製品や最終製品を製造する精製工場や様々な油脂関連工場が国内に設立されており、それらが相互に連関していることを指す。マレーシアは、1960年代のアブラヤシ農園と搾油工場の建設から始まり、1970年代には中間製品や最終製品を製造する精製工場や様々な油脂関連工場の建設という一連の産業発展を、政府の産業誘導策を背景とする上流から下流への商品連鎖の拡張を通じて達成してきた（岩佐 2018）。また、小井川（2015）はパーム油生産に適した自然条件を効果的に活用し、外来の技術と資本を効果的に招き入れて産業発展に成功したマレーシアのパーム油産業を「キャッチアップ工業化」の成功例として認識している。

強化へと構造転換の過渡期にある。小規模農家の土地あたり生産性の向上に関しては、これまでも研究が行われており、それを妨げている原因や改善に向けた様々な施策が提示されてきた（Hoffmann et al. 2014; Soliman et al. 2016; Euler et al. 2015）。実際にインドネシア政府や国連開発計画（UNDP）などは小農のアブラヤシの土地生産性向上のために、再植（Replanting）や補助金付き肥料の普及、認証種を提供するための資金投入などを積極的に行っている¹¹。

さらに、小農の国際認証制度 Roundtable on Sustainable Palm Oil（RSPO）や国内認証制度 Indonesian Sustainable Palm Oil（ISPO¹²）に関する研究が行われてきたが、その取得率は未だに低く、出所によって数値は異なるものの、Hidayat et al. (2015)はRSPOを獲得しているインドネシア国内の小農はアブラヤシ農園面積単位で3.8%程度であると推計しており、WRI Indonesia¹³はRSPOとISPOをあわせても1%程度であると推計している。現在、ヨーロッパ諸国は認証パーム油（Certified Sustainable Palm Oil：CSPO）以外のパーム油に対して輸入規制をかけるなどの環境配慮的な貿易を推進しており¹⁴、小農の認証制度未取得はインドネシアのパーム油産業に市場を失うリスクを突きつけている。これを克服しようと、インドネシア国内外問わず様々な支援が投入されており、UNDPが形成したSustainable Palm Oil（SPO）Initiative¹⁵や国連環境計画（UNEP）とRSPOが行った東マレーシアや中カリマンタンなどにおける小農のRSPO取得プログラム¹⁶などによって小農の認証制度の獲得を促している。

1-4 本研究の目的と問い

持続可能なパーム油産業を構築するためには、小農によるアブラヤシ生産を高度化する

¹¹ UNDP の Green Commodities Programme など（最終アクセス：2018/11/20）

<http://www.id.undp.org/content/indonesia/en/home/ourwork/environmentandenergy/sustainable-palm-oil-initiative--spo-.html>

¹² 農業法第 19 号（Peraturan Menteri Pertanian Nomor 19/Permentan/OT.140/3/2011 Tahun 2011）により制定、その後 2015 年 3 月に農業法第 11 号（Peraturan Menteri Kementerian Pertanian Nomor 11/Permentan/ OT.140/3/2015）によって改訂された。

¹³ Thontowi A. Suhada, Bukti Bagja and Shofia Saleh Suhada, Smallholder Farmers Are Key to Making the Palm Oil Industry Sustainable」, 2018/03/30（最終アクセス：2018/11/20）

<https://www.wri.org/blog/2018/03/smallholder-farmers-are-key-making-palm-oil-industry-sustainable#fn:1>

¹⁴ RSPO, Guidelines for the set-up of National Endeavors for Certified Sustainable Palm Oil

¹⁵ UNDP, Sustainable Palm Oil（SPO）Initiative,（最終アクセス：2018/11/20）

<http://www.id.undp.org/content/indonesia/en/home/ourwork/environmentandenergy/sustainable-palm-oil-initiative--spo-/about-us.html>

¹⁶ Katy Askew, RSPO focuses on smallholders in support of sustainable palm oil,（最終アクセス：2018/11/20）
<https://www.foodnavigator.com/Article/2017/11/29/RSPO-focuses-on-smallholders-in-support-of-sustainable-palm-oil>

必要があり、そのための様々な開発政策が投入されてきた。しかし、開発の現場では開発の受け手となる人々の行動によって、政策が意図した通りの結果が必ずしも生み出されるわけではなく、想定外の結果が頻繁に創出される（佐藤 2016）。開発の想定外は必ずしも公共の害になるというわけではないが、政策立案者が意図した通りの結果を手にするためには、開発の受け手側となる人々をよく知り、現場での現状に即した策を立案する必要があるだろう。

本研究のテーマに沿うと、パーム油産業のさらなる発展を促すためには、その担い手であるアブラヤシ農民の行動原理を正しく理解する必要がある、ということである。しかし、農民の行動原理を理解することはそれほど容易なことではない。それは、農民が変化する外部環境に応じてその都度最適な生計を選択していること、常に経済動機で行動していないこと、さらには、属する社会や文化の固有性によって行動を規定されていることに起因している。このような複雑性を克服し、農民の行動原理を理解しようと、これまで様々な研究が経済学、社会学、人類学などのあらゆる視点から分析を試みてきた。特に、非経済的要因が農民の行動に与える影響は一つの大きなトピックであり、地域が持つ固有の慣習や制度などの非経済的な変数を分析対象に置く重要性が語られてきた（例えば、原 1999）。

アブラヤシの生産の中心地であるスマトラ島やカリマンタン島の農村部は、近代化の影響を受けつつも、部分的には未だに自給自足的であり、市場経済と慣習的な経済活動が混合している社会である。そこで生きる農民たちの生活は、周囲の自然環境や、人間関係、文化、ひいてはそれを形作った歴史の上に成り立っており、そこでの行動原理は都市部で生きる人々とは必ずしも同じではない。それ故に、しばしば農民の行動は「不合理」なものとして、都市で暮らす人々の目に映るのである。そして、実際にフィールドに出て農民と対峙し、共に生活すると、都市に暮らす人々の理解が及ばないような彼らの「不合理」な行動に度々出くわすことになる。

2018年9月、本研究の対象地である東カリマンタン州の農村にて、アブラヤシ農民たちは消失した焼畑農業の復興を目指し、焼畑復興プロジェクトを立ち上げた。当地の住民はカリマンタンの先住民ダヤック人であり、元々焼畑農業を営んでいたが、2000年ごろに新たな収入源を求めてアブラヤシを選択し、経済的な豊かさを獲得してきた。村の周辺にはアブラヤシに匹敵するほどの安定的で収益性の高い収入源は他になく、農民たちは焼畑やゴムなどの収益性の低い生産物を次第にアブラヤシへと転換していった。しかし、村人たちは今になって、収益性の低い、かつ前近代的な焼畑農業の復興を望んでいるのである。なぜだろうか。

真っ先に考えられるのは、「自給用の食糧供給源を求めているから」、または「アブラヤシから被る何らかの害悪を是正するため」という仮説だろう。ただ、いずれにせよ、アブラヤシ農民が焼畑を取り戻そうとする行動原理を説明するには、彼らがそこにどのような理由を見出しているか、その合理性を理解する他に方法はないように思える。

従って、本研究では、「アブラヤシ生産が浸透している地域において、焼畑に戻ろうとする農民がいるのはなぜか」という問いに答えを出す過程で、アブラヤシ農民の行動原理を理

解しようとする。アブラヤシ農民の行動原理に新たな視点を提示することは、すなわち、農民のアブラヤシ生産の高度化を目的とする政策の質的向上に寄与し、さらには不合理的に見える農民の合理性理解や現代社会における焼畑の再解釈に資すると考える。本研究での農民の「合理性」とは、一見すると不合理な行為選択の背後にあるもっともな理由のこと¹⁷であり、経済合理性はその一部として位置づける。従って、焼畑を求める農民の行動原理を、利潤という経済的な視点にとらわれずに、農民を取り巻く社会文化的側面も分析の視点に加えて説明していきたい。

1-5 先行研究－アブラヤシ農民の生計戦略－

「アブラヤシ農民の焼畑回帰」という現象をこれまでの研究の蓄積からどの程度まで説明できるだろうか。本節では、アブラヤシ農民の生計戦略(Livelihood)に焦点を当て、アブラヤシを生産する農民の生計や行動原理の理解に関する先行研究の到達点と限界点を整理していく。

インドネシア政府は、農村社会における貧困軽減と雇用創出を目的にアブラヤシを外島に積極的に輸入し、様々な政策によって農民をパーム油産業の体系に包摂してきた (Barlow & Tomich 1991)。そして、それに呼応するかのようには農民は現金収入源の獲得など、経済機会を求めて、アブラヤシの生産を拡大してきた。Feintrenie et al. (2010) は、小農はアブラヤシがもたらす果房販売などの直接的な収益だけでなく、企業や銀行などとのパートナーシップの形成や、投資からのハイリターンを求めてそれを選択していると指摘している。また、アブラヤシを生計の一部に組み入れた結果として、農民の生活水準と栄養水準の両方が向上したことは Euler et al. (2017) によって定量的に評価されている。加えて、この研究では、アブラヤシの労働節約的特性が他ビジネスからの収入確保を望む農民の選好と適合していることを明らかにしている。これらの先行研究から、農民はアブラヤシの経済的な優位性を求めてそれを選択している、ということは概ね一般的な理解となってきた。

しかし、アブラヤシは農村地域に経済的便益だけでなく、環境社会的な悪影響も同時にもたらしている。例えば、農園企業が拡大することで、周辺住民の土地が収奪されること (Marti 2008) や、熱帯林が減少することで、森林資源へのアクセスが制限されること (Wakker 2004) などが指摘されてきた。しかし、農民が行うアブラヤシ生産が周囲の生態系や社会面に与える悪影響に関する研究は未だに少なく、その様相は把握しきれていない (Clough et al. 2016)。例えば、Rist et al. (2010) は、農民たちは森林から得る貨幣換算できないサービスや商品の価値を重んじていると述べているが、アブラヤシ拡大に伴ってそのような価値が損失していくことを農民がどのように評価し、それらの価値の損失とアブラヤシがもたらす収入増

¹⁷ 岸 (2016 p.29) は「質的調査にもとづく社会学の最も重要な目的は、私たちとは縁のない人びとの、『一見すると』不合理な行為の背後にある『他者の合理性』を、誰にもわかるかたちで記述し説明し、解釈することにあります」と述べている。本研究においては、アブラヤシ農民という「他者」の焼畑回帰という「一見すると不合理な行為」の合理性を説明することが問いを解くための中心的な作業になる。

加とのバランスをどのように取っているのか、という点までは明らかにしていない。

また、他の農作物と比較したとき、アブラヤシは必ずしも農民にとって望ましいものではないということも論じられてきた。アブラヤシは他の作物との間作が難しく、柔軟性に乏しいことから、アブラヤシ農園から他の作物に農地転換する障壁が高く、不可逆的な作物である（岡本・林田 2018）これは、Gönner (2011)が指摘したような、外部環境や経済機会の変化に応じてカリマンタンの農民が選択してきたゴムや焼畑などの融通の利きやすい収入源とは異なる性質を持っている。さらに、寺内ほか (2010) は、カリマンタンの焼畑民はアブラヤシの「労働に対する収益性」を高く評価しているものの、「自律性」と「融通性」は低く評価しており、逆に「自律性」と「融通性」の評価が高いラタンとゴムの、それぞれの長短所を組み合わせる寄木細工的な生計戦略を取っていることを明らかにした。

このように、アブラヤシは収益性の高い作物である一方で、柔軟性に乏しいことや、環境の変化に脆弱であること、融通が利かないことなどの短所も持ち合わせており、必ずしも農民が好むような生計を単独で提供できるわけではない、ということが分かってきた。しかし、先行研究の多くは、アブラヤシ農民たちが作り上げた結果としての生計戦略の様相を分析対象としており、アブラヤシに関する情報を十分に把握した農民が、その短所や害悪にどう対応しているのか、という、生計戦略をつくりあげた過程までは明らかにできていない。

次に、アブラヤシは農民に所得獲得機会を与えているものの、それが農村内部の社会構造の分化をもたらしていることが複数の先行研究によって論じられてきた。例えば、浦野 (2013) や Urano (2014) は、アブラヤシの資本集約的な性質が農民の参入障壁となっているために、そこから漏れ出す富は農村社会内部で平等には沁み渡らず、村内で階層分化が発生していると主張している。階層分化は定量的にも証明されており、Dib et al. (2018) はアブラヤシが拡大するスマトラ島においては、アブラヤシ農民は非アブラヤシ農民よりも経済的に豊かであることを提示し、地域内において異なる作物選択をした農民間の不平等拡大を示した。また、McCarthy (2010) は、同じアブラヤシ小農開発支援の枠組みの中にある農村でも、変化する経済や社会、政治に対する適応過程で、エリート農民（富裕層）と取り残された農民（貧困層）が出現したと説明している。

従って、アブラヤシ生産が行われる地域の経済状況は均質的ではないことに加えて、同一村内においてもアブラヤシを選択した／しなかった農民、選択できた農民／できなかった農民、に分化されており、また、アブラヤシを生産している農民の中でも、（各農民の基準に従って）うまく生産ができる農民／できない農民、などと、状況が複雑化していることが明らかになってきた。しかし、同一地域内のアブラヤシ農民の間で不均衡な経済状況が発生する要因を詳しく説明した研究は、Krishna et al. (2017)などに限られており、農民が持つ土地や労働、資本の賦存量が階層分化と相関がみられると結論づけているものの、統計データを元にした分析であるために、土地や労働市場の変化が農民のアブラヤシ生産に与える影響にまで考察が行き届いていない。さらに、不均質な経済状況にある農民それぞれのアブラヤシを内包した生計の様相を考察した研究は管見できない。

加えて、アブラヤシ農民に関する研究を地域単位で分類すると、インドネシアにおいては

開発が初期に始まったスマトラ島を対象としたものが多く見られる一方で、近年アブラヤシ農園開発が急速に拡大しているカリマンタン島を対象にした研究は少ない。スマトラとカリマンタンではインドネシアという同じ国でありながらも、経済社会状況だけでなく、地理や気候、民族、農民の生業などが大きく異なっているため、特定の地域の知見がそのまま他地域で適用できるとは限らない。カリマンタンにおけるアブラヤシ農民研究は、例えば、河合・井上（2010）が東カリマンタン州において伝統的生業や森林との共生関係を保ちながらアブラヤシ生産を行っているダヤック人の発展方式から「緩やかな産業化」の可能性を示唆した。しかし、これまでアブラヤシ農民の土地利用の変遷などの歴史的経路などは明らかにされておらず、農民の生計戦略を細かく考察した研究は管見できない。

以上をまとめると、先行研究では、アブラヤシの知識を十分に持った農民たちが、その長短所をどのように認識し、生計の中に組み込んでいるのか、という点については明らかにできていない。また、各階層のアブラヤシを組み込んだ生計の様相まで考察が行き届いていないことや、今後の農園開発の中心地となるカリマンタンを対象とした研究が少ないことが先行研究の限界として挙げられる。

「アブラヤシ農民の焼畑回帰」を説明するためには、先行研究の限界を克服し、アブラヤシ農民の生計戦略に新たな視座を与える必要がある。本研究では、農民がアブラヤシを選択し、生計の中に組み込む時の判断に与える要因として、経済選好だけでなく、周囲の自然環境や地域の慣習、文化、歴史などの社会的側面にも拡大して考察していく。さらには農民の不均質性に着目し、各階層の生計戦略の同一性と異質性を明らかにしていく。次章では、本研究の調査地である東カリマンタン州の概要と、調査方法について詳しく述べていく。

第2章 対象地の人々と調査の方法

本章では、調査対象地を選定した段取りや、対象地とそこで暮らす人々の概要を説明し、後の議論で必要となる基本的な情報を提示する。インドネシア全体における東カリマンタンの特徴、ならびに対象地の様子を統計資料や地理情報を元に把握する。特に、カリマンタンの先住民であるダヤック人の民族的特徴や土地利用の方法などを整理し、最後に調査対象とした主なアクターや調査方法について説明する。

2-1 調査地の選定と東カリマンタン州

本研究の調査対象地は、東カリマンタン州 (*Kalimantan Timur*) クタイカルタネガラ県 (*Kutai Kartanegara*)、クンバンジャングット郡 (*Kembang Janggut*)、プラウピナン村 (*Pulau Pinang*) である¹⁸ (図 2-1)。

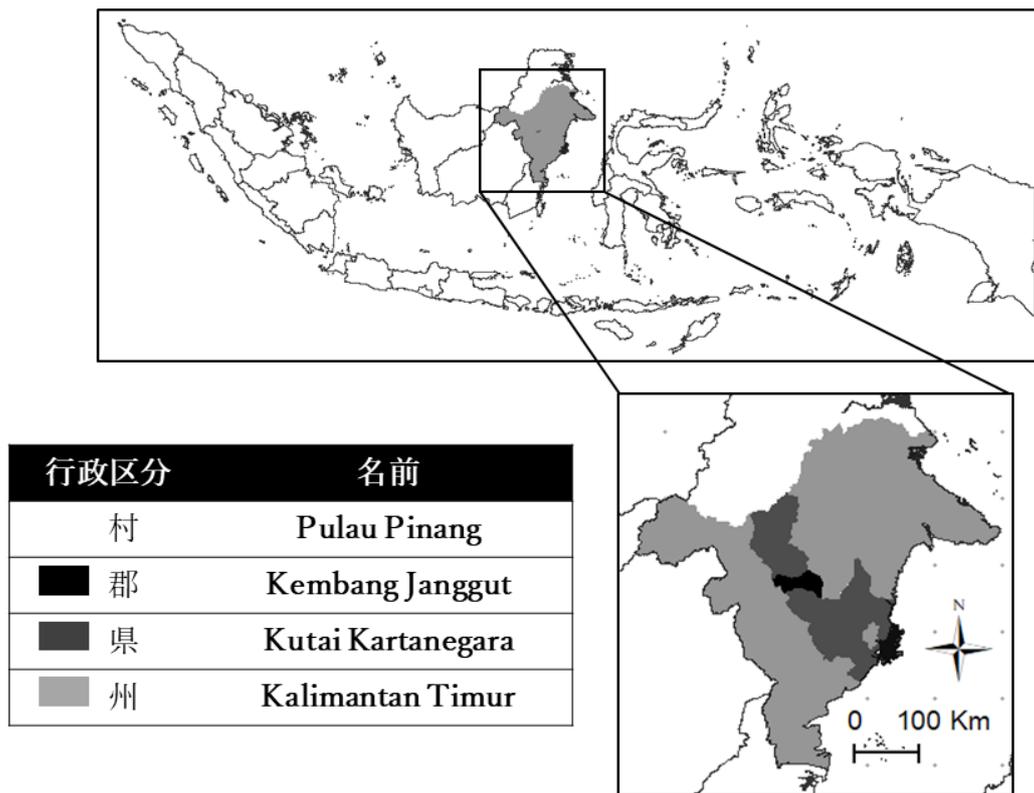


図 2-1：対象地の地図

(出所) 筆者作成

¹⁸ 行政区分は以下のようにインドネシア語、英語、を訳した。州 (英 Province : イ Provinsi)、県 (英 District : イ Kabupaten)、郡 (英 Subdistrict : イ Kecamatan)、村 (英 Village : イ Desa)

調査対象地はアブラヤシ農民に関する研究の蓄積が少ないものの、将来的な農園開発の拡大が予測されることを理由にカリマンタン島とした。また、本研究はアブラヤシの拡大による生計の変容や、社会文化的側面がアブラヤシの選択や生産に与える影響を分析対象にするため、生計の移り変わりが観察できるほど居住期間が長く、生活が地域に根づいた主体としてカリマンタンの先住民である焼畑先住民ダヤック人 (*Dayaks*) の独立型小規模農家を調査対象者の選定要件とした。また、アブラヤシへの十分な知識や情報があり、かつ村内で階層分化が発生しているであろうことを想定して、アブラヤシ果房の収穫がすでに安定している村を条件とし、これに適する農村を研究協力機関であるポゴール農科大学の Oil Palm Adaptive Landscapes (OPAL¹⁹) が持つプロジェクト地から選定した。

対象村が位置する東カリマンタン州は 127,267 km² の面積を持つインドネシアの中で四番目に大きい州であるが、人口は 3,575,449 人と、国内では比較的人口密度が低い地域である。石炭や天然ガスを含む鉱業が産業の中心であるが、2010 年時点では、プランテーションを含む農林水産業が地方総生産 (Gross Regional Domestic Product) において 8.2 % を占めている (森下 2015)。

東カリマンタン州の統計資料²⁰によると、当地の住民が焼畑農業で伝統的に生産してきた陸稲の耕作面積は 2017 年には 22,991ha であり、2012 年の 31,913ha と比べると大幅に縮小している。一方で耕作面積を急速に拡大しているのはアブラヤシプランテーションであり、2010 年には 563,561ha だったものが、2017 年には 1,192,342ha にまで達している (表 2-1)。

表 2-1：東カリマンタン州のアブラヤシ農園の基本データ

年	農園面積* (Ha)	果房生産量(Ton)	生産性(Kg/Ha)
2017	1,192,342	13,164,310	16,699
2016	1,150,078	11,418,110	14,947
2015	1,090,106	10,812,893	17,390
2014	1,020,413	9,628,072	19,236
2013	944,826	6,901,602	17,357
2012	824,413	5,221,016	15,543
2011	716,320	4,081,782	14,600
2010	563,561	2,961,069	15,543

(出所) Dinas Perkebunan Provinsi Kalimantan Timur (2018) より筆者作成

(注) *農園面積には民営農園企業、プラズマ農園、小規模農家の農園が含まれている

¹⁹ このプロジェクトはチューリッヒ工科大学 (ETH Zurich) を中心に、国際研究機関である国際林業研究センター (CIFOR)、フランス国際農業開発研究センター (CIRAD)、世界自然保護基金 (WWF) などによって構成されるパーム油関連の研究を行う機関である。

²⁰ Badan Pusat Statistik Propinsi Kalimantan Timur (2017) *Provinsi Kalimantan Timur Dalam Angka 2017*

2-2 調査対象村の概要

対象村であるプラウピナン村は、図 2-2 で確認されるように、民間のアブラヤシ農園企業である PT.Rea Kaltim Plantations や植林企業に囲まれるような場所に位置している。この村では、10 年以上前からアブラヤシ生産が農民によって開始されていたが、OPAL による調査は今に至るまで数日程度の短期的なものに限定されており、村落の実態は把握されていなかった²¹。

対象地のダヤック人は居住空間が企業に囲まれ、幹線道路沿いに住んでいることなどが影響しているのか、遠隔地にもかかわらず多くの村人がスマートフォンを持ち、SNS を使用し、移動には車やバイクを使用している。幹線道路の整備によって物流網が発達し、日常生活で物品不足に陥ることはない。電気はアブラヤシ農園企業のバイオ発電から供給されており²²、水は井戸水か河水を家庭用水として確保しているため、基本的なライフラインは確立されている。

²¹ Yulian et al. (2018)、Dyah et al. (2018)などが OPAL が持つ東カリマンタンの他の地域を対象として研究を行っている。

²² 付録の PT Rea Kaltim Plantations の基本情報参照

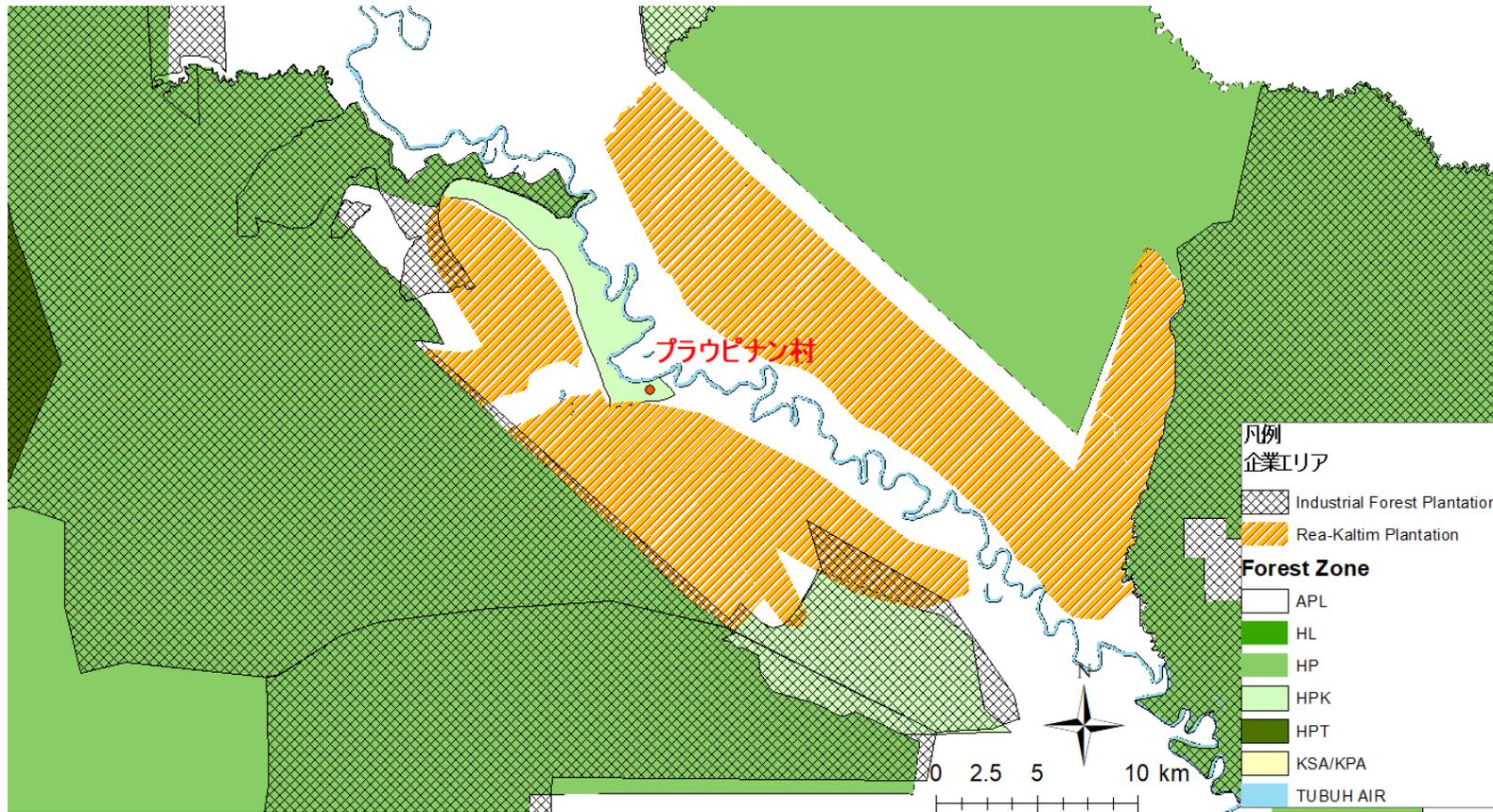


図 2-2：対象村周辺の地図

(出所) 東カリマンタン州農園局, 東カリマンタン州森林局提供の資料に基づき筆者作成

(凡例説明) APL：他用途地域 (Areal Penggunaan Lain), HL：保安林 (Hutan Lindung), HP：生産林 (Hutan Produksi), HPK：転換可能生産林(Hutan Produksi Konversi), HPT：制限生産林 (Hutan Produksi Terbatas), KSA/KPA：自然保護森林区域 (Kawasan Suaka Alam) /自然保全森林区域 (Kawasan Pelestarian Alam), TUBUH AIR：水域

(注) 緑色のエリアは林業生産地区であり, 農園開発を行うことは禁止されている。農園開発が許可されているのは APL のみである。

村役場から入手した統計資料（表 2-2）によると、対象村は 10 の隣組²³で構成されており、総人口は 1800 人を越えている。調査対象としたのは、先住民ダヤック人世帯が主に家を構える隣組 1－7 である。一方、隣組 8－10 は Rea-Kaltim の労働者向け住居であり、移住者が多いことや先住民の住居と地理的に離れていることから調査対象にしなかった。

表 2-2：対象村の人口統計

隣組(RT)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
人口	299	184	146	187	127	253	139	175	142	209	1861
世帯	80	48	40	51	36	66	35	46	48	58	508
居住区の属性	先住民・移民向け（一般世帯向け）							企業労働者向け			

（出所）村役場の統計資料より筆者作成

民族の割合を見ると、先住民であるダヤック人トゥンジュン族 (*Dayak Tunjung*) が全体の半分以上を占めているが、ジャワ人 (*Jawa*) やティムール人 (*Timor*)、クタイ人 (*Kutai*) など、他の島出身の居住者も多い。移民の多くはアブラヤシ農園企業だけでなく、石炭などのマイニング企業、植林企業などでの職を求めて自発的に移住してきた世帯である。先住民であるダヤック人を中心として、民族間の紛争は確認できず、安定的な村社会が維持されている。なお、対象村においてはスハルト政権時代のトランスミグラシ政策 (*Transmigrasi*²⁴) による移民は確認できなかった。（図 2-3）

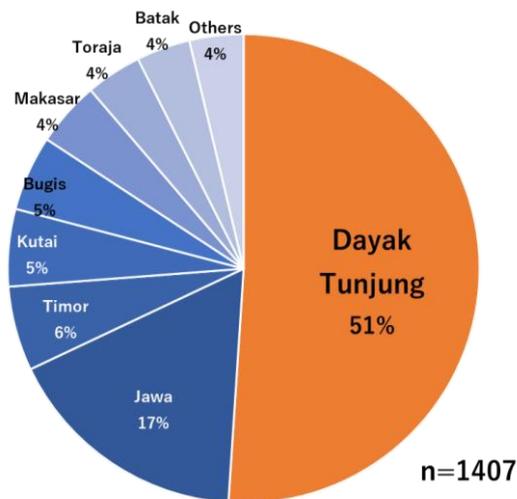


図 2-3：対象村の民族別割合
（出所）村役場の統計資料より筆者作成

²³ 隣組 (*Rukun Tetangga*)とは、村(*Desa*)の下に位置づけられるインドネシアの地方行政区画のこと。

²⁴ 脚注 6 参照。

対象村でアブラヤシ生産などを営む農民の多くは村内にある 3 つの農民組合いずれかに加盟している。農民組合の主な役割は農園企業と農民とのコミュニケーションを円滑化する仲介役であるが、他にも小規模な貸付け機能などがあり、村人たちの生活には欠かせない組織である。アブラヤシ果房販売と月末にその収益をまとめて組合員に手渡す仲介役としての機能を持つ Bina Wana Sejahtera (BW) と Pinang Berjaya (PB) と、詳しくは後述するプラズマ農園という企業が管理する周辺住民向けの農園管理用に Kahad Bersatu (KB) がある。どの組合にも組合管理の役員である組合長や秘書、会計係などがおり、小額の入会費や月賦などを管理している。(表 2-3)

表 2-3：各農民組合の整理

名前	創設年	組合員数	主な役割	備考
Bina Wana Sejahtera (BW)	2001	65	アブラヤシ果房販売の仲介役	一番古い農民組織
Pinang Berjaya (PB)	2010	111	アブラヤシ果房販売の仲介役	元村長であった YM 氏 ²⁵ が創設
Kahad Bersatu (KB)	2009	304	プラズマ農園管理	Rea-Kaltim とプラズマ農園の取り決め用

(出所) 村人へのインタビューと組合資料から筆者作成

アブラヤシ果房販売の仲介役である BW と PB は、アブラヤシ農園企業である Rea-Kaltim によって承認されており、両組合の組合員は企業から与えられた荷渡指図書²⁶を持つことで初めて搾油工場への果房販売が可能になる。搾油工場への直接販売が可能になるという点以外に、借り入れができるからという理由で村人は組合への加入を好んでいる。組合の貸付制度は原則として、Rp1,000,000 借りたら翌月は Rp1,050,000 の返済が求められ、単純に一月に Rp50,000 ずつ加算されていくが、分割返済は最大二回までである²⁷。このため、組合員たちは長期的な投資のためではなく、子どもの養育費や食費などの短期的な出費のために借り入れをしている。

2-3 カリマンタンの先住民ダヤック人と土地保有権制度

調査の対象となるダヤック人とは一体どのような人々なのだろうか。本節では、ダヤック人について土地保有制度と交えて紹介したい。土地保有制度への理解が重要になるのは、農民のアブラヤシ農園は慣習的に保有する土地に拓かれており、その土地は先祖 (*Nenek*

²⁵ 後に言及する世帯 No. 48 と同一人物

²⁶ インドネシア語では *Surat Pengantar Buah (SPB)*、英語では *Delivery Order*

²⁷ 本論文では、1 Rp = 0.0077 円 (2018 年 8 月 1 日時点) として換算する

Moyang) からの相続か、焼畑跡地、または購入によって確保されているからである。

King (1993)によると、ダヤック (Dayaks) とは、ボルネオ島²⁸の先住民のうち、イスラームでもマレー人でもない人々の集団を総称した言葉である。また、井上 (2005)は、ダヤック諸族は狩猟採集民族か焼畑民族のどちらかに分類でき、さらに焼畑民族は社会成層を持つ集団と平等主義的な社会を持つ集団とに分けられると説明している。また、キングの7類型を参照に便宜上5類型にした井上 (2005, p.277)によると、対象地のトゥンジュン族 (Tunjung) は、「ボルネオ南部の緩やかな社会成層を有する焼畑民族 (バリト一系諸族)」に分類されている。ダヤック諸族が共通して有する世界観は、生命力を獲得するための中心的な信仰である首刈りの儀式と農耕儀礼であり、中でも火入れを伴う農耕は現在においても各民族を越えた共通性を持つ。また、焼畑民族にとっても森林から供給される非木材林産物 (NTFP) の採集や河川での漁猟、ブタなどの狩猟は不可欠な生業であった。

ダヤックが開墾するのは主に原生林や二次林であり、陸稲の栽培を生業の中心にしていた。井上 (1991, p.226)によると、トゥンジュン族に類似するブヌア族の場合は原生林を伐開して焼畑を作った人がその土地の占有権を獲得する「先取占有」を基本原則としているが、慣習法上の所有者なしに焼畑跡地の二次林を利用している実態を記している。

対象村の先住民たちも、先行研究と同様に、焼畑農業と狩猟採集によって生計を営んでいた²⁹。現金収入はラタンやゴム、樹液などの NTFP の販売や木材加工企業での就労、バンジールカップと呼ばれる違法伐採などから、食糧は河川での漁猟や、森林でのブタやシカなどの動物の狩猟や野菜の採集などから得ていた。なお、本研究での焼畑の定義は、福井 (1983 p.239) に従い、「ある土地の現存植生を伐採・焼却等の方法を用いることによって整地し、作物栽培を短期間おこなった後、放棄し、自然の遷移によってその土地を回復させる休閑期間をへて再度利用する、循環的な農耕である」とする。重要なポイントは、耕作よりも休閑期間の方が長いことであり、火入れ自体は重要ではなく、農地を整地する作業の一部にしか過ぎないということである³⁰。対象地周辺では、図 2-4 のようなスケジュールで焼畑は行われる。

²⁸ 英語のボルネオ (Borneo) とはインドネシアのカリマンタン (Kalimantan)、マレーシア、ブルネイを含んだ島全体を指す。カリマンタンとはインドネシア語でのボルネオ島のこと。

²⁹ 対象地では、世帯あたり年間平均で 1-2ha の土地を開墾していたようだ。しかし、村内の農民全てが毎年森林を開墾していたわけではなく、世帯間の保有農地面積には差が生じていた。森を毎年開拓しない農民は、コメなどの収穫物の分配を報酬とした他の農民の農地における日雇労働や、農外就労によって生計を立てていた。対象村の農民が持つ価値観によると、このような農民は「怠惰 (malas)」な農民として認識されている。

³⁰ 日本語の「焼畑」という表記からイメージされる「焼く」ということにウェイトをおきすぎることは焼畑の理解の妨げになることを福井 (1983) は指摘している。また、増野 (2013) もこれに準じ、焼畑という表記が「焼く」という作業に焦点を集めることによって焼畑の本質がぼやけていると説明している。

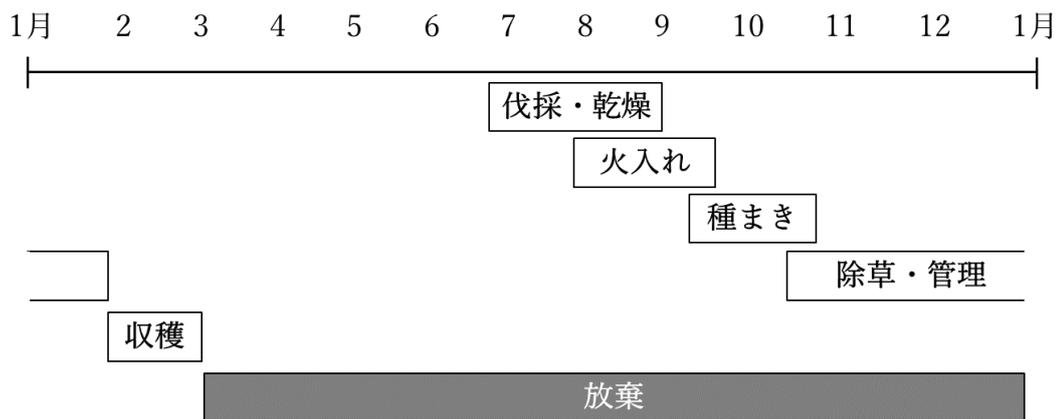


図 2-4：陸稲生産の年間スケジュール
 (出所) 井上 (1995) と村人の話より筆者作成

7 月ごろから伐採と畑地の天日乾燥を行い、地表が乾燥したところで火入れを数回行う。雨で地表が固まった後、播種を実施する。播種の際には一般的に男性が堀り棒で穴を開け、女性が入る中に陸稲の種を数粒入れていく。その後、除草などを行って畑地を管理し、早くて 2 月には収穫期を迎える。収穫を終えた畑地は休閑地として放棄され、数年後には二次林になる。対象地周辺では、このように焼畑耕作地と二次林、そして狩猟採集用の原生林が村人たちによって使い分けられていた (写真 2-1)。



写真 2-1：土地利用の例
 (出所) 2018 年 8 月に筆者撮影
 (注) 対象村から北に 50km ほどに位置する *Buluq Sen* 村の周辺

土地の相続に関しては、保有権に比べると非常に曖昧な制度が敷かれている。親と同居している子どもが優位な相続権を持つが、時間の経過とともに忘れられることもあるという。大田ほか(2008)も Apell (1997)が提唱した移譲可能 (devolvable) な用益権 (usufruct) をダヤック系住民の土地保有権の萌芽と見なしているが、植生が森林に戻り時間が経過するにつれてその場所の記憶が不明確になることを指摘している。

対象地においてもこれら先行研究で説明された通りの土地保有権が慣習的に行われており、登記内容確認書 (*Surat Keterangan Pendaftaran Tanah-SKPT*) を取得している一部の農民を除いて、多くの農民は果樹や大木、小屋などを保有地の境界線としている。相続は基本的には子ども全員に同等の権利が与えられているが、親との同居年数だけでなく子どもの素質などの基準に従って親が配分面積を決定している。土地の売買の際には、売買予定地の四方を囲む土地の保有者からの許可が必要であり、その合意を元に慣習長同伴で売買契約が結ばれる。また、2,3 世代に渡って相続されると土地の保有権は曖昧になり、農民間の紛争の種となる可能性があるために、恒常的な労働力投下を必要とするアブラヤシ農園を作って、それを阻止しようとする世帯もあった。

2-4 調査手法とサンプリング

調査では、主に州・県の農園局 (*Dinas Perkebunan*) や森林局 (*Dinas Kehutanan*)、対象村に近接している民営アブラヤシ農園企業 PT.Rea Kaltim Plantations (以下: Rea-Kaltim)³¹、対象村であるプラウピナン村、そして近隣の村などから情報やデータを収集した。

農園局や森林局などの行政機関からは、企業農園開拓時に必要となる許可取得手続きの法制資料や地理情報システム用に加工可能な地図などを入手した。Rea-Kaltim からは周辺住民間との合意文書、農民組合の名簿や果房運搬量などの資料・情報を収集すると同時に、住民向けアブラヤシ造成プロジェクトの概要などに関する聞き取り調査を行った。対象村での調査では、村長や各集落の長などの村要職者から基礎的な情報を集めた後、世帯ごとに調査を行った。

世帯調査では、半構造化インタビューにより、焼畑時代における土地の保有面積と土地を確保した方法 (原生林開墾/相続/購買)、陸稲の年間生産面積と収穫量、主な現金収入源などの情報を聞き取った。現在の時間軸においては、保有するアブラヤシ農園面積、月あたりの果房収穫の様子、販売先、アブラヤシの選択要因、造園時の資金・労働調達の方法などの情報を入手した。日常のコミュニケーションのように雑談などを踏まえながら世帯あたり 1 時間程度で行った。

これに加え、対象世帯の階層分けには「相互評価法 (Wealth Ranking)」を用いた。これは、Grandin (1988)によって考案されたカード式の評価法であり、特定の村人が有する「豊かさ」の基準に照らして階層差を明らかにする方法である。これまで人類学や地域研究の分

³¹ Rea-Kaltim の詳しい情報は付録の PT Rea Kaltim Plantations の基本情報を参照

野で使用されてきた³²、いわば「村人による村人の豊かさランキング付け」である。

調査対象世帯のサンプリングは村内に存在する2つの農民組合PBとBWの名簿から対象村の隣組1-7に居住していること、居住年が10年以上であることを条件として、43世帯を無作為に抽出した。また、組合に所属していない農民をスノーボールサンプリングによって抽出し、8世帯に対して調査を行った。結果、隣組1-7の合計366世帯の約15%にあたる51世帯を分析対象とした(表2-4)。

表 2-4：世帯調査の抽出

	組合員数	対象村内居住者	調査対象世帯数
組合PB	65	49	17
組合BW	111	91	26
非組合員			8
合計	176	140	51

また、本調査では村人の生活の実態を把握するために参与観察法を採用した。対象村の慣習長(Kepala Adat)の自宅に滞在し、日常生活をともにしながら村内で行われる様々な活動への参加を通じて情報を収集した³³。なお、フィールドワークは2018年7月上旬~9月中旬に実施し、通訳や補助員を用いずに筆者がインドネシア語を介して単独で行った³⁴。世帯調査は慣習長の娘(28歳・女性)か村の大学生(25歳・男性)に同伴してもらうか、または単独で行った。特に、村の政治関係に関するインタビューの際や、相互評価法の際には第三者を介在せず、人目に触れないように室内で行った。

³² 近年では、箕曲(2014)がこの手法によってラオスのコーヒー栽培を生業の中心とする村落内で「富裕」だと見なされている者たちを特定し、ライフヒストリーをもとに富裕者が誕生した要因を分析した。

³³ 佐藤(2002, p.69-71)は、「完全なる参加者」、「観察者としての参加者」、「参加者としての観察者」、「完全なる観察者」として参与観察者と現地の人々との間の関係のバリエーションを解説しているが、実際には参加者と観察者の間を揺れ動いていると指摘している。本調査は、「観察者としての参加者」と「参加者としての観察者」の間を揺れ動きながらの参与観察であったと考える。

³⁴ インドネシアの農村部でフィールドワークを行う際には調査許可が必要となるため、インドネシア共和国、研究・技術・高等教育省(Ministry of Research, Technology and Higher Education: 通称 RISTEK)よりリサーチビザを取得した。

第3章 生業の移り変わりと現在の生活

農民のアブラヤシ生産の様相を明らかにするために、農民がアブラヤシを選択し、それを生計の中心に据えるまでの歴史的背景を把握する。本章では、特に、アブラヤシの拡大に伴ってダヤック人の伝統的な生業であった焼畑農業が消失していく過程を農民の内的要因と政府や企業などによる外的要因に分解して整理していく。また、農民たちのアブラヤシ生産の実態とそれ以外の収入源を比較することで生計の全体像を把握し、その中でのアブラヤシと焼畑農業の位置づけを概観する。

3-1 対象村の歴史

まず、対象村であるプラウピナン村の歴史を本研究に関連する出来事を中心に概観することから話を始めていきたい。1993年にアブラヤシ農園企業が操業を開始してから、対象村の歴史は常にアブラヤシとの関わり合いの中で変化してきた（表 3-1）。

表 3-1：対象村の歴史概略

1940年代	西クタイから今の土地に移り住んでくる
1950-70年代	周辺に木材加工企業が設立される
1993年	Rea-Kaltim がアブラヤシ農園事業を開始 し、土地整備を始める。企業労働をする村人が増え始める
1994年	村人がアブラヤシ生産の支援を行うように企業に対して申請する
2001年	企業による村人の アブラヤシ生産支援プログラム（PPMD） が実行される
2005年	PPMD 参加農民が初めて果房収穫を行う（ アブラヤシブームの始まり ）
2007年	2007年農業大臣令により、農園企業は プラズマ農園建設 を義務付けられる
2009年	初期の MoU (Memorandum of Understanding) が結ばれ、 プラズマ農園が造園 される
2014年	プラズマからの収穫物が村人に分配されず、対立が表面化する
2016年12月	村内から 焼畑農業を行った者が逮捕 される事件が発生する
2017年6月	プラズマ農園の MoU 改定

（出所）村人の話と行政資料などを元に筆者作成

次に対象村における主な生業の移り変わりを大まかに整理すると、図 3-1 のようになる。焼畑農業と狩猟採集から始まり、バンジルカップと呼ばれる違法な木材搬出やゴムの木の生産を経てアブラヤシへと移行した。また、1980年代以降には植林加工会社などで就業する者が始まる。1993年の Rea-Kaltim の操業に伴ってこの数は一気に増加したようだ。一方で焼畑農業はアブラヤシが生産されるようになってからその重要度は低下していき、2015

年あたりからほとんど見られなくなった。対象地周辺の歴史と村人からの情報を合わせて、収入源の重要性を矢印の濃淡で表した。また、本論文では語句の簡素化のために、焼畑農業を中心とし、森林資源に依存して生計を営んでいた時代（～2001年）を「焼畑時代」、焼畑農業からアブラヤシへと生業の中心が移行する時代（2001年～2010年周辺）を「移行時代」、アブラヤシが生計の中心を占め始めた時代（2004年～）を「アブラヤシ時代」と定義付けて議論を展開していく。

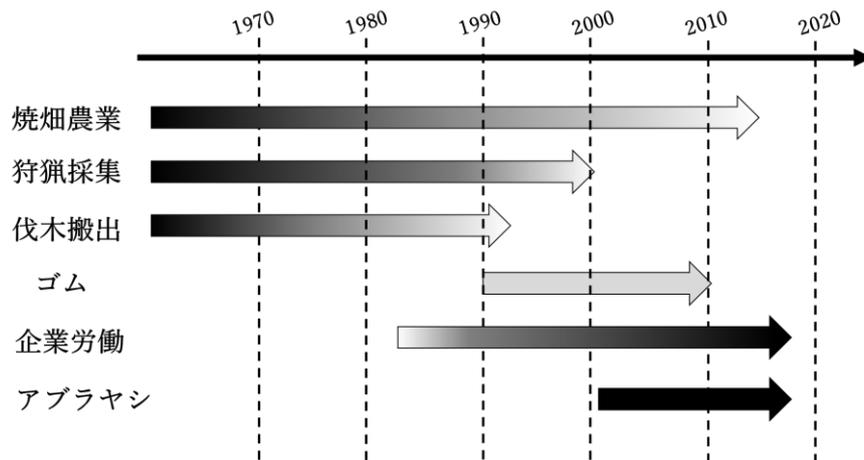


図 3-1：対象村における主要な生業の移り変わり
（出所）村人の話と行政資料などを元に筆者作成

3-2 生業の移り変わり－焼畑からアブラヤシへ－

焼畑農業を基盤とした村人たちの生計は、民営のアブラヤシ農園企業である Rea-Kaltim が農園を造ったことをきっかけに、1993年ごろから大きく変容する。この時、企業農園が造られた土地はそれまで原生林が広がっていた地域であったため、周辺住民は狩猟採取の場を失うことになった。最初の収穫が行われる時期に合わせて、1999年には企業農園内に搾油工場が完成し、アブラヤシ果房の収穫からパームオイル（CPO）完成までのサプライチェーンの上流部が完成した。企業農園が成立したことで、周辺住民は農園管理や搾油工場における就業から現金収入を獲得するようになったが、1990年代は個人農園でアブラヤシを栽培する農民はほとんど存在しなかった。

対象村に農民のアブラヤシブームが到来したのは、村民能力強化プログラム(*Program Pemberdayaan Masyarakat Desa- PPMD*)の初年度に参加した20人の農民がアブラヤシの収穫期を迎え、経済的豊かさを享受し始めた2004-2005年あたりの出来事である³⁵。このブ

³⁵ 2001年のPPMD参加農民は企業や農民組合による選抜は行われず、農民の自発的な参加であった。アブラヤシに発展の光を予測した農民が生産に挑戦したようである。彼らが初めての果房収穫を達成すると、周囲の村人たちが真似して生産するようになった。(Rea-KaltimのPPMD管理部署へのインタビュー、2018年7-9月)

プログラムは2001年にRea-Kalitmによって実行され、プログラム参加農民にクレジット付きで2ha分のアブラヤシの苗とその育成に必要な肥料を付与し、さらに企業職員による栽培・技術指導を提供したものである。

さらに、2001年のPPMD参加者であり、2003年から2006年に村長を努めたYM氏の村人へのアブラヤシ普及活動によって村内においてアブラヤシは急速に拡大した。彼は2004年にジャワ島のボゴール(Bogor)で開催されたアブラヤシ生産のトレーニングに参加した後、生産のノウハウを村内に広め、2006年には農民組合(PB)を新たに創設して村人のアブラヤシ生産を促した。PPMD参加農民たちの成功とリーダー的立場の農民に率いられ、対象村の農民は徐々に焼畑農業用地やその休閑地、二次林をアブラヤシ農園に転換していった。

対象地周辺の土地は、農業省が発令した法案の影響でさらにアブラヤシによって埋め尽くされていった。2007年農業大臣令³⁶によって農園事業許可(IUP)を所持する農園企業は中核農園(Inti)面積の20%に値するプラズマ農園(Plasma)の建設を義務付けられた。Rea-Kalitmは「統一管理方式(Pola Satu Manajemen)」という、プラズマ農園の経営管理を中核企業であるRea-Kalitmが基本的に行い、収穫物から得た利益を企業と地域住民の間で7対3の割合で分配する方式を採用した³⁷。この結果、企業と周辺住民間の話し合いによって2009年にMoU(Memorandum of Understanding)が締結され、周辺住民の焼畑農業用地に約1000haのプラズマ農園が造成された。

農民が焼畑農業を手放し、アブラヤシへの依存を強めることになったもう一つの要因は、政府が農地への火入れを禁止したことであった。インドネシア政府は森林に関する1999年インドネシア共和国法律第41号や、2010年環境大臣令などによって農地への火入れを禁止してきた³⁸。法令発令後の数年は、焼畑の慣行は失われなかったが、2016年に植林企業のコンセッションエリア内において焼畑を行った村人が逮捕されて以降、対象村で焼畑をする者はいなくなった。土地が肥沃ではない当地において、火入れを伴わない農地整備で陸稲を栽培することは農民にとっては困難であり、農民たちは自給作物用の農地を徐々に換金作物であるアブラヤシ農園へと転換するようになった。

以上をまとめると、図3-2のようになる。対象地において焼畑民たちがアブラヤシへの依存を高めるようになった過程は、アブラヤシ企業による大規模な農園開拓やプラズマ農

³⁶ Peraturan Menteri Pertanian Nomor: 26/Permentan/OT.140/2/2007のこと。その後、2013年農業大臣令(Peraturan Menteri Pertanian Nomor: 98/Permentan/OT.140/9/2013)に引き継がれており、農園企業に課せられる義務は、周辺住民のために農園事業面積の最低20%の面積の「農園を建設する」ことから、「農園の建設に便宜を与える」ことに改められた(永田・小泉2018)。

³⁷ 統一管理方式(Pola Satu Manajemen)に関しては林田(2018)を参照

³⁸ 1999年の法律はUndang-Undang Republik Indonesia Nomor 41 Tahun 1999 Tentang Kehutanan、2010年の環境大臣令はPeraturan Menteri Negara Lingkungan Hidup Nomor 10 Tahun 2010、である。また、他にも農園に関する2004年インドネシア共和国法律第18号(Undang-Undang Nomor 18 Tahun 2004 tentang Perkebunan)などで農地への火入れが禁止されている。

園開拓法案の制定などの「外生的要因」と、アブラヤシがもたらす経済的利益にいち早く気づいた先駆的農民の出現と周辺農民の追随、さらには新たに形成された農民組合などの「内生的要因」との相互作用によるものであった。また、アブラヤシブームの裏では焼畑農業用地が減少し、火入れ慣行の禁止などによって焼畑農業は消失していった。

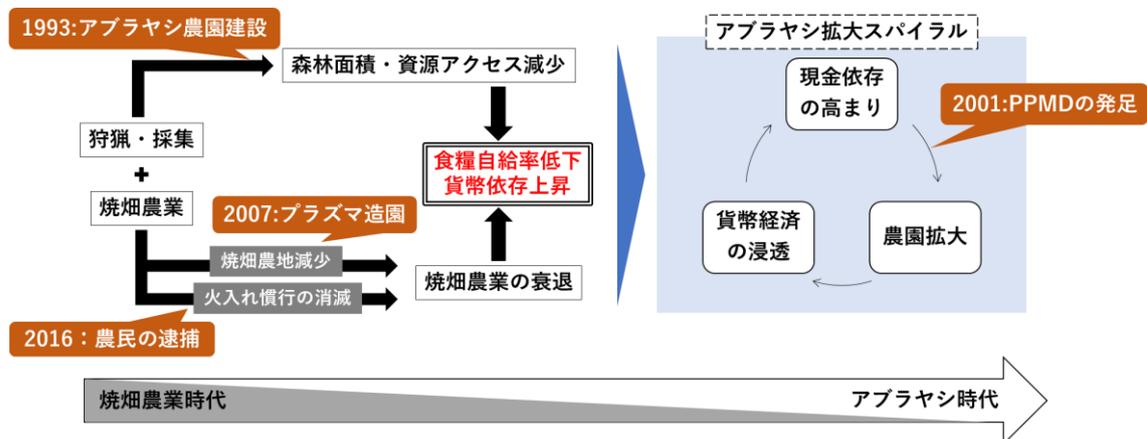


図 3-2：焼畑時代からアブラヤシ時代への移り変わり

3-3 農民のアブラヤシ生産の状況

本節では、農民の中心生業であるアブラヤシの造園方法、管理方法、収穫・販売方法について簡単に説明していく。

(1) 造園方法

アブラヤシ農園の造園方法は主に焼畑跡地での植え替えと原生林や二次林を開墾する場合に二別できる。焼畑跡地の場合は陸稲の収穫が終了した後にアブラヤシの苗を植える方法である。原生林や二次林を皆伐する方法では、大木を切り倒した後にアブラヤシの苗を植え付ける方法である。土地整備は重労働であるため、2ha を越える農園の場合には日当の支払いによって労働者を雇用するケースが目立った³⁹。基本的に他の作物との間作は行われず、農園内はアブラヤシの樹木が 9m 間隔で並んでいるだけである。

(2) 管理方法

アブラヤシの樹が果房を生産できる平均的なライフスパンは 25-30 年である。また、苗が植栽されてから平均的に 3 年後に収穫が可能になり 8 年後から収量が最大になる

³⁹ 焼畑農業では一般的であった農民グループを形成し、持ち回りで順番に開墾するという労働形態はアブラヤシブーム初期において造園した農民から話が聞かれるのみであったが、現在においては親族間のみ共同作業しか確認できなかった。

(Pacheco et al. 2017)。収穫できない間は除草や施肥、殺虫剤の撒布を行う。民間農園企業は一年間に 3-4 回程度施肥を行うが、小農の場合は肥料の費用が高いために通常 1-2 回、多くても 3 回程度である。

(3) 収穫・販売方法

農民は収穫した果房を Rea-Kaltim の搾油工場に直接売却するか、または仲買人に販売する。搾油工場に直接売却する場合は組合からの荷渡指図書が必要であり、支払いは翌月末に組合を通じて企業からなされる。搾油工場での果房買取価格は各州の農園局が月ごとに定める正規価格で取引される。また、Rea-Kaltim の搾油工場は 2013 年から果房の質と買取価格を連動させるグレーディング制度⁴⁰を導入しているため、一房 3kg 以下の果房⁴¹や熟し過ぎた果房などは選別された後、低価格で買い取られる。

仲買人に販売する場合は正規価格の 70%程度で取引が行われる。しかし、仲買人への販売は、その場で支払いを受け取ることができることや、グレーディング制度がないために質の低い果房も売却できること、搾油工場よりも地理的にアクセスが容易であること、搬入までの待ち時間が少ないことが農民に好まれている。表 3-2 では、調査を元に搾油工場への搬入と仲買人への売却の特徴を比較した。

表 3-2：企業の搾油工場と仲買人による果房取引の比較

販売先	Rea-Kaltim の搾油工場	仲買人
条件	組合からの荷渡指図書	条件なし
果房販売価格 (2018 年 6 月)	各州農園局が毎月制定する価格 1,548Rp/Kg	州農園局による制定価格の約 70% 1,100Rp/Kg
グレーディング	あり	なし
立地	対象村集落から約 6km	対象村内、農園での直接買取
輸送手段	登録したトラックのみ 搬入までの待ち時間が長い	運搬方法に制限なし 待ち時間なし
支払い方法	翌月末に組合を通じて現金払い	その場で現金払い
農民が好む機能	組合から借金が可能である	その場で現金が獲得できる

仲買人が果房を売却する方法は 2 つある。一方は、他の組合員から買い取った荷渡指図書を使用して Rea-Kaltim の搾油工場に販売する方法である⁴²。もう一方は、対象村からト

⁴⁰ Peraturan Menteri Pertanian Nomor 14/PERMENTAN/OT.140/2/2013 で定められている。

⁴¹ 対象村周辺では小さい果房のことを一般的に *Buah Pasir* (直訳すると「砂の実」)と呼んでいる。この場合、企業に販売しても利益にならないために主に仲買人に販売する。

⁴² 本論からずれるが、荷渡指図書を使った仲買人業は出処不明の果房を Rea-Kaltim の搾油工場に販売していることになる。これは森林地域における農園や不適切な生産方法による果房が最終的に「認証パーム

ラックで 4-5 時間の距離にある他企業の搾油工場に販売する方法であり、そこではグレーディング制度が採用されていないため、小さな果房や熟しすぎた果房までもが質に関係なく一定価格で売却可能である。CPO が搾油されるまでのサプライチェーンは図 3-3 のようになる。

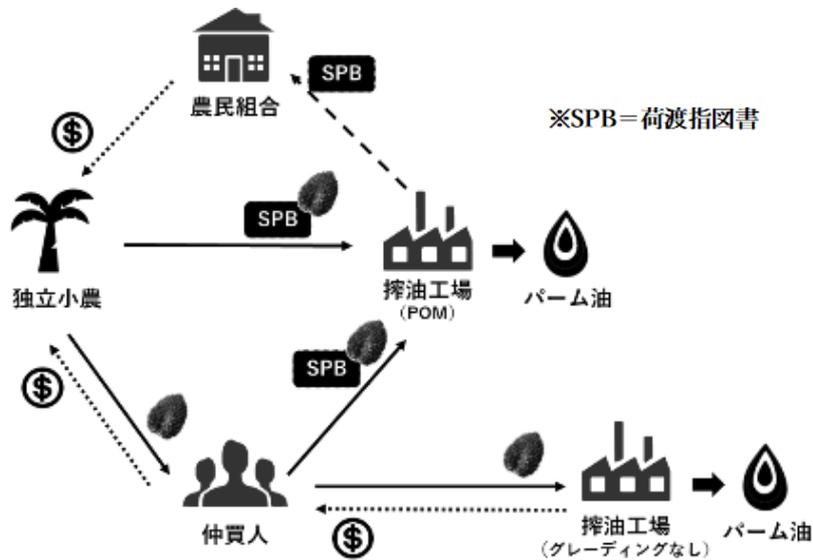


図 3-3：CPO が搾油されるまでのサプライチェーン

3-4 その他の収入源

本節では、村内におけるアブラヤシ果房販売以外の主な収入源である、ツバメの巣養殖やプラズマ分収、企業労働などを説明していく。特に、ツバメの巣養殖は対象地域周辺においては新しい収入源として村人たちに迎合されており、教会や家での祈りの言葉の中にもアブラヤシと同列で含まれている⁴³。村人の将来の繁栄がかかっている産業である。

(1) ツバメの巣養殖

対象村周辺ではアナツバメが作り出す食用ツバメの巣（学名：*Collocalia fuciphagus*）が新しい収入源として注目され始めている。これは古くからボルネオ島の内陸地で収穫されるものであったが、18 世紀後半から商品として価値を持ち始め、その価格は上昇し続けている（佐久間 2017）。

油」として販売されている可能性を示唆している。サプライチェーンの上流部では、小農や仲買人の巧みな販売戦略によって、認証制度のトレーサビリティが危ぶまれていることを示す一例である。なお、他の搾油工場がなぜグレーディング制度がないのか、点については本調査では明らかにできなかった。

⁴³ ダヤック人の多くはプロテスタントであり、毎週日曜日には教会で礼拝が行われる他、平日にも信者の家が集会場となり、隣人の祈り（*Ibadah Rumah Tangga*）が行われる。

元は洞窟で採取されていたツバメの巣は、対象村では2012年に2人の村人によって養殖技術が導入され、現在では村のあちこちで養殖用の建物が確認できる。この建物の建設には一つあたりRp100,000,000（日本円で77万円に相当）ほどかかるようであり、これに加えてツバメを呼ぶための音声はRp.7,000,000-20,000,000ほどかかり、大きな初期投資が必要な生業である。必要とされる技術は月に一度だけ内部を清潔に掃除することや、ツバメの出入り口の大きさを調整すること、室内の温度を低く保つことなどである。収穫は平均的に一ヶ月に一回であり、収穫量が多い世帯では1.7-2.0kgを安定的に確保していた。取引価格は1kgあたりRp.10,000,000-12,000,000と高額であり、全て仲買人に買い取られた後に主に中国に輸出される（写真3-1）。旧正月や断食月の時には価格が急落するようである⁴⁴。



写真 3-1：ツバメの巣と仲買人

（注）左：ツバメの巣。色は白い方が、形はお椀型に近い方が取引価格は高い。右：仲買人との交渉の様子。仲買人が生産者の家に直接訪問する方法や、仲買人の家に生産者が訪問する方法、または、生産者が仲買人を自宅に呼ぶ方法がある。生産者は10人程度の仲買人の電話番号を保持しており、電話かSNSを使用して一番高い取引価格の仲買人を選択する

ツバメの巣養殖は大きな収入源になる可能性は秘めているものの、成功するための方法は、音声を工夫すること以外は村内で統一した知見は共有されておらず、村人たちは試行錯誤を繰り返している。安定的な収入をもたらすアブラヤシと比較すると、土地節約的かつ労働節約的である特性が好まれているが、運任せ的な側面をも備える産業である。

（2）プラズマ分収

3-2でプラズマ農園が建築された背景と、そこからの収益が農園企業と地域住民との間で7:3の割合で配分されていることを説明した。ここでは村人の生計の中におけるプラズ

⁴⁴市場メカニズムとは相反する現象が確認されたが、このメカニズムについては本調査では解明できなかった。

マ農園からの収益（以下：分収⁴⁵）が農民に分配される方法と制度を組合 KB から入手した資料を元に説明していく。

組合 KB から入手した、2018 年 7 月のプラズマ分収の世帯ごとの内訳表⁴⁶を確認すると、当月はプラズマ農園全体からは収穫された果房の 30%に相当する Rp238.135.739 が組合 KB の組合員が有する約 1,000ha に配当されていた。これを計算すると、各組合は 1ha あたり Rp231.902 の分収を獲得できるということである。

このプラズマ農地は前述したように、先取占有に基づいて保有される焼畑地に造成されたため、各世帯が保有していた焼畑地の面積が基本的にはプラズマ農園の面積と等しくなっている。しかし、このプラズマ農園においても農民間で売買が行われており、農地を購入し、一人で 30ha 以上保有する組合員も確認できた。

村人にとってプラズマ分収は一回の額は決して大きくはないものの、働かずとも手に入る不労所得であり、さらに安定的な収入源である。また、アブラヤシの生産サイクルが終了する 28 年後にはプラズマ農園は農園企業から返還され、所有者が自由な管理を行うことができるため、組合員にとっては確保しておきたい収入源と土地である。

(3) 企業労働

対象地周辺には植林企業や石炭企業などがあるが、アブラヤシ農園企業の Rea-Kaltim で就業する村人が圧倒的に多いようである。Rea-Kaltim での職種には事務所で働く管理職から農園や搾油工場で働く肉体労働まで幅が広いが、教育水準の低い対象村の村人は肉体労働者として雇用される。

基本給は管理職で月に Rp7,000,000-8,000,000、肉体労働者は Rp3,000,000 前後である。肉体労働者の場合、労働時間は 7:00~14:00 で指紋認証式の勤怠入力システムなどによって厳格に管理されている。農園では収穫作業などの重労働は男性、施肥や除草剤の撒布などの軽労働には女性が割り当てられている。村人にとっては女性が現金収入を得ることができる雇用機会として迎合されているようである（写真 3-2）。

⁴⁵ インドネシア語では一般的に *Bagi Hasil* と呼ばれているものである。それを直訳したのが「分収」であり、この表記は同じく統一管理方式による収益分配を解説した寺内（2018）にならう。

⁴⁶ 付録の [プラズマ分収の内訳表] 参照



写真 3-2：農園企業での労働者の様子

(注) 左：指紋認証システムで勤怠を打つ労働者

右：トラックの荷台に乗って一斉に農園から村へ帰る女性の労働者たち

管理職は高収入を得ているが、学歴が障壁となっていくら労働経験が長くても昇進できないことに不満を感じている。しかし、収入の安定性に対しては高評価であり、これは肉体労働者にも当てはまる。企業の規則に縛られているものの、安定した給料は得られているために労働を続けているような状況である。

(4) 収入源の比較

上記の対象村における主な収入源に日雇い労働、公務員を加え、いくつかの指標をもとに大まかに比較したのが以下の表 3-3 である。労働の選択は家計状況や労働、土地の賦存量によって基本的には左右されるが、それ以外には以下の表にあるように安定性や労働対価、自律性などが重視されていた。また、収入をその場で得るか、一月待つか、といったような時間選好の幅が収入源の選択に影響を及ぼしていた。

表 3-3：主な収入源の特性比較

		収入	安定性	労働対価	自律性	コスト	特筆事項
アブラヤシ		◎	◎	○	○	△	収入の大きさ、収入安定性が好まれる
ツバメの巣		◎	○	◎	◎	△	コスト大・運任せだが、労働対価の大きさが好まれる
企業労働	高	◎	◎	◎	△	—	学歴依存体制が不満だが、給料は高い
	低	○	◎	○	△	—	自律性は低い、安定的収入が好まれる
日雇い労働		△	△	○	◎	◎	収入・収入安定性は低い、自由な労働が好まれる
公務員		○	◎	○	○	—	収入は大きくないが、安定収入が好まれる

(出所) 村人の話をもとに筆者作成

(注) ◎：非常に高い評価，○：高い評価，△：評価は高くない，—：評価対象外

3-5 小括

本章では、対象村の生業が焼畑農業からアブラヤシへと変化した過程を整理し、加えて農民のアブラヤシ生産の状況と他の収入源を概観した。農園企業の操業に始まり、PPMDを契機として巻き起こった「アブラヤシブーム」によって村人たちの生計は大きく変化した。村人自身のアブラヤシ開発は現在に至るまで続いており、焼畑地や二次林、原生林が伐開され、アブラヤシ農園に転換されている。そして、その過程で伝統的な生業であった焼畑農業は、空間的にも技術的にも対象地から締め出され、次第に消失していった。対象地の農業は、食糧作物を生産していた生存のための農業から、現金収入の獲得を目的にした経済のための農業へと移り変わってきたのである。「アブラヤシ農民の焼畑回帰」という本研究の命題は、このような農民たちの発展経路をまさに逆行していることがわかるだろう。では、なぜ過去の生業である焼畑を求める農民が発生したのだろうか。アブラヤシを生業の中心とする農民の生計から、その様相を明らかにしていく。

第4章 各階層のアブラヤシ農民の生計戦略

本章では、アブラヤシ生産を組み込んだ生計の様相を明らかにすることで、焼畑回帰志向が生まれた背景を解き明かしていく。まず、調査対象とした農民全体のアブラヤシへの依存度を把握し、階層分化の現状を把握する。次に、階層毎に生計の様相を明らかにするため、相互評価法によって調査対象者を階層分けし、さらに世帯調査によって各階層のアブラヤシ生産を中心とした生計の様相を把握していく。最後に、中間層がアブラヤシ生産に対して抱く「不安」について考察していく。

4-1 アブラヤシに依存する農民たち

まず、搾油工場への果房搬入量から、組合員がアブラヤシから得る月間収入を概算した。図 4-1 は、2017年1月から2018年8月までの20ヶ月分間に各組合員が搾油工場に搬入した果房の重量(kg)を月間平均で示したものである。この中には仲買人が含まれているために、運搬された全ての果房が組合農民の個人保有農園から収穫されたものではないが、小農がアブラヤシ果房販売から得る大体の月間収入を把握することができる。

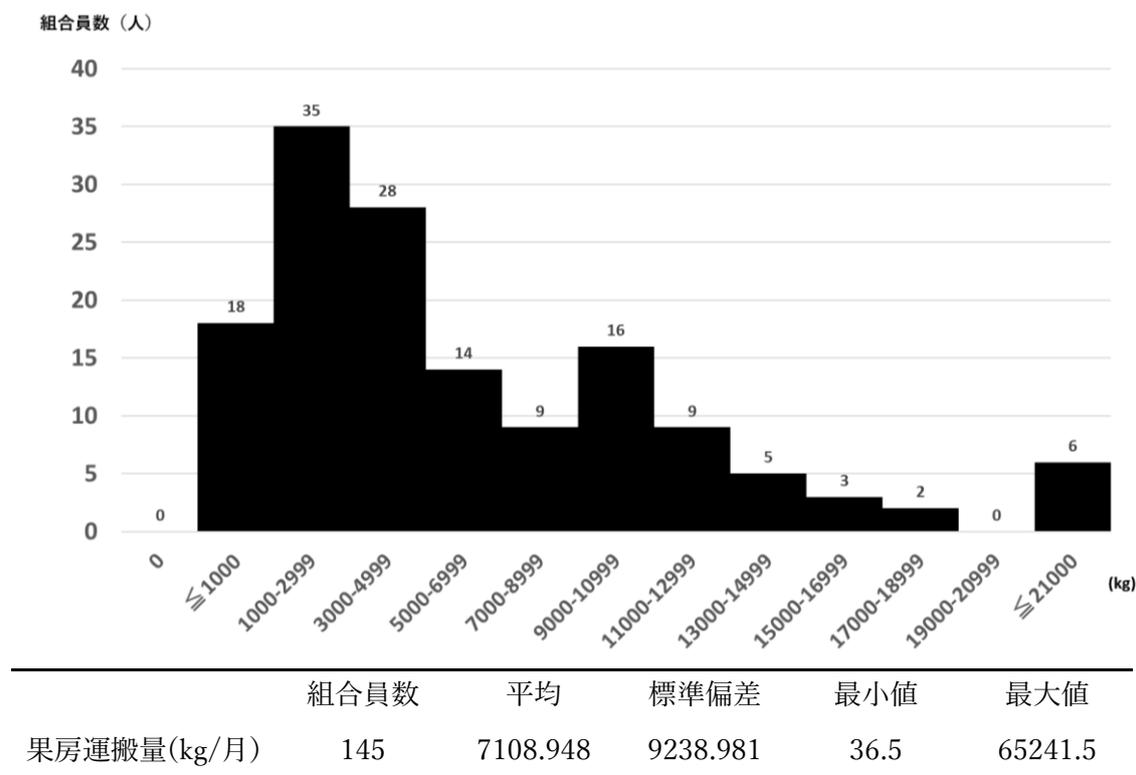


図 4-1：農民組合員の月間果房運搬量の基本統計
(出所) Rea-Kaltim から提供された資料より筆者作成

月あたり 1,000-2,999kg の果房を運搬する農民が 35 人と最も多い。果房販売価格が 1kg あたり Rp1,500 だとすると、月平均で Rp1,500,000-4,500,000(日本円で 11,550-34,650 円) もの収入を得ることになる⁴⁷。また、その 10 倍程度にあたる 21,000kg 以上を運搬する農民は 6 人おり、果房運搬量の分散が確認できる。最大値の 65,241kg を記録した農民は、60ha 以上の農地を個人で保有して大地主であり、月平均で Rp100,000,000 近い粗収入をアブラヤシから獲得している計算になる。一方で最小値の 36.5kg を記録した農民は、搾油工場への搬入は不定期であり、仲買人に頻繁に販売しているためにこのような数値になっている。

次に、世帯調査によって入手した情報を元に、各世帯の主要収入源の内訳を図 4-2 で整理した。[①全収入に占めるアブラヤシ果房販売からの収入の割合] の平均は 63%であり、これにプラズマ農園からの分収と Rea-Kaltim での労働賃金を加えた [②全収入に占めるパーム油産業からの収入の割合] の平均は 76%に達する。割合が 0%である農民は、農民組合に加入しているものの、農園から安定的な収穫はできておらず、農外収入に依存していた。全体を見ると、対象村における農民の生計はアブラヤシに強く依存しており、アブラヤシ果房販売、またはパーム油産業全体からの収入が家計の柱になっていることが分かった。

⁴⁷ Rp = 0.0077 円 (2018 年 8 月 1 日時点) で換算した。なお、2018 年の東カリマンタン州における最低賃金は Rp 2.543.331 (≒19,584 円) である。(Keputusan Gubernur Kalimantan Timur. Nomor 561/K.713/2017)

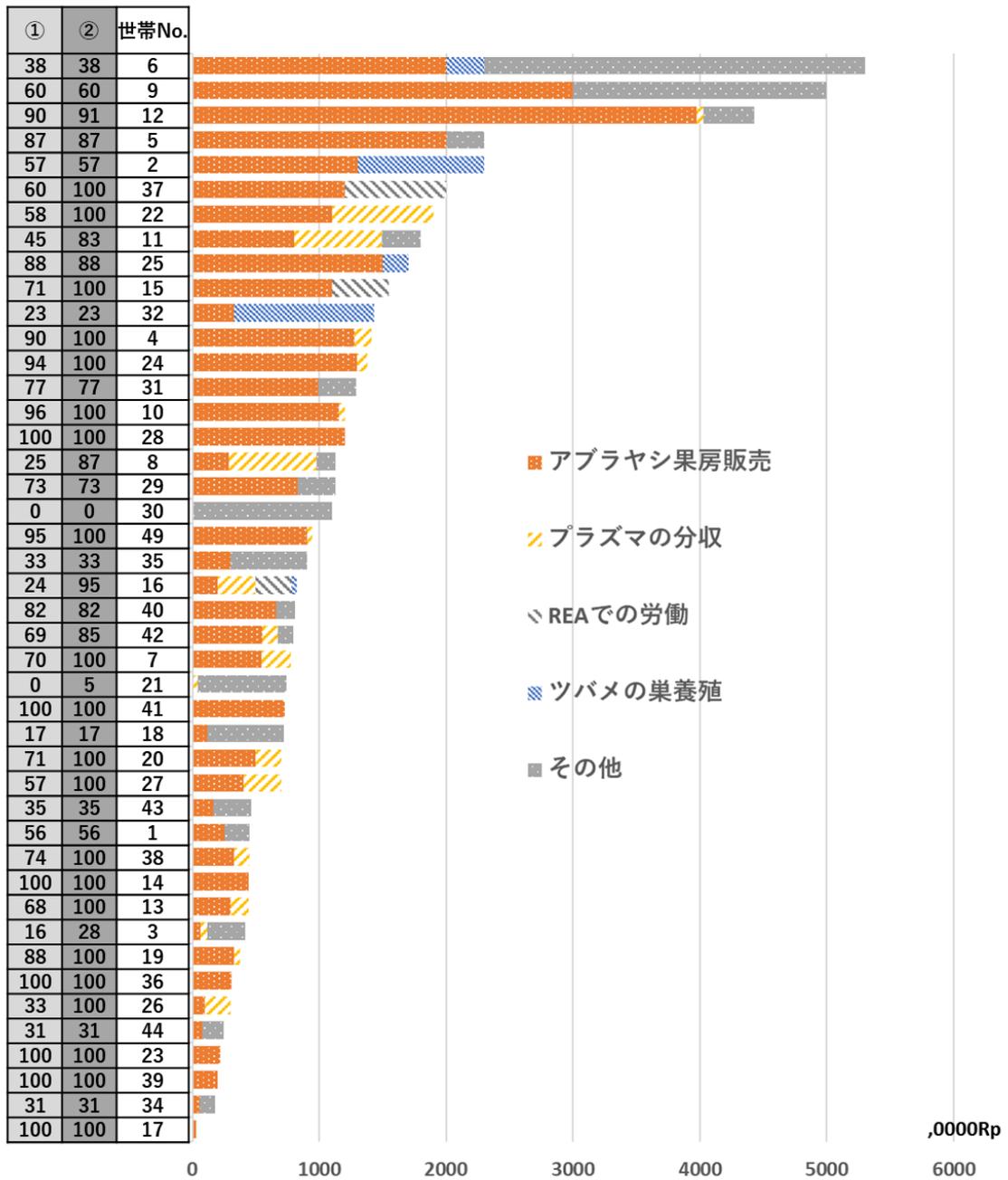


図 4-2：各世帯の主要収入源とその内訳

(出所) 世帯調査より筆者作成

(注) ①：全収入に占めるアブラヤシ果房販売からの収入の割合 (%) ②：全収入に占めるパーム油産業からの収入の割合 (%)

対象村の多くの村人は経済的な豊かさを求めてアブラヤシを選択し、今ではそれを生計の中心に据えている。しかし、全ての村人がアブラヤシを生産しているわけではない。さらには、アブラヤシ農民の中でも生産規模や管理の質に異なりが見られる。村人の認識によると、焼畑時代は世帯間の経済水準は平衡であったが、アブラヤシが拡大するにつれて格差が表出してきたようである。この傾向は先に示した組合員の月間果房運搬量データからも明らかであり、加えて、フィールドワークを通じて家のつくりや家財、食べ物などは均質的とは言えない状況であった。では、経済状況が異なる各階層の人々はどのようにアブラヤシを生計に組み込んでいるのだろうか。

4-2 村人の階層分け

村人の階層分けの方法として、本調査では「相互評価法 (Wealth Ranking)」を用いた。2-4で説明したが、この方法は特定の村人が有する「豊かさ」の基準に基づいて他の村人を豊かさ順に並べてもらう方法である。自給自足的な部分が大きい村落においては、「経済力」の測定方法には「所得」という指標が必ずしも正しいわけではなく、勤勉性や借金などの見えにくい要素を基準にすることで、一時的な変動に左右されずに、世帯の実情を把握することができる (佐藤 2002 pp.109-113)。

本研究の対象地では、自給自足的な部分は既に消失しているが、世帯ごとに保有する農園面積は焼畑時代の伐開面積に比例していることや、労働の意欲や賢さ、人間関係の範囲などが豊かさを規定する要因であると仮定したため、相互評価法による階層分けが有効であると考えた。また、組合に加盟していない村人は文書化された収入証明がなく、日雇い労働などの不安定収入で生計を整えており、一方の富裕層は都市でのビジネスが複数あったり、既得権益を死守するために黙秘的であったりするために、所得という指標だけでは経済状況を把握しにくい。村人による相互評価を繰り返すことで、このような限界を補完して、ある程度の経済状況を把握し、またそこからの情報を元に再度インタビューを試みることで情報の厚みを増やすことができると考えた。

手順としては、初めに慣習長の基準により対象世帯を経済階層の上・中・下に分けた⁴⁸。次に、分けられた各階層 (上・中・下) からそれぞれ村内事情に精通し、かつ筆者とのラポールが十分に形成されたダヤック人先住民世帯を有意的に抽出し、同様にそれぞれの基準によって階層分けを行ってもらった。さらに、各階層の代表者に加えて対象村に居住経年の長いスマトラ人、そして次世代を担うダヤック人若年層 (25 歳男子大学生) に協力してもらい、属性の異なる 6 人それぞれが持つ豊かさの基準に準じてサンプル世帯を階層分けした。(写真 4-1)

⁴⁸ それぞれの階層はインドネシア語で経済水準 (*Tingkat Ekonomi*) の上 (*Atas*)、中 (*Tengah*)、下 (*Bawah*) という言葉を用いた。また、経済水準 (下) の村人のみ中下 (*Tengah Bawah*) という指標が表れ、4段階での階層分けになった。



写真 4-1：豊かさランキングを行う村人
 (出所) 筆者撮影

表 4-2 がその結果である。原則として経済階層の上を 1 点、中を 2 点、下を 3 点とし、平均値の低い順番に並び替えたものである。経済階層・下のダヤック人のみ 4 段階で分類分けしたため、上を 1 点、中を 2 点、中下を 3 点、下を 4 点としている。6 人の階層分け主体によって得られた結果を統合し、表 4-1 に従って経済階層の「上」「中」「下」に分類した。

表 4-1：経済階層分けの基準

経済階層	基準	世帯数
上	3 人以上に経済水準の「上」に分類された世帯	13
中	経済水準が「上」と「下」の間	26
下	2 人以上に経済水準の「下」に分類された世帯	12

続いて、表 4-3 においてランキング付けを行った各主体の階層ごとの基準を整理した。

表 4-2 : Wealth Ranking の結果と階層分け

世帯	慣習長	ダヤック(下)	ダヤック人(中)	ダヤック人(上)	スマトラ人	ダヤック(若)	Average	アブラヤシ果房販売が収入に占める割合
2	1	1	1	1	1	1	1.00	56.5
5	1	1	1	1	N/A	1	1.00	87.0
9	1	1	1	N/A	1	1	1.00	60.0
11	1	1	1	1	1	1	1.00	44.5
12	1	1	1	1	1	1	1.00	89.7
48	1	1	1	N/A	1	1	1.00	-
6	1	1	2	1	1	1	1.17	37.7
25	2	1	1	1	1	1	1.17	88.2
37	1	1	1	1	2	1	1.17	60.0
42	1	1	2	1	1	1	1.17	69.4
22	1	1	2	1	2	1	1.33	57.9
27	2	1	2	1	2	1	1.50	57.1
39	1	3	2	1	1	1	1.50	100.0
18	2	N/A	1	2	1	2	1.60	16.7
31	2	2	N/A	2	1	1	1.60	76.7
29	1	2	2	2	2	N/A	1.80	73.4
3	1	2	2	2	2	2	1.83	15.9
8	2	2	2	2	2	1	1.83	25.1
10	1	3	2	2	2	1	1.83	96.1
24	2	2	2	1	2	2	1.83	94.1
28	2	2	2	2	2	1	1.83	100.0
1	2	2	2	2	2	2	2.00	55.5
4	2	3	2	2	2	1	2.00	90.2
7	2	3	2	2	N/A	1	2.00	70.1
15	2	2	2	2	2	2	2.00	71.0
16	3	N/A	2	2	2	1	2.00	24.4
21	2	N/A	2	2	2	2	2.00	0.0
26	2	2	2	2	2	2	2.00	33.4
30	2	2	2	3	2	1	2.00	0.0
32	2	2	2	3	1	2	2.00	23.1
34	2	N/A	2	2	2	2	2.00	31.3
35	2	N/A	2	2	2	2	2.00	33.3
38	2	2	2	2	2	2	2.00	74.0
40	2	3	2	1	2	2	2.00	82.0
41	2	3	2	2	2	1	2.00	100.0
43	2	N/A	2	2	2	2	2.00	35.5
49	2	3	2	1	2	2	2.00	95.1
13	2	3	2	2	N/A	2	2.20	68.3
19	N/A	3	2	2	2	3	2.40	87.7
20	2	4	3	2	3	1	2.50	71.4
46	2	4	2	2	2	3	2.50	-
14	3	4	3	2	3	1	2.67	100.0
36	2	4	3	3	2	2	2.67	100.0
44	2	3	3	3	2	3	2.67	31.3
50	1	3	3	3	3	3	2.67	-
17	2	4	3	3	3	3	3.00	100.0
23	3	4	3	3	3	3	3.17	100.0
51	3	4	3	3	3	3	3.17	-
52	3	4	3	3	3	3	3.17	-
53	3	4	3	3	3	3	3.17	-
54	3	4	3	3	3	3	3.17	-

(注) 階層分け主体によって「豊かさ」の基準が異なる点がこの調査法の特徴であるため、同一世帯でも大きく異なる点数が付けられることがある。例えば、世帯番号 50 は世帯主が病気であり、妻の収入に依存しているために多くの主体から低い評価を得ているが、慣習長は YM 氏（村で一番の富裕者）の実弟であるため高い評価を付けている。番号 20 は未亡人であることが低く評価されているが、保有土地面積が大きいことが高く評価されている。番号 30 は 2017 年に家が全焼したことが低評価の理由だが、野心的で賢く、農民組合のスタッフであることが評価されている。

表 4-3：相互評価法の各基準

	上	中	下	保有農園面積	月間収入*	
慣習長	<ul style="list-style-type: none"> ・PPMD 参加農民, またはその家系 ・車の複数台所持 ・アブラヤシ以外の安定収入あり (ツバメの巣, 車修理) ・高い位の企業労働者 	<ul style="list-style-type: none"> ・低賃金の安定的企業労働+アブラヤシ農園の保有 ・親や子のどちらかがアブラヤシ農園を保有 	<ul style="list-style-type: none"> ・車の所持なし ・焼畑時代における怠惰農民, またはその家系 	下 ≤ 4ha 4ha ≤ 中 ≤ 10ha 上 ≥ 10ha	下 ≤ 2-3jt 3jt ≤ 中 ≤ 15jt 上 ≥ 15jt	
ダヤック (下)	<ul style="list-style-type: none"> ・アブラヤシ以外の安定収入あり (ツバメの巣, 車修理) ・土地の購買経験あり ・高い位の企業労働者 ・村で政治力あり ・村役場のスタッフ 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人農園とプラズマ両方からの収入 ・車の所持 ・アブラヤシ以外の安定収入あり (ツバメの巣, 修理) ・土地の購買経験あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・車の所持 (半数) ・プラズマ分収への生計依存 ・アブラヤシ農園保有 + 他安定収入なし 	<ul style="list-style-type: none"> ・日雇い労働 ・識字能力なし ・車・バイクの所持なし ・土地の売却経験あり ・視野が短い 	下 ≤ 1ha 1ha ≤ 中 ≤ 5ha 5ha ≤ 中 ≤ 15ha 上 ≥ 15ha	下 ≤ 1jt 2jt ≤ 中 ≤ 5jt 5jt ≤ 中 ≤ 15jt 上 ≥ 15jt
ダヤック (中)	<ul style="list-style-type: none"> ・アブラヤシ以外の安定収入あり (ツバメの巣など) ・他都市に家あり ・高い位の企業労働者 ・大規模なプラズマ農園所有 	<ul style="list-style-type: none"> ・低賃金の安定的企業労働+アブラヤシ農園の保有 ・雇用機会なし+アブラヤシ農園からの十分で安定的収入 ・車の所持 ・村の外に土地ある 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの収入依存 ・安定的な収入源なし ・プラズマ分収のみの安定収入 ・プラズマ分収への生計依存 	下 ≤ 2ha 2ha ≤ 中 ≤ 10ha 上 ≥ 10ha	下 ≤ 2jt 2jt ≤ 中 ≤ 10jt 上 ≥ 10jt	
ダヤック (上)	<ul style="list-style-type: none"> ・アブラヤシ以外の安定収入あり (ツバメの巣など) ・高い位の企業労働者 ・子どもが大卒, 独立済 	<ul style="list-style-type: none"> ・低賃金の安定的企業労働+アブラヤシ農園の保有 ・アブラヤシへの依存 ・アブラヤシ以外の収入源が小さい ・子どもが独立済 	<ul style="list-style-type: none"> ・土地の売却経験あり ・アブラヤシ農園なし ・小規模なアブラヤシ農園, 乏しい管理 ・新たな土地を購買できない 	下 ≤ 2ha 2ha ≤ 中 ≤ 5ha 上 ≥ 5ha	下 ≤ 2jt 2jt ≤ 中 ≤ 5jt 上 ≥ 5jt	
スマトラ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが大卒, 独立済 ・アブラヤシ以外の安定収入あり (ツバメの巣など) ・継続的な企業労働機会の獲得 	<ul style="list-style-type: none"> ・低賃金の安定的企業労働+アブラヤシ農園の保有 ・雇用機会なし+アブラヤシ農園からの十分で安定的収入 ・車の所持 ・給与の月給での受け取り 	<ul style="list-style-type: none"> ・アブラヤシ農園なし ・小規模なアブラヤシ農園, 乏しい管理 ・多すぎる世帯構成員数 ・子どもへの教育投資なし ・プラズマ分収への生計依存 ・怠惰 	下 ≤ 2ha 2ha ≤ 中 ≤ 10ha 上 ≥ 10ha	下 ≤ 2jt 2jt ≤ 中 ≤ 10jt 上 ≥ 10jt	
ダヤック (若)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが大卒, 独立済 ・土地相続に関する問題なし 	<ul style="list-style-type: none"> ・土地相続に関する問題あり ・大卒ではない子ども ・アブラヤシ農園以外に収入源あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・持ち家なし ・アブラヤシ農園なし ・土地の売却経験あり ・子どもへの教育投資なし ・教育の軽視 	下 ≤ 3ha 3ha ≤ 中 ≤ 10ha 上 ≥ 10ha	下 ≤ 1jt 1jt ≤ 中 ≤ 5jt 上 ≥ 5jt	

(注) *jt はインドネシア語の Juta であり, 100 万を表す

相互評価法の結果、保有するアブラヤシ農園面積の規模と階層には相関関係があることが分かった。ただ、経済階層の「上」に分類される世帯は、アブラヤシ農園面積だけが評価基準というわけではなく、ツバメの巣養殖や都市ビジネスなど、アブラヤシ以外の安定的収入源を保持していることが高く評価されていた。加えて子どもが大卒であることや、サマリンドンなどの都市部に拠点を持っていることなども評価の対象に含まれている。

次に、経済階層の「中」にはアブラヤシからの十分で安定的な収入と企業での低賃金労働に従事している者、または、企業での雇用機会はないがアブラヤシ農園からの収入が十分にある世帯などが分類された。一方で、アブラヤシ以外の安定的な収入源がないことが上位層に上がれない壁になっており、アブラヤシ果房販売に生計を強く依存していると評価された世帯が多くを占める。

経済階層の「下」に分類されたのは、アブラヤシ農園を保有していない、または管理ができないためにそこからの収入は少なく、日雇い労働などから短期的で不安定な収入を確保する世帯である。アブラヤシ果房販売からの収入が確保できていないからこその下位層ということである。

相互評価法によると、経済的に豊かな世帯の多くはアブラヤシ果房販売からの安定収入を確保していた。しかし、上位層はアブラヤシ以外の安定的収入源の確保が高く評価されており、経済的な豊かさとアブラヤシへの依存は必ずしも相関関係にないということを示唆している。

4-3 世帯調査の結果と考察

本節では世帯調査から得たデータを元に、アブラヤシ生産を中心とした各階層の生計戦略を明らかにしていく。まず、アブラヤシから安定的収入を確保できていない下位層の生計を、アブラヤシ農園を保有していない、または保有できなかった要因を中心に分析する。次に、アブラヤシ以外の安定的収入源を持つ上位層の発展経路を整理し、加えて豊かさの獲得に従ってアブラヤシ生産の拡大意欲がどのように変化してきたか、その様相を明らかにする。最後に、アブラヤシへ生計を強く依存する中間層へと順に結果を提示していく。また、上位層と中間層においては世帯調査の結果を元に、アブラヤシの生産拡大に対する意欲が変化した背景を考察する。

4-3-1 「下位層」の生計活動とアブラヤシ

経済階層の「下」の世帯は、アブラヤシからの安定的収入を得られないが故に下位層にとどまっていると評価されていた。表 4-4 は世帯調査によって取得した下位層のアブラヤシ生産の概要である。確かに、世帯 No.20 を除いて下位層の農園面積は 4ha 以下であり、その中の計 4 世帯はアブラヤシ農園を保有していないことが分かる。

表 4-4：下位層によるアブラヤシ生産の概要

No.	人種*	年齢層**	世帯サイズ	サ組合	農園面積 (ha)	仲買人への 果房販売	収穫量 ton/月	果房販売収 入/月***	施肥 /年	収入源-1		収入源-2		焼畑経験	過去の焼畑 保有面積	農地獲得 方法
										****	Rp	Rp	Rp			
20	DT	50	1	BW	9.0	する	4.0	4,400,000	0	アブラヤシ	4,400,000	プラズマ	2,000,000	あり	19.0	焼畑跡地
46	DT	50	5	非加入	4.0	-	0.0	0.0	0	日雇い	不明	プラズマ	556,800	なし	-	相続
14	DT	60	6	BW	3.0	する	4.0	4,400,000	3	アブラヤシ	4,400,000	-	-	あり	40.0	焼畑跡地
36	DT	60	4	PB	3.0	しない	2.0	3,080,000	2	アブラヤシ	3,085,235	-	-	あり	-	焼畑跡地
44	Timur	40	5	非加入	3.0	する	0.7	770,000	2	アブラヤシ	770,000	その他	1,694,000	なし	-	妻の相続
50	DT	40	4	非加入	0.0	-	0.0	0.0	0	妻の収入	3,000,000	-	-	なし	-	-
17	DT	60	4	BW	1.0	する	0.3	330,000	0	アブラヤシ	300,000	-	-	あり	15.0	焼畑跡地
23	DT	35	4	BW	3.0	する	2.0	2,200,000	1	アブラヤシ	2,200,000	日雇い	不明	あり	8.0	焼畑跡地
51	DT	30	5	非加入	0.0	-	0.0	0.0	0	日雇い	不明	-	-	なし	-	-
52	DT	60	2	非加入	0.0	-	0.0	0.0	0	RT長	500,000	-	-	あり	-	-
53	DT	40	4	非加入	1.0	する	0.6	660,000	0	アブラヤシ	660,000	売店	不明	あり	-	焼畑跡地
54	Jawa	50	2	非加入	0.0	-	0.0	0.0	0	大工	3,000,000	-	-	なし	-	-

世帯調査より筆者作成

*DT：ダヤクトゥンジュン，**世帯の中で主にアブラヤシ生産に従事する者の年齢層のこと，***仲買人への販売は[重量×Rp1,100]，POMへの販売は[重量×Rp1,540]で計算した，

****「アブラヤシ」はアブラヤシ果房販売からの収益を意味する

相互評価法でのランキング付け主体からは、下位層に位置づけられる世帯は焼畑時代に「怠惰な (*Malas*)」農民か、またはその家系であると言及されていた。その背景には、対象地における「先取占有」という土地保有制度が大きく影響しており、毎年「真面目に (*Rajin*)」開墾を行った農民とその家系は多くの土地を手にすることができたという考えがある。しかし、状況はそう簡単ではないことが世帯調査から明らかになった。

例えば、世帯 No.14 は焼畑時代に毎年開墾し、約 40ha の土地を保有していたが、プラズマ農園用地として Rea-Kaltim によって騙し取られ、補償金どころか、分収を受け取る権利も与えられていないと語った⁴⁹。また、世帯 No.53 は焼畑跡地の保有権利は持っているものの、親族間で土地を巡ったトラブルが発生しており、自由に利用することができていない。そのため、家の裏のわずか 1ha の土地でアブラヤシを生産している。世帯 No.17 も同様に、同村内の村人に土地を奪われたと語った。世帯 No.20 は広大なアブラヤシ農園を保有しているものの、夫が数年前に他界したために管理がうまくできていないようであった。世帯 No.50 や No.52 は、病気によって働けなくなった世帯であり、このように家庭内の事情によって経済的豊かさを獲得できない例が散見された。

アブラヤシを生産できない世帯がある一方で、アブラヤシをあえて選択しない村人がいることも明らかになった。東ジャワからの移民であり、対象地出身の女性と所帯を持っている世帯 No.54 はアブラヤシ農園を保有していない。理由として、アブラヤシ生産は初期投資や、肥料や労働者を雇用する費用が高額だからである。彼は収入が低くても、コストがほとんどかからない大工としての日雇い労働に従事しており、今はツバメの巣養殖用の小屋建設に対する需要が高いために十分に生活できていると語った。

以上で見たように、下位層は、ただ「怠惰」な農民というだけでなく、土地相続時における親族間の紛争に巻き込まれた者や、一時的な経済的困窮の克服のために土地を手放した者、アブラヤシ農園を持ちつつも、様々な制約によってうまく管理できていない者などであった。また、教育水準が全体的に低い対象村の中でも、小学校の中退者が数人おり、識字能力がないために農園をうまく管理できていないことも明らかになった。

4-3-2 「上位層」の生計活動とアブラヤシ

相互評価法で上位層に分類された 13 世帯は表 4-3 で整理したように、アブラヤシからの収入が大きいだけでなく、それ以外に安定的な収入源を持っていることが高く評価されていた。しかし、調査では総収入におけるアブラヤシ果房販売からの収入と他ビジネスからの収入の割合は正確に把握できなかった。よって、代替手段として世帯調査で得た各世帯のこれまでの発展経路と現在の生計の様子を元に、上位層の生計におけるアブラヤシの位置づけを分析していきたい。ここではまず表 4-5 によって整理した上位層によるアブラヤシ生産の実態を把握していく。

⁴⁹ 慣習長はその失われた土地は世帯 No.14 によって売却されたと指摘しているが、その売買記録などは慣習的であるがゆえに残っていない。

表 4-5：上位層によるアブラヤシ生産の概要

No.	人種	年齢層	農園面積 (ha)	仲買人への販売*	月平均収穫量(ton)	果房販売収入(Rp) **	生産コスト/月***	施肥/年	焼畑経験	農地獲得方法	土地開拓の労働力	アブラヤシ開拓前の職業	PPMD
2	DT	50	4.0	しない	5.0	13,207,119	1,250,000	2	あり	焼畑跡地, 相続, 購入	自力	農民	2005
5	移民	50	15.0	する	25.0	27,500,000	6,250,000	2	なし	購入	自力, 労働者	木材企業労働者	-
9	DT	50	20.0	する	30.0	33,000,000	12,000,000	3	あり	焼畑跡地, 購入	自力, 労働者	木材企業労働者, 役人	2001
11	移民	50	6.0	しない	4.0	8,672,821	800,000	1	あり	購入	自力, 労働者	木材企業労働	-
12	移民	50	8.0	しない	10.0	11,000,000	1,250,000	2	なし	購入	自力	商人	2005
48	DT	50	65.0	しない	-	105,001,643	-	3	なし	原生林開拓, 購入	労働者, 企業	木材企業労働, 他ビジネス	2001
6	DK	50	8.0	しない	10.0	81,598,916	3,000,000	2	なし	購入	自力, 労働者	木材企業労働, 農民	2008
25	DT	50	14.0	しない	14.0	15,618,325	2,866,667	2	あり	焼畑跡地, 相続	自力	木材企業労働, 農民	2001
37	DT	30	11.0	しない	7.6	12,206,869	3,890,000	2	あり	相続, 購入	自力, 労働者	Rea-Kaltim 労働者	2006
42	DT	50	14.0	する	5.0	5,500,000	0	0	あり	焼畑跡地, 相続, 購入	自力, 労働者	農民	2007
22	DT	40	7.0	する	-	1,127,850	-	1	あり	焼畑跡地, 購入	自力, 労働者	農民, Rea-Kaltim 労働者	2001
27	DT	40	3.0	しない	3.0	5,217,357	750,000	3	あり	焼畑跡地, 相続, 購入	自力, 労働者	農民, Rea-Kaltim 労働者	-
39	DT	60	2.0	しない	3.0	3,300,000	-	2	あり	焼畑跡地, 購入	自力, 労働者	農民, Rea-Kaltim 労働者	-

*実際には多くの世帯が仲買人を利用していると思われる。ここでの「する」「しない」はインタビューの際に「よくする」などと表現した世帯である。

** 仲買人への販売は[重量×Rp1,100], POM への販売の場合は組合から受け取る給与明細をそのまま適応した。データは2018年6月のものである。

***コストには雇用労働者の人件費と果房輸送用のトラック費用が含まれる

全体として、組合から受け取るアブラヤシ果房の販売収益は2世帯を除いてRp5,000,000を超えている。世帯 No.22 の果房販売収益は他世帯を比べると見劣りするが、彼は Rea-Kaltim の管理職であり、月給で Rp7,000,000 以上を確保している。農園用の土地は世帯 No.25 を除いて一部は購入していることが分かった。また、造園時の方法も労働者を雇った世帯が多くを占める。

上記の表には記載していないが、造園のための資金は各世帯が主に貯金を切り崩し、持ちうる資本を少しずつ投入したようであった。世帯 No.9 は例外であり、公務員という立場を生かして銀行から借金し、それを元手に大規模な土地を購入したようだ。保有する農園面積で突出している世帯 No. 48 は元村長の YM 氏である。彼は村長であった時の政治力で周辺の土地を買い占め、さらに Rea-Kaltim に申請して大規模な農園を開拓した。世帯 No.6 は仲買人業を営んでおり、荷渡指図書を他の組合農民から買って自分の名義に書き換えているために保有する農園面積とは釣り合わない額の果房販売収入を組合から獲得している。

次に、各世帯のこれまでの発展経路と現時点の生計活動におけるアブラヤシの役割を整理したい。表 4-6 は筆者がインタビュー調査の結果から抽出した上位層の生計の詳細である。

表 4-6：上位層の生計の詳細

世帯 No.	生計の説明
2	昔は貧しかったが、村で初めて開始したツバメの巣養殖で成功し、大きな収入を得た。そこから得た収入を元手に少しずつアブラヤシ農園を造園した。アブラヤシはツバメの巣と違い、安定性に優れているために確保しなかった。今ではツバメの巣養殖をしながら、その仲買人業も営んでいる。
5	スマトラから企業で働くために移住してきた。村で土地を購入して大規模な農園管理を始めた第一人者である。アブラヤシ農園からの安定的収入を基礎に、他の農産物用地を保有している。これに加えて、売店からの収入源がある。子ども2人は大学卒で扶養義務は無く、彼らからの収入も期待できる。
6	夫婦ともに近隣の村出身であり、そこに農地を保有している。対象村ではアブラヤシ農園を保有しており、そこから安定収入を得ている他、果房を運ぶトラックの貸出によって収入を確保している。
9	村役場の公務員でありながら、20ha ほどのアブラヤシ農園を保有している。また、妻と協働してトラックを貸し出すビジネスを行っているため、アブラヤシがなくなっても生計を確保できる。サマリンドに家があり、子どもはすでに大学を卒業し、就業している。
11	スラウェシからの移民であり、対象村出身の妻と結婚した。村周辺で風俗経営を行い、それを元手に妻が相続した土地などにおいてアブラヤシ生産

	を開始した。今は大規模なプラズマ農園と独立農園に加えて、元風俗の家屋の賃貸によって収入を確保している。
12	村で一番古く大きな売店を営んでいる傍ら、アブラヤシ農園を保有している。不安定な収入の売店に対して、肥料と手入れを与えさえすれば安定した収入源であるアブラヤシを組み合わせている。
22	Rea-Kaltim で管理職についており、安定的で十分な収入がある。短大を卒業しており、村の中では比較的教育水準の高い家系の出身である。企業労働に加えてアブラヤシ農園からの収入を得て生活している。
25	大規模なプラズマ農園と独立農園に加えて、搾油工場付近で車の修理業、売店、飲料水販売など、複数の収入源に依存して生活している。加えて、ツバメの巣養殖からも収入を確保している。
27	アブラヤシ農園を保有している。Rea-Kaltim で働いていた時に買った四駆車の貸出を行っている。地面の状態が悪い農園においても果房運搬が可能であるため、需要は高い。また、ツバメの巣養殖からも収入を得始めた。
37	Rea-Kaltim で管理職についており、安定的で十分な収入がある。短大を卒業しており、村の中では比較的教育水準の高い家系の出身である。企業労働に加えてアブラヤシ農園からの収入を得て生活している。
39	大規模なアブラヤシ農園を保有している他、アブラヤシが植わっていない休閑地も保有している。隣に居住する息子たちが車の修理業を営んでおり、自らは売店を営んでいる。また、元慣習長であるため、村内で社会的地位がある。
42	アブラヤシ農園以外にも大規模な水田や休閑地を保有している。農民組合の役職やプラズマ農園からの分収から収入を稼いでいる。扶養する子どもは一人のみで、長子はすでに仕事を心得ており、そこからの収入も期待できる。
48	60haを越えるアブラヤシ農園に加えて、廃鉄業やツバメの巣生産を行っている。息子も独立しており、アブラヤシ農園の共同経営者かつ農民組合において役職を持っている。ツバメの巣養殖や廃鉄ビジネスも行っている。都市にも家があり、そこを拠点とするビジネスも幾つかある。

生計の様子から、上位層の世帯はアブラヤシ農園から得る安定的な収入を維持しながらも、そこから得る収入を元手にして他のビジネスを拡大しようとする傾向があった。特に、対象村周辺で新たな収入源として期待されているツバメの巣養殖に対する投資意欲が顕著であった。アブラヤシは上位層に達するまでに必要不可欠な産業であったはずだが、十分な経済的豊かさをそこから得た後には、アブラヤシ生産の拡大に対する意欲は次第に減退していく様相が明らかになった。

以上で見たような、上位層のアブラヤシ生産拡大に対する意欲の減退は、主に収益性の高

い他の収入源を確保できたことに起因する。また、アブラヤシブームによって土地売買が頻繁に行われ、土地の稀少化に伴って価格が上昇したことがアブラヤシ農園面積拡大への意欲を損なう要因になったと考えられる。調査によると、対象地周辺では、1haあたりの土地価格は2008年にはRp3,000,000程度であったものが、2018年には3倍以上のRp10,000,000へと上昇しており、アブラヤシが既に植えられている土地ではRp50,000,000もの価格で売買されていた⁵⁰。土地の状態などによって価格は左右されるが、対象地周辺で土地価格が高騰していることは間違いないだろう。アブラヤシに優位性が見出されるうちにそこからの安定的収益を確保し、それを元手に将来性が期待される他ビジネスを拡大しようとする、いわば企業家的農民像としての上位層がここでの考察から浮かび上がってきた。

しかし、収益性の高低のみがアブラヤシ生産の意欲を決定する要因ではない。一部の世帯は、アブラヤシという単一資源への依存がもたらす生計の脆弱化を回避するために他ビジネスを拡大していることが調査を通じて分かってきた。実際に、対象村では上位層を含めた多くの村人がアブラヤシ果房の買取価格が世界事情に依存して大きく変動すること、CPOの世界需要が永続的ではないことを認識している⁵¹。アブラヤシに依存する生計の脆弱性に気づき、そこからの脱出を図るために他ビジネスへの投資を拡大した村人の一例として、ダヤック人世帯の中では二番目に金持ちであると称される JH 氏（世帯 No.9）の生計手段の移り変わりを挙げる（図 4-3）。

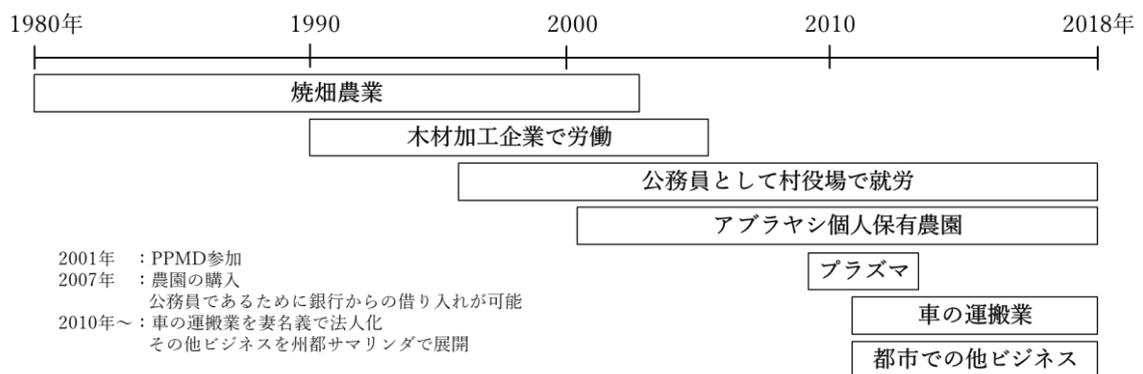


図 4-3 : JH 氏（50 歳・男）1980 年からの生計の移り変わり

JH 氏は木材加工企業で労働していたものの、労働条件が良くなかったために辞め、公務員としての職を得た。公務員での仕事は安定的ではあるが、給料が高くないために他の収入源を確保する必要がある、2001 年の PPMD に参加してアブラヤシ農園を経営した。しかし、アブラヤシ果房販売に強く依存した生計に危機感を感じ、州都サマリндаにある自宅を

⁵⁰ 組合 BW の組合長に対するインタビュー

⁵¹ 村人の話によると、これは本調査の受け入れ先である OPAL が対象村周辺において CPO 需要の予測に関して情報提供していることが一因となっているようであった。

拠点として車の運搬業を開始し、後に法人化した。その他にも複数の収入源を確保している。このように、アブラヤシへの依存を一度は強めたものの、現在は複数の収入源の上に立つような生計を営む JH 氏は、インタビューの最後で以下のように語った。

“私はたくさんの土地を買ってアブラヤシを生産してきた。土地を購入するための資金は主に銀行からのクレジットである。公務員であるためにそれができた。しかし、今の生活はアブラヤシに依存していない。アブラヤシに依存している村の農民たちは果房の買取価格が低下したり、工場が買い取らなくなったりしたら、生活が崩壊するだろう。しかし、私はアブラヤシから収入を得られなくなっても生きていくことができる”

—JH 氏 (50 代男性, ダヤック人) —

JH 氏の発言が示唆するように、既に複数の収入源を確保している世帯はパーム油産業が崩壊しても急に生存の危機に陥ることはないだろう。上位層はアブラヤシ農園からの果房販売によって大きな収入を得ている一方で、単一資源依存の脆弱性を回避するために他収入源を確立する志向がある。

上位層への世帯調査からは、他ビジネスと比較したときの将来性に優位性を感じないため、アブラヤシ生産を拡大する意欲が減退していることが示唆された。また、CPO の世界需要の変動などがもたらすアブラヤシという単一資源に依存する生計の脆弱性から回避するために他ビジネスを拡大している可能性も同時に考えられる。ここから、上位層は企業家的農民でありつつも、リスク回避的な側面を兼ね揃えている農民であることが明らかになった。

4-3-3 「中間層」の生計活動とアブラヤシ

相互評価法で明らかになった中間層の特徴は、アブラヤシ果房販売から十分な収入を確保しているものの、それ以外には安定的な収入源を持っていないことであった。ここでもまず表 4-7 で整理した中間層によるアブラヤシ生産の実態を把握していく。

表 4-7：中間層によるアブラヤシ生産の概要

No.	人種 *	年齢 層	農園面積 (ha)	収穫回 数/月	月平均 収穫量 (ton)	果房販売収入 (RP)	施肥/ 年	収入源-1**	収入源-2	①	②	農地獲得方法	土地開拓の労働力***
18	KT	40	9.0	1	8.0	15,434,547	2	アブラヤシ	仲買人	16.7	16.7	購入	自力, 労働者
31	DT	50	8.0	1	9.0	9,900,000	2	アブラヤシ	教師	76.7	76.7	焼畑跡地	自力
29	DT	50	4.6	2	4.0	8,288,186	2	アブラヤシ	教師	73.4	73.4	焼畑跡地	自力
3	DT	50	2.0	1	0.6	660,000	2	教師	アブラヤシ	15.9	27.9	相続	自力
8	DT	50	5.0	2	6.0	2,837,797	2	プラズマ	アブラヤシ	25.1	86.7	焼畑跡地, 相続	自力
10	DT	40	7.0	1	7.0	11,552,973	2	アブラヤシ	プラズマ	96.1	100.0	焼畑跡地, 相続	自力, 労働者
24	KT	50	5.5	2	6.0	12,951,133	3	アブラヤシ	プラズマ	94.1	100.0	焼畑跡地	自力, 労働者
28	DT	60	7.0	2	8.0	12,665,454	2	アブラヤシ	-	100.0	100.0	焼畑跡地, 相続	自力, 労働者, GR
1	DT	40	3.0	2	4.0	2,496,959	3	アブラヤシ	村役場	55.5	55.5	焼畑跡地, 相続	労働者
4	DT	50	4.3	2	12.0	12,752,153	2	アブラヤシ	プラズマ	90.2	100.0	焼畑跡地, 相続	自力
7	DT	60	10.0	2	3.0	5,439,633	3	アブラヤシ	プラズマ	70.1	100.0	焼畑跡地	自力
15	DK	40	14.0	2	10.0	11,000,000	3	アブラヤシ	Rea-Kaltim	71.0	100.0	購入	自力
16	DT	40	1.0	2	2.0	2,200,000	2	Rea-Kaltim	アブラヤシ	24.4	100.0	焼畑跡地, 相続,	自力
21	DT	40	4.0	2	0	0	0	車修理	プラズマ	0.0	5.3	焼畑跡地	自力

26	DT	40	4.0	1	3.0	3,300,000	1	Rea-Kaltim	アブラヤシ	33.4	100.0	焼畑跡地	自力, 労働者, GR
30	DT	40	1.5	1	0.0	0	0	ガソリン	組合役員	0.0	0.0	購入	自力
32	DT	50	4.0	1	3.0	3,300,000	1	ツバメの巣	アブラヤシ	23.1	100.0	焼畑跡地	自力, 労働者
34	KT	40	6.0	0.5	0.5	550,000	2	ガソリン	アブラヤシ	31.3	31.3	購入	自力, 労働者
35	DT	40	2.0	2	5.0	28,925,762	1	アブラヤシ	車修理	33.3	33.3	相続	自力, 労働者
38	DT	60	2.0	2	3.0	3,300,000	2	アブラヤシ	プラズマ	74.0	100.0	焼畑跡地, 相続	自力
40	DT	50	8.0	2	6.0	6,600,000	3	アブラヤシ	組合役員	82.0	82.0	焼畑跡地, 相続	自力, 労働者
41	KT	50	8.0	2	8.0	7,269,302	1	アブラヤシ	—	100.0	100.0	焼畑跡地, 相続	自力, 労働者
43	DT	40	2.0	1	1.5	1,650,000	1	植林企業労働	アブラヤシ	35.5	35.5	焼畑跡地	自力
49	DT	40	5.0	2	6.0	9,000,000	2	アブラヤシ	プラズマ	95.1	100.0	焼畑跡地, 相続	自力
13	DT	60	5.0	1	3.0	3,300,000	-	アブラヤシ	プラズマ	68.3	100.0	焼畑跡地	自力
19	DT	40	3.0	2	3.0	3,300,000	2	アブラヤシ	プラズマ	87.7	100.0	焼畑跡地	自力

① 全収入におけるアブラヤシ果房販売の割合, ② 全収入におけるパーム油産業, *KT はクタイ人, **「アブラヤシ」はアブラヤシ果房販売からの収益を意味する, ***GR はゴトン・ロヨンのこと

26世帯中、17世帯（65%相当）の最も大きな収入源はアブラヤシ果房販売であることが分かった。逆に農民組合に加盟しているものの、アブラヤシ果房販売が主な収入源となっていない世帯 No.21 と No.30 は両世帯ともアブラヤシ農園を開拓したばかりで、まだ果房が小さいために主収入源に出来ていない。上位層と比較した時に劣っている点は、保有する農園面積規模や年間の施肥回数を指標とした時の農園管理の状態である。直近の一年で一度も施肥を行っていない世帯も確認できた。施肥が十分に行うことが出来ない理由として、多くの農民たちは肥料価格が高額であること、補助金付き肥料が対象村まで供給されていないことを挙げていた。その結果として、一月に一回しか収穫ができていない世帯が複数確認できた⁵²。

中間層への世帯調査によると、一世帯（No.21）を除いた全ての世帯はアブラヤシが対象村に浸透した時期から生活が豊かになったと答えた。では、どのようにして経済的な豊かさをアブラヤシ生産によって手にしてきたのだろうか。TD氏（世帯 No.41）の語りからその過程を辿っていく。

“2005年までは木材企業において伐採の仕事をしながらか焼畑農業を行っていた。毎年1-2haを開墾し、合計で13haの土地を保有していたんだ。2005年に企業を辞めてアブラヤシ農園を造った。もう歳だから企業に縛られて生活したくなかったし、生活も改善したかった。労働者を雇って焼畑跡地をアブラヤシ農園にしたんだ。その時の種は親戚であるYM氏にお願いして手に入れた。YM氏は政治的に力があるからね、彼にお願いしたら簡単に種が手に入ったよ。

以前と比べると今の方が生活は豊かになった。アブラヤシを生産する前まではコメを作るか、企業で働く以外に選択肢はなかった。今は子どもたちに教育機会を与えることもできている。子どもたちは毎日バイクで通学し、お菓子も食べることでできる。

今ではもう造園できる土地がないからツバメの巣養殖を始めたいんだ。友人から教わってRP100,000,000かけて小屋を造っているところさ。あと、もう土地がないし、逮捕されるから焼畑農業はできないよ。コメは高いから本当は焼畑農業がしたいんだけど”

—TD氏（50代男性、ダヤック人）—

上の語りから TD 氏は主にアブラヤシ生産によって、豊かさを得てきたことが分かるだろう。また、上位層と同じように土地価格の高騰によってアブラヤシ農園をさらに拡大させる意欲は薄く、ツバメの巣養殖という他ビジネスの展開を予定していることも語った。しか

⁵² Donough et al. (2010) は、十分な施肥や雨量、除草などがあればアブラヤシ果房は二週間で収穫期を迎えると説明している

し、その後の発言で見ると焼畑農業ができなくなったことや、それによってコメの自給率が低下していることに対しては、不満をこぼしていた。中間層の生計を包括的に見ると、アブラヤシの果房販売に生計を強く依存している世帯が多いことが分かったが、一方でアブラヤシ生産に対して何らかの不安を抱いていることも同時に明らかになった。例えば、IS氏（世帯 No.7）はインタビューで以下のような不安を口にした。

“今は慣習（Adat）ではなく、全て農園企業や政府が決めた法律に従ってる。なぜこれに従わなくてはならないのだろうか。

今では焼畑は逮捕されるために怖くてできないよ。70年代までは森林火災なんて一度も起きなかったのに。村人の焼畑が火災の原因ではない。企業がここに入ってきてから火災が頻発するようになったんだ。それに焼畑ができる土地も少なくなっている。今ではコメを買わなければいけなくなった。以前はつくりすぎて腐ることもあったくらいなのに。確かに、以前と比べると生活は豊かになった。しかし、借金することはよくあるよ。子どもの養育費や通学のバイクのガソリン代などが家計を圧迫している。結局はぎりぎりな生活をしている。

CPOの需要がどこまで続くのかわからない。以前ここに来たIPB⁵³の研究者は2030年には需要が低くなると注意を促してきたよ。もしそうなった時、私たちはどうすればいいのだろうか。まだ解決策はないよ”

—IS氏（60代男性、ダヤック人）—

このように、中間層はアブラヤシによって豊かさを享受していることを認識しつつも、その現状に対して様々な不安や不満を抱えており、それ故にアブラヤシの生産拡大に対する意欲は減退している状況が浮かび上がった。他の世帯が口にした不安の様相は、例えば、「アブラヤシ果房買取価格が急落したら生活できないこと」や「土地が収奪される危険が増えたこと」、「富めるものは富み、貧しいものは貧しいままであること」、「食糧作物用の農地が減少し、食糧を買わなければならなくなったこと」、「森林が少なくなったこと」、そして、「焼畑農業ができなくなったこと」、などであった。調査対象とした中間層は、アブラヤシに依存した生計活動の危うさだけでなく、アブラヤシの拡大がもたらす村周辺の経済、環境、社会面の変動に対しても不安を抱いていることが分かった。

4-4 「中間層」が抱くアブラヤシ生産に対する不安の様相

中間層が抱く不安の様相を、①アブラヤシへの過剰依存による生存リスクの高まり、②村内社会の不平等化、③焼畑農業の消失、に類型化した。以下では、これらの不安が生まれた

⁵³ ボゴール農科大学（*Institut Pertanian Bogor*）の略称。インドネシア最大の農科大学であり、本調査の協力機関でもある。

背景と村人たちの生計活動に及ぼす影響を考察し、中間層が抱くアブラヤシ生産の「不安」の様相を明らかにしていく。

4-4-1 アブラヤシへの過剰依存による生存リスクの高まり

世帯調査を通じて、多くの農民はパーム油産業の停滞に不安を感じていたが、農民が直接的な損失を被るのはアブラヤシ果房の買取価格の下落である。図 4-4 は、世界の CPO 取引価格の上下動の推移を表したものであるが、この上下動と連動してインドネシア国内の果房販売価格も変動している。

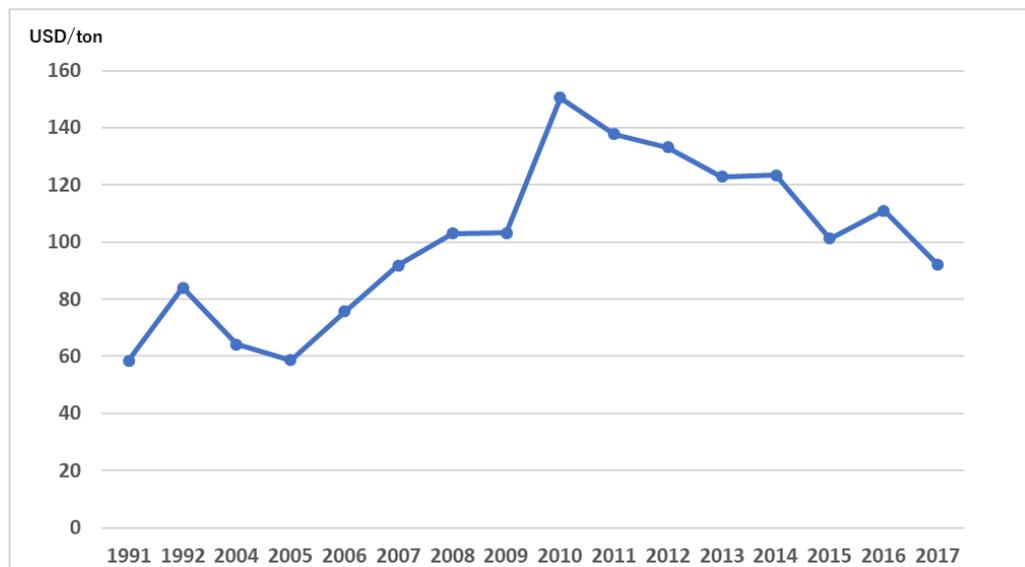


図 4-4 : CPO 価格の変動

(出所) FAOSTAT より筆者作成

インドネシアはパーム油の主要生産国であるが、その価格は金融派生市場 (Derivative Market) によって変動するため、常にプライステイカー (Price Taker) であり、価格変動を調整することは出来ない (Boer et al. 2012)。アブラヤシ小農はこのような世界経済の変動という不確実性の波に常に晒されている。2008 年には、世界的な金融危機の影響を受けてインドネシアの国内のアブラヤシ果房の取引価格は暴落した⁵⁴。国際価格と為替レートの変動は農民の作物選択における意思決定に影響を与えており、果房取引価格の短期間における急落⁵⁵を経験したスマトラ島ブンゴの農民は、収益性の高いアブラヤシの生産を維持しつつも、他の換金作物を用いた収入の多角化に関心を向けるようになった (Feintrenie et al. 2010)。

⁵⁴ Kompas.com 「Harga Sawit Anjlok Sampai Rp600/Kg」 2008/10/10 (最終アクセス : 2018/12/27)
<https://nasional.kompas.com/read/2008/10/10/16531663/harga.sawit.anjlok.sampai.rp600kg>

⁵⁵ 2008 年 7 月の Rp1,800/kg から同年 11 月には Rp600/kg へと急落した。

商品作物栽培が招く生計の脆弱化はアブラヤシ以外の作物を生産する現場においても観察できる一般的な現象である⁵⁶。農民たちは果房取引価格の不確実性を認識し、それによって生計が崩壊する危機を回避するために、食糧作物を生産するための畑作をつくるか、またはツバメの巣養殖のように他の収入源を確保しようとしていた。

4-4-2 村内社会の不平等化

Rea-Kaltim の操業は、搾油工場の建設とその経済効率を最大化するための大規模なアブラヤシ農園の設立⁵⁷、労働者の大量雇用、加えて製造されたパーム油を運搬するための陸上・水上の輸送経路の整備を伴ってきた。これによって交易が発展し、都市へのアクセスが容易になることで、対象村は様々な便益を享受してきた⁵⁸。一方で、交易の発展は村内の政治経済的な安定を脅かす要因をも輸入しており、村人の不安を煽っている。例えば、アブラヤシが浸透したことによって村内で不平等が生まれたことである。

シラ・永田 (2005) は熱帯アジアの森の民、特に狩猟採集に従事する民の間では、交易が頻繁に行われない時代には「わけあい (Sharing)」が「平等主義」を維持していたと説明している。対象地においても焼畑時代の平等社会から、アブラヤシ時代には不平等社会へと変容してきたことは、各地で聞かれた村人の決まり文句から伺うことができる。

“昔は犬を連れて一人で森の中に入り、狩猟をしていた。ブタなどの捕らえた獲物は解体して、村の端から端まで全ての世帯に少しずつ分け与えたものだった。”⁵⁹

—IS 氏 (60 歳男性, ダヤック人) —

このように、狩猟したブタを村の構成員に平等に分け与えるという二者関係の連なりによって、わけあいが過去に存在していたことは多くの村人によって同様に語られていた⁶⁰。このわけあいは、ポラニー (2009) が説明するところの互酬性 (Reciprocity) と似た性質を

⁵⁶ 例えば、中辻 (2004) のラオスのハトムギ生産を行う農民を対象にした研究など。

⁵⁷ Wakker (2004)によると、搾油工場の効率的な稼働には最低で4,000haのアブラヤシ農園が必要とされ、東南アジアでは10,000から25,000haの農園が一つの農園企業によって創業されている。

⁵⁸ 例えば、対象村では物流が円滑化することで生活必需品の多くが周辺の売店で揃うようになった。また、毎週日曜日には市場が開かれ、村の外から野菜や肉、魚などの食材や電化製品や衣類、化粧品など様々な物品が持ち込まれる。

⁵⁹ インタビューで語られる「わけあい」や「わかる」などの言葉は、インドネシア語では *Bagi* であり、動詞の *Berbagi* は分け合う、分かちあう、シェアするを意味している。

⁶⁰ 象徴的に語られる狩猟物はブタのみであり、シカなどの他の動物は表立って語られなかった。村人たちは狩猟のし易さに加えて「味」という基準からブタを好んでいたようである。現在も対象村ではブタはご馳走として、好んで食されていた。

持っており、それは立派な行いに対する賞賛であって直接的な物質的利益を得ることなく、共同体の成員としての徳目の実行に対して経済的な補償を得るに過ぎなかった⁶¹。また、Woodburn (1998)も、狩猟採集民がわけあいを行う動機には、分け合う行為そのものではなく、分け合うものを獲得できたその能力に対して得る満足感の充足であったと説明している。また、その原理は食糧配分の規制に加えて、不平等者の発生を防ぐ役割もあったと指摘している。

しかし、アブラヤシの拡大に伴って貨幣が浸透する過程で、この「わけあい」の原理は貨幣を媒介とした交換へと形を変えてきたようだ。続いて村人は以下のように語る。

“だけど、今はどうだ？ブタでも魚でも、隣人にすら無料で分け与えることはない。全て金によって取引される。”

—同上—

ここから、「わけあい」によって平等が維持されてきた社会に、交易が持ち込んだ貨幣を媒介とした取引が浸透することで不平等社会が出現したということがわかる。そして、アブラヤシに付随する資本主義という競争を推進力とする経済システムが村内における不平等の創出を後押ししたのだろう。村内が平等社会から不平等社会へと変化し、家の構造や衣類、そして基礎インフラへのアクセスの格差が目に見える形で表出した今、村人たちはそれをもたらした要因であるアブラヤシに対して不安な目を向け始めている。

4-4-3 焼畑農業の消失

中間層への世帯調査、および参与観察を通じて、アブラヤシのおかげで豊かになったという言説と同時に、「焼畑ができなくなった」という言説を度々耳にしてきた。対象地では企業がかつて焼畑農業が行われていた土地にプラズマ農園をつくり、農民自らも焼畑農地をアブラヤシ農園に転換し、さらには火入れ禁止の法律の制定と政府の監視が強化したことで、焼畑農業は空間的にも技術的にも対象地から締め出されてきた(3-2参照)。焼畑農業ができなくなった今、村人はそれを奪った主要因であるアブラヤシ生産に対して不安を抱いており、その反動として、焼畑農業の復興に対する意欲が芽生えている。

しかし、なぜ村人たちは今になって焼畑農業が消失したことに不安を抱いているのだろうか。焼畑農業の消失は、アブラヤシ農園企業による農園建設や焼畑禁止の法令、住民の逮捕などの外生的な要因によってもたらされたが、農民自身も自発的に焼畑農地をアブラヤシ農園へと転換することによって、自ら焼畑農業を放棄してきたはずである。また、焼畑農業の消失の反動としてそれを取り戻そうとする村人たちの行動もいささか不可思議である。複数の収入源があり、食糧が安定的に流通している対象村においては、収穫の不確実性が伴

⁶¹ ポラニー (2009) は、互酬性と並んで再分配 (Redistribution) と家政 (Householding) が、利益という動機が欠けた社会における生産と分配の秩序を保つ行動原理であると指摘している。

う焼畑農業から食糧を獲得することはそれほど効率的ではないはずである。村人にとって「焼畑回帰志向」は、どのような合理性があるのだろうか。

4-5 小括

本章では、各階層の生計活動におけるアブラヤシの役割を相互評価法と世帯調査によって明らかにした。結果として、下位層はアブラヤシ果房販売から安定的な収入が得られないが故に経済階層を上がれない状況が明らかになった。一方、上位層と中間層は、アブラヤシ生産から経済的豊かさを獲得してきたが、今ではその拡大に対する意欲はそれほど高くない現状が見られた。また、生産拡大の意欲が減退している要因が上位層と中間層で異なっていることを明らかにした。

上位層は周辺地の土地価格が高騰していることや、より収益性の高い他ビジネスの拡大を志向しているために、アブラヤシ生産への意欲を失っていた。一方、中間層はアブラヤシ生産に過剰依存していることや、その生産拡大がもたらす様々な社会経済的変動に不安を抱えており、それ故に生産意欲を減退させていることが分かった。そして、中間層が抱える要因の一つに焼畑農業の消失があり、その反動として、村人の中で焼畑を取り戻そうとする「焼畑回帰志向」が芽生えていることが分かった。次章では、この村人たちの「焼畑回帰志向」の成り立ちや目的を解き明かしていく。

第5章 村人たちの「焼畑回帰志向」

「なぜ村人たちは焼畑農業への回帰を志向しているのだろうか」

本章では、この問いに答えながら論旨をまとめていく。はじめに、村人の焼畑回帰志向が具体化した「焼畑復興プロジェクト」の概要を説明し、次に、その活動に関与する村人たちへのインタビューや参与観察を通じて、農民たちが語る焼畑復興の目的を詳しく述べる。加えて、これを後押しする推進力の源泉を分析することで焼畑が持つ多様な機能を明らかにしていく。最後に、「アブラヤシ農民の焼畑回帰」という現象が現代の社会でどのような意味を持つのか、対象村から世界に視野を広げて考察していく。

5-1 焼畑復興プロジェクト

2018年7月、村人たちは焼畑農業の復興を目指して新たに農民組織を形成した⁶²。その後、村長と郡の役人、そして村の周辺企業（主に Rea-Kaltim と植林企業）との話し合いによって、9月には「焼畑復興プロジェクト⁶³」が実行されることになった。これは、植林企業のコンセッションエリア内にある慣習地（*Tanah Adat*）において、200haほどの畑をつくり、村人の共同管理によって食糧作物を生産し、その収穫物を参加農民に平等に分配する計画である。また、農地への火入れができないため、農地開拓の際には Rea-Kaltim と植林企業が重機を貸し出すことが合意された。

参加農民は主にダヤック人であるが、相互評価法で中間層、下位層に分類された農民が大部分を占める。上位層の参加者は慣習長の息子を除いて、調査では確認出来なかった⁶⁴。また、移住者は原則的に参加が許されていない⁶⁵。しかし、居住経年が長い移住者は何人か参加しており、厳格な規則はなく、ルースなルールによって管理されているようであった。また、村人の話し合いによってこの土地は食糧作物専用の畑であること、いかなる理由があってもアブラヤシを植えてはならないことが定められた（写真 5-1）。

⁶² これは村人たちによって自律的に立てられた組合であり、村の名前 Pulau Pinang を取って *Pinang Bersatu*（一つになる *Pinang*）と名付けられた。

⁶³ 村人たちは一般的にインドネシア語で「畑作をする」という意味の *Berladang* と呼んでいる。

⁶⁴ 世帯調査を通じて、下位層に分類される幾つかの世帯は、焼畑復興プロジェクトの存在自体を知らなかった。他の村人との紐帯と豊かさにも相関があるようであった。

⁶⁵ 畑作を行う慣習地は先住民ダヤック人の先祖が森を伐開した跡地であり、その土地を利用できるのは血縁関係者のみである、という慣習法に基づいていると考えられる。



写真 5-1：焼畑復興プロジェクトに関する村人たちの会議

5-2 なぜ村人は焼畑農業の復興を望むか

村人は食糧供給源の確保を目的として焼畑の復興を現実化した。この背景には、アブラヤシ農園拡大に伴う焼畑農業用地の減少と、アブラヤシ生産の不確実性に対する不安がある。しかし、対象村の状況を考えると、焼畑からの食糧確保は必ずしも最も効率的な方法というわけではないだろう。では、村人にとって、焼畑農業による食糧供給はどのような優位性があるのだろうか。焼畑が重要視されるようになった背景を農民たちの語りや、村の歴史から紐解いていく。

5-2-1 生存のためのセーフティネット

焼畑時代における生業の様子を尋ねると、村人たちは長期間な乾季に伴う「飢餓の危機」を乗り越えた経験を頻繁に語る。村人たちによると、対象村は 1982-83 年、1987-88 年と 1997-98 年に長期的な乾季に襲われたようだ。これは、Climate Prediction Center⁶⁶が管理するエルニーニョ現象の発生年度のデータとも時期が一致しており、自然環境の不確実性が村人たちの生活に直接的な影響をもたらしていることが見て取れる（図 5-1）。

⁶⁶ http://origin.cpc.ncep.noaa.gov/products/analysis_monitoring/ensostuff/ONI_v5.php

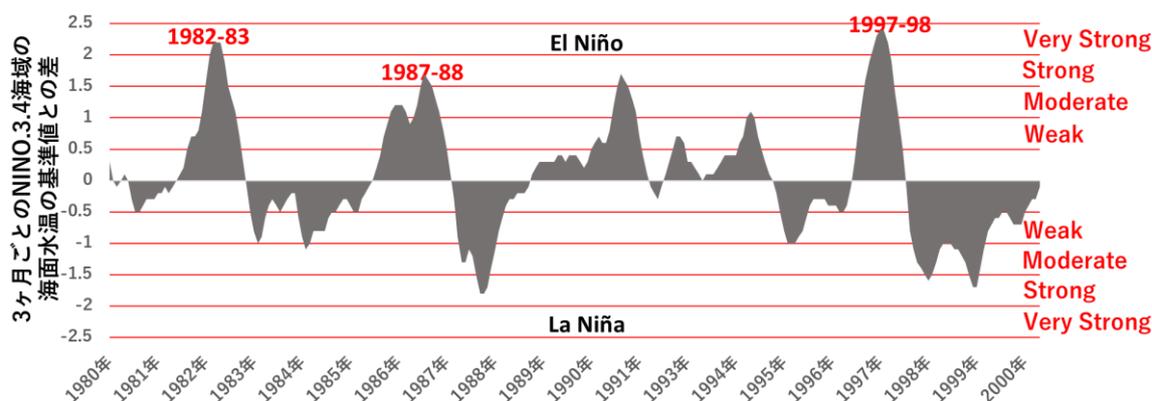


図 5-1：エルニーニョ・ラニーニャ現象年表

(出所) <https://www.gweather.com/enso/oni.htm> より筆者作成

1982-83 年、1987-88 年の長期的乾季に襲われた当時はまだ焼畑時代であり、多くの農民が陸稲栽培を基軸として森林資源から補足的に他の栄養分を調達していた。そのため、長期的な乾季の影響による陸稲の不作は村人たちにとっては生活を崩壊させる危機であった。しかし、そのような状況においても村人は飢えを経験しなかった。当時の経験について TR 氏は以下のように語る。

“1982 年の長い乾季 (Kemarau Panjang) ではコメが全く収穫できなかった。森も焼け、そこにいる動物たちも死んで獲れなくなった。だから代わりにキャッサバやバナナを食べていたんだ。当時、農民はコメ栽培と同時にキャッサバの栽培も行ってた。広大なキャッサバ畑があったから飢えることはなかった。”

— TR 氏 (40 代男性, ダヤック人) —

1982 年の長期的乾季において、主食が生産できず、コメを購入できるほどの恵まれた現金収入源を持たない村人たちの危機的状況を救ったのは、休閑地で生産していたキャッサバなどの乾燥に強い他の作物がセーフティネットの役割を果たしたからであった⁶⁷。このように、焼畑農業の陸稲と収穫後の休閑地に栽培される他の作物との複合がもたらす生業の柔軟性は、Brookfield et al. (2001) によっても高く評価されてきた。対象地を始めとする焼畑民は、火入れによって拓かれた「畑」としての役割を終えた後の休閑地から多様なサービスや財を獲得することで、柔軟で強靱な生計を形成している。しかし、現在では焼畑農業の

⁶⁷ 1997-98 年の時には焼畑時代からアブラヤシ時代への移行期であり、一部の村人はアブラヤシ農園企業などでの労働に従事していた。そのため、陸稲の収穫が失敗しても労働賃金が確保されていたために食糧を購入して生計を営むことができた。(村人へのインタビューより)

消失によって村人は大規模なキャッサバ畑をつくることができなくなり、家屋の周辺や道路の脇などの極小規模な面積で生産しているのみである⁶⁸。

村人たちが依然として食糧供給源としての焼畑を求めている背景には、飢餓の危機を焼畑の休閑地利用によって乗り越えたという歴史が強く影響している。村人は、効率的に食糧を獲得する手段ではなく、自然環境や市場などの不確実性に対して柔軟に対応する「生存のためのセーフティネット」として焼畑を志向していると考えられる。

5-2-2 焼畑民としてのアイデンティティ

前項では、「生存のためのセーフティネット」を求めて村人たちは焼畑への回帰を志向していると説明してきた。ただ、近代化が進んだ現在の対象村では、焼畑農業以外にも政府の公共サービスや農民組合がセーフティネットとしての役割を果たしているために、それだけでは焼畑回帰志向を十分には説明しきれない。では、他にどのような目的が考えられるだろうか。

対象地のダヤック人トゥンジュン族は、何世代にも渡って焼畑農業を営んできた。アブラヤシに生計を依存し始めたのはつい最近の20年くらいの出来事であり、焼畑農業を基軸として生活を営んでいた歴史と比較するとその期間は非常に短い。村人たちの生活は至るところで焼畑と強く結びついており、その繋がりは焼畑が消失した現在においても強固であることが調査を進める中で分かってきた。例えば、村の小道の雑草を除去するゴトン・ロヨン (*Gotong Royong*⁶⁹)に参加した際、「なぜまた焼畑農業に戻りたいのか」という筆者からの質問に対して、焼畑復興プロジェクトの中心的人物であるJS氏は以下のように語った。

“プラウピナンのダヤックトゥンジュンの伝統と文化を守るためだ。なぜなら私たちの伝統や文化は消えかかっており、それらのほとんどは焼畑のプロセスの中に含まれている。例えば、ゴトン・ロヨンや焼畑の技術、踊りや歌を通じて神に感謝する (*Bersyukur*) 方法だ”

—JS氏 (50代男性, ダヤック人) —

この発言から、焼畑農業とは単に生存基盤を提供する場ではなく、ダヤック人トゥンジュン族としての伝統や文化を形成する場であったことが伺える。すなわち、焼畑農業の消失は村人たちのアイデンティティの喪失を意味しており、焼畑の復興によってそれを防ごうとしているのである。民族のアイデンティティを形成し、維持する焼畑の文化的重要性に関しては数々の「ダヤック研究」によってこれまでも強調されてきた (Potter 2008)。

⁶⁸ 村人たちは依然としてその根と葉を日常的に食しており、特に下位層は米が買えない時には主食として食していた。

⁶⁹ インドネシアで人々の日常生活で見られる相互扶助のこと

では、実際に畑作を行う現場で村人たちは何を語るのだろうか。畑作地へと向かう道中、軽トラックの荷台に揺られながら慣習長の娘である PS 氏は以下のように語った。

“ああ、昔の雰囲気 (*Suasana*) が返ってきた。焼畑 (*Ladang*) をしていた時はこうしてみんなで森に行って、みんなで働いて、みんなでご飯をたべたんだ。火入れが終わると、よく灰を顔に付けあってその成功を祝った。それを断ることはできなくて、みんな真っ黒になったんだ。ブジャモツ (*Bejamok*) と呼ばれるものだ。火入れが無事に終わったことを示す行事だった”

—PS 氏 (20 代女性, ダヤック人) —

この発言は一例ではあるが、やはり昔を懐かしみながら畑作地で作業を行う者が多く、ブジャモツ (*Bejamok*) と呼ばれる灰を顔に塗り合うイベントの存在も頻繁に耳にした。また、上の発言で見ると、村人たちは焼畑農業での作業を、「集团的」に行ったことを強調していた。ダヤック人が焼畑農業の伐採や播種時には投入労働量のかなりの割合を伝統的な労働組織を通じて投入していることは、井上 (1995) が同じく東カリマンタンのダヤック人を対象にした研究から明らかにしている。地域や民族の文化や伝統は個人単位では生じ得ず、常に集団から生まれてくる。焼畑農業の集团的な労働形態は、農作業を効率化することが主な目的であるが、そこでの村人たちの相互作用が同族間の集団意識を生み、結果として文化や伝統などの民族としてのアイデンティティを形成したのではないだろうか。つまり、焼畑農業そのものが村人たちのアイデンティティであり、焼畑農業が持つ集团的労働形態がそれを育むための重要な要因になっていた、ということである。

しかし、現在の対象村では、焼畑農業が行われなくなっただけでなく、村人たちの集团的な労働すらも少なくなっているようだ⁷⁰。それは、生業の中心が資本集約的かつ労働節約的なアブラヤシへと移行するに伴って、集团的な労働形式は自然と取られなくなり、代わって家族労働か日雇い労働者が中心となったことに起因する。アブラヤシは、焼畑が内

⁷⁰ 村人たちの集団行動は、冠婚葬祭などの特別な場で見ることができる。参与観察によると、その場に参加する村人たちは、必ずしも行事を効率的に執り行うという主目的のために参加しているわけではないようであった。例えば、葬式の場における男性の振る舞いを観察すると、テントを建てたり、火をおこしたり、会場を整備する者は全体の 3 割ほどであり、残りの 7 割はおしゃべりをして、その場にいるだけである。集まってる人数に見合わない労働量によって、作業は朝早くから夕方まで続き、非常に非効率的な活動に見える。しかし、村人たちの会話に耳を傾けると、雑談から仕事の話、農園管理の話、ひいては政治の話にまで多岐にわたる情報が交換されており、集団行動の「交流」そのものを目的に村人たちがそこに参加している可能性を考えた。ここから、村人たちが効率的に作業を行わないという営みは、交流の時間を増やそうとしているからだ、という仮説をたて、彼らの合理性を理解しようと試みた。葬式に参列することで、村人の集団行動自体が何らかの価値を有していることに気づき、焼畑農業の集团的労働形態が村人のアイデンティティを形成する要因になり得るという発想を得た。最小の労働投入量と最短時間で最大の結果を出すことが効率的とされる現代の企業型労働とは異なった村人たちの合理性を示す一例である。

包する伝統や文化を形成する機能を持ちえないどころか、日々の生活の中で人々が交流する場を提供できないために、それを維持する機能すらも持ちえない。アブラヤシは焼畑農業が村人たちに提供してきた、「アイデンティティ形成・維持の場」という機能を決して代替できないのである。

5-3 焼畑農業復興の推進力－政府・企業に対する反発心－

前節までの考察から、村人たちは「生存のためのセーフティネット構築」と「焼畑民としてのアイデンティティ形成・維持」を目的に焼畑農業の復興を志向していることが分かった。しかし、上記二つの目的があるだけで、焼畑復興プロジェクトが実際に始動するとは限らない。本節では村人の焼畑回帰の現実化を後押しした推進力の所在について考察していく。

調査を通じて、村人たちは、政府や企業によって騙されたり、抑圧されたりしてきたことを強く認識していることが分かった。図 3-2 で整理したように、焼畑時代からアブラヤシ時代への移行は内的要因と外的要因の相互作用が生んだ結果であったが、村人たちは政府や企業などの外部者によって半強制的に焼畑農業を奪われたと認識している⁷¹。このような村人たちの認識から、「政府や企業からの抑圧や収奪に対する反発心」が焼畑農業復興への推進力になっている可能性が浮かび上がってきた。

そこで本節では、特に村人たちによって語られる抑圧や収奪に関わる二つの大きな事件－1 つ目は 2009 年のプラズマ農園設立に関する MoU 締結とそれに伴う周辺住民と企業間の紛争、2 つ目は 2016 年末に農地へ火入れを行った村人の逮捕－が、村人の中で不満として蓄積し、焼畑回帰志向を推進する原動力として転換された様子を描いていく。

5-3-1 プラズマ農園の設立時の対立－企業 vs 村人－

2007 年に公布された農業大臣令によってプラズマ農園の建設が義務付けられた Rea-Kaltim は、2009 年に農民組合 (KB) と MoU を締結した上で、プラズマ農園を周辺住民の焼畑農業地の上に建設した。締結された MoU は、複数回に及んだ企業と組合間の話し合いの上で到達した両者の合意が前提となっている。しかし、実際には不均衡な政治力や経済力のバランス、情報の非対称性が両者間の対立を生み出した。

村人の視点から状況を概説すると、話し合いの場での決定事項と MoU の内容が異なっており、村人が承諾していない内容が決定されていた。そして、この事実はプラズマ農園のアブラヤシが収穫期を迎える 2014 年になって初めて顕になったという⁷²。村人たちが企業に騙されたと認識している背景には、両者間の「契約」を結ぶ方法に原因がある。企業は契約

⁷¹ インドネシア全体の経済社会的文脈においても、外島の人々や先住民たちの立場は弱く、特にスハルト政権下では、東カリマンタン州の豊富な天然資源は国家開発のために収奪された歴史がある (森下 2015)。

⁷² 組合 KB の役員である慣習長や他農民へのインタビューより (2018 年 7-9 月)

書を用いた約束を行うのに対して、ダヤック人は口約束を基本とする。少し長くなるが、最初の MoU の交渉の場にいた慣習長の語りから当時の状況を振り返ろう。

“企業の人間は甘い言葉で交渉してきた。月末には配当が得られる、あなた達は働く必要がない、もし働きたいならもちろん給料も払うよ、なんて言葉だ。そうすると住民にとってはいい提案だろ？でも実際の MoU は違ったんだ。

企業は地域住民の法に関する無知を利用したのだ。そう、私たちは法律なんて知らないじゃないか。MoU を結んだ時、口約束とは大きく異なった内容が書かれていた。昔は、ここの人々はそんな「書類」なんて知らなかったんだ。ほら、企業の人々は賢くて、住民は学がないからね。契約が終わった後に文書を読んで初めて知ったんだ。

ダヤック人は口約束の文化だった。私たちは話し合いの場において白い器と白いお椀を我々の慣習的な言葉 (Bahasa Adat) として信じている。それは人の心の奥が綺麗で誠実であり、発した言葉は全て約束されたものであるということだ。その器の中には Pupur⁷³を入れていた。それは問題が再度加熱しないようにということを示していたのだ。言葉で伝えられたことは全て相手に掴まれていたのだ。一度約束したことは元に戻すことはできない。

昔の慣習長は REA の人間にもその白い器をあげたのだ。しかし、彼らは理解しておらず、器よりも書類を信じたのだ。その時に行われた水牛を捧げる儀式で使われた柱もまだ丘の上に残っているのに。”

— PS 氏 (50 代男性, ダヤック人, 慣習長) —

村人たちは、彼らの認識に基づくと「騙された」のであった。MoU の中で大きく異なっていたのは配当に関する部分であり、アブラヤシが収穫期を迎えると同時に分収が支払われるという契約から、造園コストを銀行に完済した後に分収を開始するというものに変更されていた。これにより、2012 年からプラズマ農園において収穫がなされていたのにもかかわらず、地域住民はそこからの分収を受け取ることが出来ずに不満を募らせていった。憤った村人たちは企業が管理するはずのプラズマ農園から果房を自ら収穫し、個人所有の農園から採れたアブラヤシ果房と混ぜて Rea-Kaltim の搾油工場に販売するようになった。

一方で企業側では、MoU を結んだ当時の担当者は既に異動しており、この紛争の原因は「双方のミスコミュニケーションであった」という解釈が社員内で伝え広がっていることが分かった⁷⁴。最終的に、企業-村人間の紛争は 2017 年に Rea-Kaltim が開いた組合 KB や

⁷³ 米をすりつぶして日焼け止めとして使用される白い粉

⁷⁴ Rea-Kaltim のプラズマ農園管理部門のマネージャー1人とその部下である2人のアシスタントへのインタビュー調査より (2018年7月)

地方政府、融資銀行などを交えた話し合いによって MoU が改定され、分収が直ちに行われたことで収束した。

住民側と企業側それぞれの主張に確かな根拠はなく、どちらに非があるとは断定できない。だが、「Rea-Kaltim によって騙され、焼畑農業地をプラズマ農園に転換された」という認識を村人側が持つ契機になった事件であることは間違いないだろう。

5-3-2 焼畑農民逮捕に関する対立－政府 vs 村人－

2016 年 12 月、アカシア植林企業のコンセッションエリア内で 2ha にも満たない農地に火入れを行った村人 WD 氏が同企業によって通報された後、警察に逮捕され、約一年間投獄された⁷⁵。この事件は村人たちの政府への反発心を煽る契機になった。

WD 氏が逮捕された際、村役場は県政府や警察と度々交渉を行い、譲歩を引き出そうとした。対象地において農地への火入れは伝統的であり、かつそれ以外の方法で農業をすることは難しいからである。しかし、最後には村役場の交渉も虚しく、WD 氏は投獄される結果となった⁷⁶。村人にとっては新たな農地を整備するには火入れしか方法がなく、一方で企業にとっては法令遵守のためにコンセッションエリア内での火災（≡火入れ）を厳しく取り締まる必要がある。両者が必要に迫られてやむを得ず行動した結果であった。調査を通じて、この事件に対する村人の不満は、通報した企業というよりもその行動を規制した政府に向かっていることが分かった。例えば、村人 IM 氏は WD 氏の逮捕に関して以下のように語った。

“政府は市民 (*Masyarakat*) よりも企業を守る。金のある者を守るのがインドネシア政府なんだ。私たちが焼畑をすると捕まってしまう。小さい土地で自給用のコメをつくるだけなのに。しかも、逮捕された WD 氏は焼畑を雨季に行った。周辺に燃え広がるはずがないだろう。企業の間が通報したんだ。そして焼いた村人 (WD 氏) は刑務所に入れられてしまった。企業はもっと広大な面積を焼いているはずなのに。これまで企業の間が捕まったことはあったらうか？

この事件のせいで焼畑をする者はいなくなった。逮捕されることを恐れているからね。焼畑以外の方法で森を切り開く方法はないのに。”

－IM 氏 (50 代男性、ダヤック人)－

⁷⁵ 逮捕状によると、WD 氏は森林に関する 1999 年インドネシア共和国法律第 41 号 78 条 3 項、50 条 3 項 (*Pasal 78 Ayat (3), jo Pasal 50 Ayat (3) huruf d Undang-Undang Republik Indonesia Nomor 41 Tahun 1999 Tentang Kehutanan*) に違反したために逮捕されていた。

⁷⁶ WD 氏の妻と村長に対するインタビューから (2018 年 7 月)

IM氏の発言に見るように、農民の逮捕という事件は確かに村人たちに火入れに対する恐怖心を植え付けたが、同時に村人たちの政府に対する反発心をも醸成する契機になっていたことが伺える。そして、村人たちは政府への不満を直接訴え始めることになる。政府への不満が表出した象徴的な出来事は、周辺企業や警察、郡と県の役人を交えた次年度の村開発計画の策定会議（2018年8月）で起こった（写真 5-2）。村側は村役場のスタッフや各隣組の長などの要職者が大多数を占めるが、誰でも参加可能な会議である。



写真 5-2：村開発計画の策定会議

(注)正面の垂れ幕には「村開発計画協議」(*MUSYAWARAH PERENCANAAN PEMBANGUNAN DESA*)と書かれている。

ここでは道路の整備や衛生的な水の供給など、インフラ整備が主に議題として挙がっていた。会議の終盤、村人からの自由討議のセッションで村の中でも発言力を持つ小学校の先生であるIK氏は以下のように発言したのであった。

“私たちの畑はどのようにつくればいいのか？私たちは畑をつくりたい。しかし法律によって焼畑は禁止されている。そして村人が逮捕されたではないか。今では皆、逮捕されるのを怖がって焼畑を行うことができない。私たちはどのように畑をつくればよいのか？”

－IK氏（50代男性、ダヤック人、教師）－

地方政府の役人や警察に対するこの発言には、焼畑農業という生業を行うために必要不可欠な作業であった火入れを禁止した政府に対する不満が込められている。最終的に、農地への火入れを行う村人の正当性は認められなかったが、その代わりに、農地を整備するため

の重機を Rea-Kaltim と植林企業が貸し出すことが合意された。村人たちは、抑圧された自らの立場を一介の政治的手段として、焼畑復興へ向けた施策を引き出すために利用していたのである。

以上の二つの対立から、焼畑農業の消失に関連する村人たちの政府や企業に対する反発心をまとめていく。一点目のプラズマ農園の建設に関しては、初期 MoU の締結の際に「騙された」とする村人の認識が、焼畑農業地の空間的消失だけに留まらない、喪失感と不満を醸成していた。二点目の農民の逮捕を契機とした火入れ慣行の消失は、それを規制した政府への不満を村人の間で募らせることになった。そして、IK 氏の発言に見たように、村人たちはこの不満や反発心を焼畑農業の復興を後押しするような推進力に転換しているようであった。ここに、焼畑農業の政治機能が浮かび上がってきた。

5-4 焼畑農業が持つ多様な機能

最後に、実際に焼畑復興プロジェクトに関わる村人の営為を通じて、焼畑農業が村人たちにとってどのような意味を持ち、何を提供しているのか、その様相を整理していく。本論文では、これまで農民の行動は時に「不合理」であり、その合理性を理解することは容易ではないと主張してきたが、農民が日々何気なく選択している行動の合理性さえも理解が難しい時がある。例えば、畑作管理用の小屋を全て森林資源から作ろうとする農民の行動である。(写真 5-3)



写真 5-3：畑作管理用の小屋づくりの過程

(注) ①森で材料を収穫する ②ラタンで繋ぐ ③葉で屋根をつくる ④畑作管理用の小屋 (完成)

トタンや釘などを使用したほうが短時間で簡単に作れるにもかかわらず、なぜ彼らはわざわざ手間のかかる方法で小屋を作ったのだろうか。トタンも釘も村では簡単に、安価で手に入り、かつ輸送も大きな手間はかからない。これに比べると、森に入り、小屋作りに使えそうな森林資源を収穫する作業は、あまりにも機会費用が高い選択である。一見すると不合理に見えるこの選択に対してどのような合理性を見出すことができるだろうか。

当プロジェクトの中心的人物に対して直接的に投げかけた「なぜこのような伝統的な方法で小屋をつくるのか」という質問に対する返答からその合理性を理解したい。これに対する答えは、

“こうして伝統的な作り方をすることで、企業や政府に対して、私たちがいかに真剣に畑作をしているのか、見せつけるためだ”

—CA氏（50代男性、ダヤック人、焼畑復興プロジェクトリーダー）—

というものだった。政府や企業との合意で成立した焼畑復興プロジェクトをなんとかして成功に導きたい、政府や企業に反論の余地を与えたくない、さらには、村人たちが焼畑農業を行う正当性を認めさせたい、といったような意気込みが彼の発言には込められているとも考えられる。これは5-3で考察したような、政府や企業への反発心が政治的な手段として具体化したものとも解釈できるだろう。

さて、ここまでの考察から、対象地における焼畑農業が持つ機能をまとめていく。第一に5-2-1で整理したように、歴史的に幾度となく飢餓の危機に襲われている対象地においては、焼畑農業の畑と休閑地が織りなす柔軟な生計が、「生存のためのセーフティネット機能」を提供していることが分かった。5-2-2では、村人たちが民族の伝統や文化を守るために焼畑農業の復興を求めていることを示し、「焼畑民のアイデンティティ形成・維持機能」がそれに付与されていることを明らかにした。これに加えて、5-3と本節で考察した、焼畑復興の実現に向けた推進力と小屋を全て森林資源で造る農民の合理性を理解する中で、焼畑農業の「強者に抵抗するための政治的機能」を推察した。

対象地においては「焼畑」そのものだけでなく、「焼畑をする」という行為自体が意味を持ち、目的化されていた。インドネシア語では、「畑」という名詞は *Ladang* であり、「畑をつくる」「畑仕事をする」という動詞は *Berladang* である。生存のためのセーフティネット機能は物体としての *Ladang* に、アイデンティティを形成し、維持する機能や政治的機能は人々の行為やプロセスとしての *Berladang* に付与されているとも解釈できる。

ただ、ここで説明したような焼畑の復興に意欲的な村人は、主に下位層と中間層であり、上位層はあまり関心を示していないようであった。考えられる要因として、上位層は焼畑が提供するセーフティネットを超えた安定を他のサービスから得られることや、都市に帰属意識があり、村への帰属意識が薄いことなどが挙げられる。また、一部の上位層はすでに政治経済的権力を握っており、抑圧される立場を脱しているために、焼畑を通じた抵抗の意欲

は持っていないと考えられる。焼畑が持つ価値は階層ごとに異なっており、それ故に階層ごとに焼畑回帰の意欲は異なっていることが分かった。

5-5 現代の農村社会における「焼畑農業」の意味

対象村において焼畑農業は食糧供給源だけでなく、アイデンティティを形成・維持する機能や、強者に対抗するための政治的な機能を持ち合わせていることが分かった。では、対象地から世界へと視野を広げた時、アブラヤシ農民の焼畑回帰志向はどのような含意があるだろうか。これまでの「焼畑研究」の展開をたどりながら、近代化が進行する世界において「伝統的」や「時代遅れ」として認識されつつも、焼畑農業が未だに世界各地で残存している意味を本研究で得た事例を元に再考していく。

焼畑農業および焼畑農業社会に関する研究は1950年代ごろから文化的な側面に焦点をあてる傾向のある分野(人文地理学, 文化人類学, 文化生態学)から, 環境とのかかわりを追求する分野(森林生態学, 植物生態学, 土壌生態学, 雑草学, 作物学, 熱帯農学), さらに政治経済や歴史に関心を持つ分野(政治学, 経済学, 農業経済学, 林政史学, 歴史学)まで, 学際的に行われてきた(佐藤 1999, pp375-377)。本研究を何らかの枠組みにあてはめるとすると, 市場経済やグローバリゼーション下によって変化する「焼畑の動態」に焦点を当てるような研究分野に該当するだろう。

このような, 焼畑の動態に関する研究は, 例えば井上(1995)によって行われおり, ダヤック人農村を対象とした長期間に及ぶフィールドワークから, 環境社会的な変動に適応して変化してきた焼畑農業の動態を描写している。同様に, 中辻(2004)もラオスの事例から商品作物の栽培が普及した地域においては, 陸稲収穫後の休耕地が短期化することを発見し, 焼畑農業の動態を中心的なテーマにしている。また, 焼畑民にとっての焼畑農業が持つ役割や機能が近代化によってどのように変化してきたのか, という点に関する考察も進んでいる。例えば吉野(2008)はタイ北部のミエン社会が伝統文化復興に向けた動きの中で, 衰退する焼畑を民族のアイデンティティとして継承しようとする営為を説明しており, 本研究との類似性が見られる。

しかし, 本研究が示唆するような焼畑農業が持つ政治性に関する視点はこれまでそれほど多くは研究されてこなかった。関連する数少ない先行研究の中で, Dove(1985)は政治権力による統治上の便宜がインドネシアにおけるジャワなどの灌漑水耕とカリマンタンなどの焼畑農業を分化させた要因であると指摘している。彼の主張によると, 中央権力は集住化・定住化・農業集約化を必要としており, その結果として灌漑稲作がジャワでは普及したという。逆に捉えると, カリマンタンなどの外島において粗放的な焼畑農業が根強く残っているのは, 統治機能の浸透が遅れているからであるということになる。同様に, スコット(2013 pp.181-220)も, 焼畑民の非効率的な移動耕作を基盤とした農法は統治からの逃避を目的として戦略的に選択されていると論じている。このような議論は Scott(1985)が提示してきた, 弱者が権力者に対して見えざるように抵抗を行う「弱者の武器(Weapons of the

Weak)」の一つとして位置づけることができるだろう。

ただ、それらの議論では、弱者の抵抗方法は強者からは見えにくく、強者と衝突しないような「消極的」な構図であり、本研究で取り上げたダヤック人による行政や周辺企業との合意による焼畑復興プロジェクトという「積極的」な働きかけとは性質が異なる。対象地で確認された焼畑回帰の「強者に対する積極的な抵抗」という政治的機能はどのように解釈すればよいのだろうか。

5-6 二重の運動 (The Double Movement) としての焼畑回帰

対象地を始めとして、インドネシアにおいてアブラヤシ生産が行われている農村地域は、アブラヤシが地域に浸透することによって急激に資本主義経済に呑み込まれるようになった。焼畑民や狩猟採集民が、互酬や再分配によって生産と取引の秩序を守っていたような社会は、いつしか全ての生産が市場価値で換算され、人々が利潤追求のためにのみ取引を行うような、経済動機が全てを支配する社会に移り変わってきたのである。それは、政府が土地を囲い込み、自然を経済成長のための生産要素と位置づけ、農民たちがそれまで生存の基盤としてきた土地と労働を商品に転換したことによって巻き起こった。これはまさに、カール・ポラニーが『大転換』の中で説明した、自己調整的市場が支配する社会の誕生と同一の経路を辿っている。(ポラニー 2009)。

ポラニーは、人間の歴史において市場という制度は一般的なものであり、本来、経済動機は社会に埋め込まれて (Embedded) いたが、19世紀以降の「全ての生産が市場における販売のために行われ、またすべての所得がそのような販売から派生する」ような自己調整的市場の出現を期に、経済が社会を支配するようになった、と説明している。この、経済と社会が「離床」(Disembed) し、市場経済が社会を支配するようになった、という主張を支えるのが、「商品擬制」(Commodity Fiction) という概念である。これは、労働や土地、貨幣という本来は明らかに商品ではない社会の実体そのものを市場の法則に従属させ、「商品化」(Commodification) することを意味している(ポラニー 2009, pp.124-125)。また、ポラニーは、労働、土地、貨幣という明らかに商品ではないものを市場メカニズムに包摂することによって人間は文化的諸制度という保護膜を奪われ、社会的にむき出しの存在となることに耐えられず、朽ち果ててしまうと警鐘を鳴らしている(ポラニー 2009, p.126)。そして、この市場システムという悪魔のひき白による破壊から社会を防衛しようとする「二重の運動 (The Double Movement)」が19世紀における社会の歴史をつくりあげていたという(ポラニー 2009, pp.130-131)。

対象地の社会は焼畑時代には、経済に支配されることはなかった。焼畑では、労働は共同で行われ、または交換によって取引が成立するものであった。それは、生活そのものの一部であるような人間活動であり、生活の他の部分から切り離したり、蓄積したり、転売することはできなかった。また、土地は、豊かな森林や焼畑地、休閑地などの「自然」そのものであり、人間がつくりだしたものではなかった。そこで行われる焼畑は、村人に生存の礎とな

る食糧や収入を提供するだけでなく、民族としてのアイデンティティが育まれる場でもあった。焼畑時代には、労働と土地は社会の実体そのものであり、その中で経済システムが機能する、まさに「社会に埋め込まれた経済」を成していた。

しかし、アブラヤシが拡大することで社会と経済は離床し、社会は経済に支配されるようになった。それは先に見たように、労働と土地という明らかに商品ではないものが貨幣価格を付けられ、取引されるようになったことに起因する。そして、アブラヤシと、その経済価値を引き伸ばす市場システムは莫大な利益を創出しつつも、社会・環境面に対しては深刻な悪影響を及ぼしてきた。

アブラヤシの拡大によって対象地の土地や労働が商品として擬制されたとすると、農民の焼畑回帰は、商品化された土地と労働を本来の実体としての姿に脱商品化(Decommodification)する営みとして位置づけることができるだろう。脱商品化は「二重の運動」の中で市場メカニズムに対抗する対抗運動(Countermovement)の結果として現れるものである。近年、資本主義や新自由主義(Neoliberalism)によって拡大し、流動化する食品市場から、社会が受ける歪みを是正しようと、生産の主体である農民が団結して対抗活動を行って始めた(McMichael 2006)。しかし、このような対抗運動は通常、主に政府の見解に暗喩されているのみで、一つの国や組織単体では持続的に具現化することは不可能に近く、ましてや地域社会においては、自然発生的に現れるものではない(Goodwin 2018)。官僚制や様々な規制によって弱体化させられる対抗運動の可能性を拡張するには、国と社会の関係性を見直していく必要があるという(ibid 2018)。

本研究で明らかにした焼畑回帰は、外から持ち込まれたアブラヤシという市場メカニズムの媒体から、社会を防衛しようとする「対抗運動」として位置づけられるのではないだろうか。アブラヤシ農民の焼畑回帰というローカルレベルの対抗運動から、新自由主義や資本主義が社会に及ぼす影響を見つめ直すことで、その悪影響を制御するための国の施策や農民の運動のあり方に対して新しい視座を与えることができると考える。

第6章 結論と課題

本章では本研究の主張をまとめ、研究の問いに答える。また、問いを見出す中で明らかになった、各階層のアブラヤシ生産拡大への意欲と、焼畑農業が持つ多面的な機能を提示する。最後に本研究の貢献と課題を述べて、結語とする。

6-1 本研究のまとめと含意

本研究は、「アブラヤシ生産が浸透している地域において、焼畑に戻ろうとする農民がいるのはなぜか」という問いを設定し、「焼畑農業は農民に様々な価値を提供しているから」と結論付けた。そして、様々な価値とは、「生存のためのセーフティネット機能」、「民族としてのアイデンティティ構築・維持機能」、「強者に抵抗するための政治的機能」、であると説明してきた。また、この結論を導出する過程で、各階層のアブラヤシ生産の様相と、現代の農村社会における焼畑農業の意味を問い直してきた。

まず、アブラヤシの生産に従事する農民の経済状況は平等ではない上に、階層ごとにアブラヤシの生産拡大に対する意欲が異なっていることを明らかにした。下位層はアブラヤシ生産から収益を得られないが故に経済的豊かさを獲得できておらず、中間層と上位層は、アブラヤシから経済的利益を享受している一方で、その生産を拡大する意欲はすでに減退していることが分かった。上位層はアブラヤシよりも高い収益性が期待されるビジネスに関心が移っていること、中間層はアブラヤシへの過剰な生計依存やアブラヤシが対象村周辺にもたらす様々な影響に対して不安を抱いていることが主な要因であった。

焼畑農業消失に対する不安の反動で生まれた「焼畑回帰志向」の成り立ちや、農民たちの動機を地域の社会文化側面、ならびに歴史的な視点から考察することで、焼畑農業が持つ3つの機能を導出した。さらには、焼畑の「積極的な」政治的機能をポラニーが『大転換』の中で解説した「二重の運動」の枠組みに当てはめて考察し、資本主義社会がもたらす悪影響から社会を防衛し、土地や労働を脱商品化しようとする「対抗運動」としての解釈を試みた。

以上の結果を通じて、アブラヤシ農民の行動原理は、経済的な要因だけでなく、地域固有の歴史や社会文化的要因から強く影響を受けていることを明らかにした。また、焼畑回帰の政治性に着目し、アブラヤシがもたらす悪影響を是正する対抗運動として解釈したことで、「グローバル経済下における焼畑」に新たな視点を投げかけた。本研究は、アブラヤシ農民研究だけにとどまらず、農民経済や開発研究に関連する広範な学術分野に一定の視座を与えることができると考える。また、本研究が提示した、アブラヤシ農民の行動原理を理解する上での新たな視座は、小規模農家の育成政策の改善にも寄与するであろう。

本研究では冒頭で「農民の行動は時に不合理に見える」と述べた。しかし、分析を通じて、彼らには、彼らなりの合理性があるということを提示してきた。他者との関わり合いの中で生きる私たちは、しばしば互いの理解に苦しみ、時には衝突することもある。ただ、国や地域を超えて人々が交流している現代のグローバル社会においては、他者を理解すること、ま

たは、他者を理解しようとする姿勢は、互いの協調を生み、支え合い、発展していくためには非常に大切なことだろう。一見、不合理に見える他者の行動も、相手の行動を理解しようと努めれば、その合理性が見えてくるはずである。相手の合理性をまず理解しようとする、その姿勢の大切さを本研究は提示したようにも思える。

6-2 残された課題

本研究では、アブラヤシと焼畑農業を中心に、ツバメの巣養殖や企業労働など、村周辺の収入源を分析の範囲をとってきた。しかし、交通網の発達や情報の流動化により、都市－農村間の距離が以前よりも急速に接近している今、農民の生計は農村内では留まらなくなっている。本研究で検討したような農村内部での観察を超えて、都市での就業や若年層の都市への流出、そこからの送金など、都市－農村間の関わりの中でアブラヤシ農民の合理性を検討する必要があるだろう。

また、農民の焼畑回帰志向に関してもさらなる考察の余地がある。本研究では一貫して、農民は焼畑に回帰 (Return) するものと述べてきた。確かに農民の生業は焼畑からアブラヤシへ移行し、また焼畑に戻っているように見える。しかし、現代において焼畑を求める農民たちはアブラヤシへ移行する前とは異なった目的を持って焼畑を選択している。焼畑を「前近代的な」生業として捉えるのではなく、農民が時代に即して戦略的に選択する「進歩」として捉えることで新たな焼畑の解釈を生むことができるだろう。

6-3 焼畑の未来を見据えて

最後に対象地における今後の焼畑の展望を述べて結語とする。まず、アブラヤシの拡大と焼畑農業の減少を二項対立的な概念として考察したが、実際には状況は複雑であり、両者が土地や労働、資本という生産要素を奪い合うような現象は発生していない。つまり、上位層、中間層ともにアブラヤシ生産を拡大する意欲は既に減退しているが、それはアブラヤシ生産の減少を意味しているわけではない。アブラヤシに匹敵するほどの収入が他にない対象村周辺では、農民たちは今後もアブラヤシ生産の規模を維持していくだろう。従って、新たな畑作用地が開墾されるとすると、それはアブラヤシ農園の上ではなく、放棄された元焼畑地や休閑地、または森林地域になると予測される。

加えて、本研究では「焼畑農業」として農地への火入れが行われることを前提に議論を展開したが、アブラヤシが浸透する地域は急速に政府の監視下に置かれるため、今後の火入れ慣行の実現可能性には疑問が残る。土地が肥沃ではないカリマントンにおいて火入れなしに畑作を行うためには、農業重機や肥料などの資本投入が必要となる。農民がそれをどのように調達するのか、という点が農民の行動を左右することになりそうだ。

また、農民の焼畑回帰志向は主に40代以上の焼畑経験のある世帯主を中心に醸成されたものであり、20-30代はただそれに誘発されて参加しているようだった。対象村においては焼畑経験のある若年層は少なく、現に焼畑復興プロジェクトに参加していた10代たちは焼

畑の方法を殆ど知らなかった。また、教育水準の上昇や都市賃金の上昇によって、都市へと人口が流れていく時に収益性の低い焼畑がどこまで維持できるのか、という点は現時点では定かではない。当地において、焼畑が未来にも存在し続けるか否かは、焼畑経験のある世代がどこまで焼畑のノウハウを次世代に継承できるのか、という点に掛かっているだろう。

ただ、焼畑を取り戻そうとする村人たちの様子を実際に見てきた筆者は、明るい未来を想像してならない。「論文」という形式を取るために、全ての情報を掲載することはできなかったが、村人との生活では毎日のように焼畑時代の話を目にしていた。畑作づくりの現場では、充実した笑顔で楽しそうに作業する村人の姿を見た。そのような姿を見て、村人たちが焼畑を求める理由など本当はないのかもしれない、と考えることもあった。村人たちは焼畑民ダヤック人であり、それ故に焼畑を求め続ける。これはどんな時代にも変わることはない、世の理なのかもしれない。

参考文献

- Appell, G. N. (1992). *The history of research on traditional land tenure and tree ownership in Borneo*. Borneo Research Council.
- Badan Pusat Statistik Propinsi Kalimantan Timur (2017) Provinsi Kalimantan Timur Dalam Angka 2017
- Barlow, C., & Tomich, T. (1991). Indonesian agricultural development: The awkward case of smallholder tree crops. *Bulletin of Indonesian Economic Studies*, 27(3), 29-53.
- Brookfield, H. (2001). Intensification, and alternative approaches to agricultural change. *Asia Pacific Viewpoint*, 42(23), 181-192.
- Boer, R., Nurrochmat, D., Purwawangsa, H., & Ginting, G. (2012). Reducing agricultural expansion into forests in Central Kalimantan Indonesia: Analysis of implementation and financing gaps. *Bogor Agricultural University, Bogor*,
- Clough, Y., Krishna, V. V., Corre, M. D., Darras, K., Denmead, L. H., Meijide, A., . . . Veldkamp, E. (2016). Land-use choices follow profitability at the expense of ecological functions in Indonesian smallholder landscapes. *Nature Communications*, 7, 13137.
- Cramb, R., & Curry, G. N. (2012). Oil palm and rural livelihoods in the Asia-Pacific region: An overview. *Asia Pacific Viewpoint*, 53(3), 223-239.
- Cramb, R., & McCarthy, J. (2016). Characterising Oil Palm Production in Indonesia and Malaysia. In Cramb R. & McCarthy J. (Eds.), *The Oil Palm Complex: Smallholders, Agribusiness and the State in Indonesia and Malaysia*. 27-77. Singapore: NUS Press.
- Daemeter Consulting. (2015). Indonesian oil palm smallholder farmers: A typology of organizational models, needs, and investment opportunities. Bogor, Indonesia
- Dib, J. B., Alamsyah, Z., & Qaim, M. (2018). Land-use change and income inequality in rural Indonesia. *Forest Policy and Economics*, 94, 55-66.
- Direktorat Jenderal Perkebunan (2017) Statistik Perkebunan Indonesia 2015-2017, Jakarta [Directorate General of Estate Crops (2017) Tree crop estate statistics of Indonesia.]
- Donough, C., Witt, C., & Fairhurst, T. (2009). Yield intensification in oil palm plantations through best management practice. *Better Crops*, 93(1), 12-14.

- Dove, M. R. (1985). The agroecological mythology of the javanese and the political economy of Indonesia. *Indonesia*, 39, 1-36.
- Dyah, I. M, Arya. H. D, Lala. M. K, Muhammad. F, Martin, R. N. (2018). Livelihood structure transformation of rural communities: A livelihood system analysis of the Dayak Punan of Berau district, East Kalimantan, Indonesia. *Journal of Economics and Sustainable Development*, 9(18), 11-20.
- Euler, M., Hoffmann, M. P., Fathoni, Z., & Schwarze, S. (2016). Exploring yield gaps in smallholder oil palm production systems in eastern Sumatra, Indonesia. *Agricultural Systems*, 146, 111-119.
- Euler, M., Krishna, V., Schwarze, S., Siregar, H., & Qaim, M. (2017). Oil palm adoption, household welfare, and nutrition among smallholder farmers in Indonesia. *World Development*, 93, 219-235.
- Feintrenie, L., Chong, W. K., & Levang, P. (2010). Why do farmers prefer oil palm? lessons learnt from Bungo district, Indonesia. *Small-Scale Forestry*, 9(3), 379-396.
- Gönner, C. (2011). Surfing on waves of opportunities: Resource use dynamics in a Dayak Benuaq community in East Kalimantan, Indonesia. *Society and Natural Resources*, 24(2), 165-173.
- Goodwin, G. (2018). Rethinking the double movement: expanding the frontiers of Polanyian analysis in the Global South. *Development and Change*.
- Grandin, B. E. (1988). *Wealth ranking in smallholder communities: A field manual*. Intermediate Technology Publications.
- Hidayat, N. K., Glasbergen, P., & Offermans, A. (2015). Sustainability certification and palm oil smallholders' livelihood: A comparison between scheme smallholders and independent smallholders in Indonesia. *International Food and Agribusiness Management Review*, 18(3), 25-48.
- Hoffmann, M., Vera, A. C., van Wijk, M. T., Giller, K. E., Oberthür, T., Donough, C., & Whitbread, A. (2014). Simulating potential growth and yield of oil palm (*elaeis guineensis*) with PALMSIM: Model description, evaluation and application. *Agricultural Systems*, 131, 1-10.
- King, V. T. (1993). *The peoples of Borneo*. Blackwell.
- Krishna, V., Euler, M., Siregar, H., & Qaim, M. (2017). Differential livelihood impacts of oil

- palm expansion in Indonesia. *Agricultural Economics*, 48(5), 639-653.
- Levang, P., Dounias, E., & Sitorus, S. (2005). Out of the forest, out of poverty? *Forests, Trees and Livelihoods*, 15(2), 211-235.
- Marti, S. (2008). *Losing ground: The human rights impacts of oil palm plantation expansion in Indonesia*. Friends of the Earth. London
- McCarthy, J. F. (2010). Processes of inclusion and adverse incorporation: oil palm and agrarian change in Sumatra, Indonesia. *The Journal of peasant studies*, 37(4), 821-850.
- McCarthy, J. F., Vel, J. A., & Afiff, S. (2012). Trajectories of land acquisition and enclosure: development schemes, virtual land grabs, and green acquisitions in Indonesia's Outer Islands. *Journal of Peasant Studies*, 39(2), 521-549.
- McMichael, P. (2006). Peasant prospects in the neoliberal age. *New Political Economy*, 11(3), 407-418.
- Molenaar, J. W., Persch-Orth, M., Lord, S., Taylor, C., & Harms, J. (2013).: Developing a better understanding of their perform Diagnostic study on Indonesian oil palm smallholders performance and potential. *International Finance Corporation, World Bank Group*.
- Pacheco, P., Gnych, S., Dermawan, A., Komarudin, H., & Okarda, B. (2017). *The palm oil global value chain: Implications for economic growth and social and environmental sustainability*. CIFOR.
- Potter, L. (2008). Dayak resistance to oil palm plantations in West Kalimantan, Indonesia. *17th Biennial Conference of the Asian Studies Association of Australia [Internet]*.
- Rist, L., Feintrenie, L., & Levang, P. (2010). The livelihood impacts of oil palm: Smallholders in Indonesia. *Biodiversity and Conservation*, 19(4), 1009-1024.
- RSPO. (2009). RSPO principles and criteria for sustainable palm oil production. guidance on scheme smallholders.
- Sargeant, H. (2001). Oil palm agriculture in the wetlands of Sumatra: Destruction or development? *Forest Fire Prevention and Control Project*.
- Scott, J. C. (2008). *Weapons of the weak: Everyday forms of peasant resistance*. Yale university Press.
- Sirait, M. (2009). Indigenous peoples and oil palm plantation expansion in West Kalimantan,

- Indonesia. Universiteit van Amsterdam, The Hague, the Netherlands.
- Soliman, T., Lim, F. K., Lee, J. S., & Carrasco, L. R. (2016). Closing oil palm yield gaps among Indonesian smallholders through industry schemes, pruning, weeding and improved seeds. *Royal Society Open Science*, 3(8)
- Stone, R. (2007). Can palm oil plantations come clean?. *Science*, 317(5844), 1491-1491.
- Urano, M. (2014). Impacts of newly liberalised policies on customary land rights of forest-dwelling populations: A case study from East Kalimantan, Indonesia. *Asia Pacific Viewpoint*, 55(1), 6-23.
- Vermeulen, S., & Goad, N. (2006). *Towards better practice in smallholder palm oil production*. Natural Resource Issues Series No. 5. International Institute for Environment and Development. London, UK.
- Wakker, E. (2004). Greasy palms: The social and ecological impacts of large-scale oil palm plantation development in Southeast Asia. Friends of the Earth. London.
- Woodburn, J. (1998). Sharing is not a form of exchange: An analysis of property-sharing in immediate-return hunter-gatherer societies. *Property Relations: Renewing the Anthropological Tradition*, ed. C. M. Hann, Cambridge. Cambridge University Press. 48-63.
- Yulian, B. E., Dharmawan, A. H., Soetarto, E., & Pacheco, P. (2018). Livelihood dilemma of the rural household around the oil palm plantation in East Kalimantan. *Sodality: Jurnal Sosiologi Pedesaan*, 5(3)
- 井上真. (1991). 『熱帯雨林の生活 ボルネオの焼畑民とともに』. 築地書館
- 井上真. (1995). 『焼畑と熱帯林: カリマンタンの伝統的焼畑システムの変容』. 弘文堂
- 井上真. (2005). 「ダヤック」『東南アジア(講座世界の先住民族 ファースト・ピープルの現在)』. 274-291. 明石書店
- 岩佐和幸. (2018). アグリビジネスのグローバル化とパーム油産業の構造変化. *東南アジア研究*, 55(2), 180-216.
- 浦野真理子. (2013). インドネシアのアブラヤシ農園で働く人々: 大規模農園開発による雇用創出と貧困解決. *北星学園大学経済学部北星論集*, 52(2), 251-264.
- 小井川広志. (2015). マレーシア・パーム油産業の発展と資源利用型キャッチアップ工業化. *アジア経済*, 56(2), 41-71.

- 大田真彦, 増田美砂, & 鈴木仲隆. (2008). インドネシアにおける農園作物の拡大と土地利用の変化—西カリマンタン州のダヤク系住民を事例として—. *筑大演報*, 24(2), 37-53.
- 岡本正明 & 林田秀樹. (2018). 〈特集〉アブラヤシ農園拡大の政治経済学 —アクター, 言説, 制度の視点から—. *東南アジア研究*, 55(2), 169-179.
- 河合真之, & 井上真. (2010). 大規模アブラヤシ農園開発に代わる 「緩やかな産業化」 の可能性. *林業経済*, 63(7), 1-17.
- 岸政彦. (2016). 「序章 質的調査とはなにか」『質的社会調査の方法-他者の合理性の理解社会学』. 1-36. 有斐閣ストゥディア
- 佐久間香子. (2017). ボルネオ内陸部の交易拠点としてのロングハウス. *東南アジア研究*, 54(2), 153-181.
- 佐藤郁哉. (2002). 『フィールドワークの技法-問いを育てる, 仮説をきたえる』. 新曜社
- 佐藤仁. (2002). 『稀少資源のポリティクス: タイ農村にみる開発と環境のはざま』 東京大学出版会.
- 佐藤仁. (2016). 『野蛮から生存の開発論: 越境する援助のデザイン』 ミネルヴァ書房
- 佐藤廉也. (1999). 熱帯地域における焼畑研究の展開. *人文地理*, 51(4), 375-395.
- シラ・ダロス, & 永田脩一. (2005). 「交易と分配 —狩猟採集民の社会人類学」『熱帯アジアの森の民 森林資源利用の人類学』. 池谷和信 (編) 97-121. 人文書院.
- スコット・ジェームズ. (2013). 『ゾミア—脱国家の世界史』. 佐藤仁 (監訳). みすず書房. (原著: Scott, James C. (2009). *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press)
- 田中耕司. (1990). 「プランテーション農業と農民農業」『東南アジアの自然(講座東南アジア学第2巻)』. 高谷好一 (編) 247-282. 弘文堂.
- 寺内大左. (2018). 焼畑民によるアブラヤシ農園開発の受容. *東南アジア研究*, 55(2), 320-345.
- 寺内大左, 説田巧 & 井上真. (2010). ラタン, ゴム, アブラヤシに対する焼畑民の選好. *日本森林学会誌*, 92(5), 247-254.
- 永田淳嗣, & 小泉佑介. (2018). インドネシアにおける農園事業許可法令の変遷. *東南アジア研究*, 55(2), 240-255.
- 中辻享. (2004). ラオス焼畑山村における換金作物栽培受容後の土地利用. *人文地理*, 56(5),

449-469.

- 林田秀樹. (2018). インドネシア国営アブラヤシ農園におけるプラスマ農園の再植. *東南アジア研究*, 55(2), 292-319.
- 原洋之介. (1999). 『エリア・エコノミックスーアジア経済のトポロジー』. NTT 出版
- 福井勝義. (1983). 「焼畑農耕の普遍性と進化民俗生態学的視点から」『日本民俗文化大系 第5巻 山民と海人—非平地民の生活と伝承—』. 大林太良(編). 235-273. 小学館.
- ポラニー・カール. (2009). 『新訳 大転換—市場社会の形成と崩壊』. 野口建彦, 栖原学(訳). 東洋経済新報社. (原著: Karl Polanyi(1944). *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time*. Beacon Press Boston)
- 増野高司. (2013). 「アジアの焼畑」『アジアの人類学 (シリーズ来たるべき人類学 4)』. 片岡樹・シンジルト・山田仁史 (共編). 107-151. 春風社.
- 箕曲在弘. (2014). ラオス南部コーヒー栽培地域における農民富裕者の誕生要因. *東南アジア研究*, 51(2), 297-325.
- 森下明子. (2015). 『天然資源をめぐる政治と暴力-現代インドネシアの地方政治』. 京都大学学術出版会.
- 吉野晃. (2008). 「槃瓠神話の創造?—タイ北部のユーミエン (ヤオ) におけるエスニック・シンボルの生成—」『民族表象のポリティクス 中国南部における人類学・歴史学的研究』. 塚田誠之 (編). 299-325. 風響社.

インターネット文献

FAO. FAOSTAT <http://www.fao.org/faostat/en/#data>

InfoSAWIT, UNDP Dukung Pemberdayaan Petani Sawit Swadaya, 2018/07/09 (最終アクセス: 2019/01/08) <https://www.infosawit.com/news/8151/undp-dukung-pemberdayaan-petani-sawit-swadaya>

Katy Askew, RSPO focuses on smallholders in support of sustainable palm oil, (最終アクセス: 2018/11/20) <https://www.foodnavigator.com/Article/2017/11/29/RSPO-focuses-on-smallholders-in-support-of-sustainable-palm-oil>

Thontowi A. Suhada, Bukti Bagja and Shofia Saleh Suhada, Smallholder Farmers Are Key to Making the Palm Oil Industry Sustainable」, 2018/03/30 (最終アクセス: 2018/11/20) <https://www.wri.org/blog/2018/03/smallholder-farmers-are-key-making-palm-oil-industry-sustainable#fn:1>

UNDP, Sustainable Palm Oil Initiative (SPO) Overview, (最終アクセス: 2018/11/20) <http://www.id.undp.org/content/indonesia/en/home/ourwork/environmentandenergy/sustainable-palm-oil-initiative--spo-.html>

付録

1) PT Rea Kaltim Plantations の基本情報⁷⁷

- 企業名
R.E.A. Holdings PLC (<http://www.rea.co.uk/>)
- 操業許可⁷⁸
 - 1991年：立地許可 (*Izin Lokasi*) 獲得
 - 1993年：農園事業許可 (*Izin Usaha Perkebunan : IUP*) 獲得
 - 1994年：土地開発権 (*Hak Guna Usaha : HGU*) 獲得
- 設備
 - 5つのエステートで合計 36.846 ha のアブラヤシ農園
 - 2つの搾油工場
- 数々の持続可能なパーム油生産に関する様々な認証制度を取得
 - ✓ RSPO : Roundtable on Sustainable Palm Oil
 - ✓ ISO14001:2004 : International Standard Organization
 - ✓ ISCC : International Sustainability and Carbon Certification
 - ✓ ISPO : Indonesian Sustainable Palm Oil



⁷⁷ 企業の概要に関しては Rea-Kaltim の Human Resource Department より提供された *Company Profile* より整理した。

⁷⁸ Rea-Kaltim の許認可に関する情報はクタイカルタネガラ県の農園局から提供された *Data Perkembangan Perkebunan Besar Yang Aktif, Berdasarkan Data Yang Ada Pada Dinas Perkebunan Propinsi Kaltim* (2017年12月更新) を元に整理

2) プラズマ分収の内訳表

JULI

**DAFTAR NAMA KOPERASI KEMITRAAN KAHAD BERSATU
DESA PULAU PINANG & DESA PERDANA - DIVISI 01 & 02**

Periode Juli 2018 Bagi Hasil 30% Rp. 238.435.739

No	名前	保有面積		分収/Ha	粗分収合計	組合徴収		純分収合計	受け取りサイン	
	Nama Petani	Luas Lahan	Jumlah Bidang Tanah	Bagi Hasil 30%	Pedapatan Kotor Petani	Potong Simpanan Pokok	Potong Setoran Wajib	Pendapatan Bersih Petani	Tanda Tangan	Nama Pengambil
1		4,40	3	231.902	1.020.368,80		20.000	1.000.368,80	<i>[Signature]</i>	
2		2,92	2	231.902	677.640,83		20.000	657.640,83	<i>[Signature]</i>	
3		2,25	2	231.902	521.779,50		20.000	501.779,50	<i>[Signature]</i>	
4		8,49	4	231.902	1.968.847,98		20.000	1.948.847,98	<i>[Signature]</i>	
5		2,01	1	231.902	466.123,02		20.000	446.123,02	<i>[Signature]</i>	muhammad
6		1,60	2	231.902	371.043,20		20.000	351.043,20	<i>[Signature]</i>	
7		4,66	3	231.902	1.080.663,32		20.000	1.060.663,32	<i>[Signature]</i>	Pobri Amuzal
8		3,01	4	231.902	698.025,02		20.000	678.025,02	<i>[Signature]</i>	
9		3,11	3	231.902	721.215,22		20.000	701.215,22	<i>[Signature]</i>	
10		6,38	3	231.902	1.479.534,76		20.000	1.459.534,76	<i>[Signature]</i>	Semirustiana
11		0,97	1	231.902	224.944,94		20.000	204.944,94	<i>[Signature]</i>	
12		0,97	1	231.902	224.944,94		20.000	204.944,94	<i>[Signature]</i>	
13		5,29	3	231.902	1.226.761,58		20.000	1.206.761,58	<i>[Signature]</i>	RM NAWATI
14		3,02	2	231.902	700.344,04		20.000	680.344,04	<i>[Signature]</i>	TKO
15		2,54	2	231.902	589.031,08		20.000	569.031,08	<i>[Signature]</i>	GA
16		4,57	3	231.902	1.059.792,14		20.000	1.039.792,14	<i>[Signature]</i>	
17		4,29	3	231.902	994.859,58		20.000	974.859,58	<i>[Signature]</i>	YOLANDA
18		4,13	2	231.902	957.755,26		20.000	937.755,26	<i>[Signature]</i>	
19		2,46	2	231.902	570.478,92		20.000	550.478,92	<i>[Signature]</i>	
20		4,64	3	231.902	1.076.025,28		20.000	1.056.025,28	<i>[Signature]</i>	
21		3,80	4	231.902	881.227,60		20.000	861.227,60	<i>[Signature]</i>	JONI.T
22		2,02	1	231.902	468.442,04		20.000	448.442,04	<i>[Signature]</i>	JONI.T
23		1,94	1	231.902	449.889,88		20.000	429.889,88	<i>[Signature]</i>	Ajwan
24		2,97	3	231.902	688.748,94		20.000	668.748,94	<i>[Signature]</i>	
25		5,17	3	231.902	1.198.933,34		20.000	1.178.933,34	<i>[Signature]</i>	JONI.T
26		4,51	3	231.902	1.045.878,02		20.000	1.025.878,02	<i>[Signature]</i>	ABDINAT
27		3,64	2	231.902	844.123,28		20.000	824.123,28	<i>[Signature]</i>	See

480.000

Page 1 of 12

3) 質問表リスト

調査ではインドネシア語に訳して使用した

1. 基本情報

名前		民族		年齢	
出生地		最終学歴			

2. 収入源

収入源の名前	月額か全体に占める割合 (%)
1:	Rp/%
2:	Rp/%
3:	Rp/%
4:	Rp/%
5:	Rp/%
6:	Rp/%
合計	100%

3. 仲買人用

SPBを購入しているか?	1.はい	2.いいえ
もし、1.はい、なら、誰に収益を配当しているか?		
配当者-1:		Rp
配当者-2:		Rp
配当者-3:		Rp
配当者-4:		Rp
配当者-5:		Rp
粗収入		Rp

4. コスト

車				
車を所持しているか	1.はい	2.いいえ	いくらで車を借りているか	Rp/月
農園労働賃金支払い				
職種	人	平均 Rp/月		
管理	人	Rp/月		
収穫	人	Rp/月		
運搬	人	Rp/月		
全て	人	Rp/月		
その他 ()	人	Rp/月		
肥料				
1年間の施肥回数	回	または	何ヶ月周期に一回か	月
購入先	1.	2.	3.	
肥料の種類	何袋	Rp/袋		
NPK	袋	Rp/袋		
DEA	袋	Rp/袋		
MOP	袋	Rp/袋		
BULMIP	袋	Rp/袋		
その他 ()	袋	Rp/袋		
殺虫剤	種類	Rp/月		
農園までのガソリン	Rp/月			
その他メモ				

5. 半構造化インタビュー

共通した質問事項を幾つか抜粋して掲載する。調査では著者が全てインドネシア語で行った。

- どのように農園の土地を用意したか
- どこからアブラヤシの生産方法を知ったか
- 農園造園の時の費用はどのように用意したか
- 農園を造る前、造った時の仕事はなにか
- アブラヤシ以前の生業はなにか
- アブラヤシを生産する前後での生業の安定性、労働収益性、自律性、はどう変化したか
- アブラヤシ果房はどこに売っているか
- 元焼き畑地はどうなっているか、どこにあるか
- 長期的な乾季の時はどのように生活したか
- 焼畑時代は毎年何 ha の土地に陸稲を栽培していたか
- アブラヤシ生産に関して不安なことはあるか
- アブラヤシを生産して経済的に豊かになったか

など

4) 写真



農作業中の休憩時間



筆者のお別れセレモニーとして、陸稲栽培を行った



インタビューの様子



果房をトラックに積み込む農民



搾油工場に果房を搬入する農民たちのトラック



綺麗に整備された農民の農園



経済階層が「下」の世帯の住居



河をつたって上流から石炭が運ばれてくる



水浴びに向かう村人



果房を買い上げる仲買人



搾油工場でグレーディングする農民



日曜日市場の様子



村を経つ時、ステイ先の母と村人たちと



村の様子



村人に習って屋根づくりをする筆者



調査中、ズドンと音がした先を見ると、ドリアンが落ちていた。村人のご馳走だ。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にご指導とご助言を賜りました。ここに感謝の意を述べさせて戴きます。

指導教授である、東京大学東洋文化研究所 教授 佐藤仁先生には研究の面白さ、問いの難しさなど、二年間で多くのことを教わりました。先生をぎゃふんと言わせる研究をすることが修士課程での一つの目標でしたが、どうやらそれは叶わなかったようです。修了後、早いうちに何かしらの成果を出して叶わなかった目標を達成したいです。

副査を務めて戴きました、東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻教授 山路永司先生には「焼畑」の意味を再考するという本研究の命題に共感戴き、大変勇気づけられました。東京大学大学院総合文化研究科広域システム科学系専攻 教授 永田淳嗣先生には研究科を跨ぎ、一事例から一般化へと議論を展開する技法を教わりました。大変お世話になりました。

研究室のメンターである東京大学政策ビジョン研究センター 講師 華井和代先生にはいつも温かいお言葉の後に厳しくも非常に示唆に富むアドバイスを戴きました。また、研究室の先輩である、麻田玲さんには研究のモチベーションと生きる知恵を、久留島啓さんにはフィールドワークの作法を、マッキーさんには詩的な視点を授けて戴きました。

フィールドワークを実施するにあたり、インドネシアではたくさんの方々にお世話になりました。カウンターパートとして私を受け入れ、フィールドへの道を拓いて戴きました、OPAL チームの Ibu Dyah Ita Mardiyarningsih に感謝いたします。また、同チームの Bapak Bayu Eka Yulian から戴いた、「大学は Science を教えてくれるが、Art は教えてくれない。Art を学べるのはフィールドだけだ。」との言葉はいつまでも忘れないと思います。

フィールドでは、私を家族のように受け入れました、Pak Pilipus とその親族一同に感謝致します。また、下手くそなインドネシア語で質問する私に辛抱強く耳を傾け、様々な知見を授けてくれた、Pulau Pinang 村の人々のおかげで修士論文のテーマを決めることが出来ました。Terima Kasih Banyak !!

東洋大学社会学部 助教 寺内大左先生には学部時代からアブラヤシについて、ダヤックについて、そしてフィールド調査について知見を共有して戴きました。国立環境研究所横尾英史先生には程遠い研究分野ながらも、いつも熱いコメントで鼓舞して戴きました。

国際協力学専攻の同期一同との二年間は本当に刺激的な日々でした。特に修士論文の提出間近には互いを助け合える友がいて本当にありがたいなあと感じていました。また、研究の相談にのってくれたり、校正をしてくれたりした、先輩、後輩方にも感謝しております。また、いつも隣で支えてくれたあなたにもチェーズー。

2015年の留学から、インドネシアという国の懐の深さに甘え、たくさんのことを学ばせてもらいました。早く恩返しができるように、今後とも精進していきたいと思います。

